

も く じ

- 発刊に際して……………鯨坂二夫 2
- 昭和62年度 第5回委託研究助成事業の概要……………3
- 特別論文① 幼稚園・保育所と家庭との連携・協力……………勝部真長 6
- 特別論文② 幼稚園・保育所と家庭との連携について……………岸井勇雄 10

個人研究の部

- ① 団地内の幼稚園として園の主体性を保ちながら園児家庭との……………14
連絡協調をどうはかるべきか
—音楽保育を通して— 北海道北見市高栄幼稚園 遠藤智恵子
- ② 「なわ遊び」の活用と家庭における運動的な遊び方……………20
東京都練馬区上石神井幼稚園 小柳理香

共同研究の部

- ③ 親と教師が深い信頼関係で結ばれ、共通目的を持って幼児を……………26
育てていくことができるようになるためには、どのような方策
をとればよいか
宮城県仙台市めるへんの森幼稚園 多田みちこ
- ④ 子どもの生活や活動を豊かにしていくために、幼稚園と家庭……………37
とがどのように気持を一つにして子どもにかかわっていったら
よいか
埼玉県狭山市しいのみ幼稚園 本木篤三郎
- ⑤ 一人一人の子どもが自然や人とのかわりの中で心身共に健……………48
康に育つためにはどのようにしたらよいか
—家庭と共に育てる保育の工夫—
静岡県裾野市立深良幼稚園 山田成子

-
- ⑥ 聞く耳を育てる……………59
 —お話聞けるがんばりまん—
 静岡県御殿場市立玉穂幼稚園 鈴木道子
- ⑦ 親子のふれあい・体力づくり・自然をみる目の育成……………71
 —園外の自然環境を生かした権現の森・蔵王山登山を通して—
 愛知県渥美郡田原町蔵王幼稚園 河合旻子
- ⑧ ひとりひとりの幼児が身近な環境にかかわりながら夢中にな……………81
 って遊ぶにはどのように指導したらよいか
 —砂や土を使っの遊びを通して—
 富山県新湊市立本江幼稚園 能松富士子
- ⑨ 野菜（畑）づくりを通して、園と家庭と地域のつながりを深……………91
 め、豊かな心と健康なからだづくりをめざす
 福井県福井市立北部保育園 前田喜代恵
- ⑩ 陶器の食器を使用させることによってすべての物を大切に、……………102
 物に対する感謝の気持ちを育てる
 福井県福井市社中央保育園 山田健一
- ⑪ 自ら環境に働きかけ、主体的に活動する幼児を育てる幼稚園……………112
 と家庭との連携
 —育友会活動を通して—
 兵庫県尼崎市立花愛の園幼稚園 浜名弘子
- ⑫ 望ましい知的発達を促すために幼稚園教育の重要性を家庭に……………126
 どう意識づけるか
 兵庫県姫路市立大塩幼稚園 石坪絃子
- ⑬ 地域の自然環境「斐伊川土手」を生かす保育実践……………137
 —いきいきと遊べる子どもの育成—
 島根県出雲市立川跡幼稚園 妹尾延子
-

●特別論文①

幼稚園・保育所と家庭との連携・協力

お茶の水女子大学名誉教授
勝部 真 長

1 地方の時代—大都市における教育の病弊—

この10数年間のわが国の社会の傾向で、憂慮すべきことは、大都市における教育が、いわゆる偏差値中心の教育に走って、知育（悪しき意味の知育で、本当の知育といえない、いわば詰め込み主義の、暗記も的的教育）に傾く点にあるが、その病弊をまぬがれているのは、地方の小都市または農山漁村の教育である。地方の小都市も、大都市をまねて、おいおい東京・大阪・京都・福岡・札幌などの風潮に感染しているところも多いが、しかし自然環境として農山漁村に接続しているところでは、まだ健康な教育感覚が生きていて、知育のみに偏らず、情操教育が活発なところがあり、農山漁村になると、学校をとりまく人間関係もまだ生き生きしており、自然環境にめぐまれているせいか、昔ながらの全人教育（知・徳・体のバランス）が保たれているのを見かけるのは、私ども古風な教育者にとって、ひとつの救いである。

たとえば児童生徒の作文コンクールとか絵画のコンクールなどを催してみても、大都会の学校やその両親たちは、ほとんど応募してこない。かれらは進学にのみ気を奪われていて、試験のさいの点数に役に立たない作文や音楽や絵画には見向きもしないからである。また児童生徒のそういう情操的な営みについて、都会の教師たちはおおむね冷淡であり、それを手伝ったり、激励したりはしないからである。ところが地方の小都市や農山漁村の先生のなかには、昔ながらの、先生らしい先生がいて、子どもの作文や画や音楽について、一生懸命に相手になってやり、指導してくれる、良い先生がいてくれるのである。

今や「地方の時代」ということがいわれ、大都市中心の流れをかえて、地方の経済を活性化させようという、「一村一品運動」とか、地方の伝統文化を復活させようといった文化運動が起りつつあるが、教育の世界においても、この地方主義こそは、今日の教育のゆきづまりを打破して、新しい気運、展望をきりひらくために、ぜひとも必要なのだ、ということが出来る。

今回の幼稚園・保育所の委託研究の応募状況を見ても、そのような傾向に気がつくのである。もちろん東京その他の大都市からの応募もあるが、それは都市の中心部でなく、どちらかというところと周辺部、隣の県に近いようなところのもので、大都市そのものからの応募は少ないのである。

わが国における近代教育、明治・大正・昭和の良き教育の伝統は、むしろ「田舎」とかつてよばれた地域にわずかに残っている、と行ってよいのではないかと思われる。

今回の応募でも多い順にあげると、福井県、北海道、兵庫県、埼玉県、静岡県、山形県、愛

知県、広島県、岡山県、千葉県、島根県という分布になっている。

2 幼保一元化の問題

幼稚園と保育所の一元化ということが叫ばれてからすでに久しい。私自身、もう10年も前に、文部省と厚生省との合同の「幼保問題委員会」に委員として参加して、足かけ4年もの会議を重ねた経験がある。法制局長官の林修三氏が座長で、大妻女子大の平井信義教授が副座長で、この問題を討議したが、結局ハッキリした結論もえられずじまいであった。近年、臨時教育審議会が、やはり幼保問題を議題にのせたが、これも結論は出なかったように思う。おそらく今後も、この問題は無期延期になるのではないだろうか。というのは、厚生省と文部省との権限論争が根底にあるからである。厚生省のほうがかたやみに大きい予算を組んでいる。保育所は、「保育に欠けるもの」への一種の福祉政策であるが、幼稚園は学校教育に連結する教育問題であるからである。

ソ連のような社会主義の国では、問題はハッキリしている。0歳から3歳までは保育所で、それ以後小学校へ入るまでは幼稚園。しかも全部国費でまかなう。しかもソ連では、「働かざるものは食うべからず」であるから、子どもがある、ないにかかわらず、婦人はすべて労働者として工場・商店・事務所などで労働する。専業主婦というものはない、のが原則である。

私が視察にいったスウェーデンの保育所などは、朝の6時頃から夜の8時頃まで開いている。朝は6時頃から工場の煙突の煙が黒々とのぼり、工員は自転車で通ってくる。そのとき子どもは、早くから保育所にあずけられてゆく。したがって、保母さんたちは二交替制をとって、早番とおそ番とに別かれ、早朝から昼過ぎまで、昼過ぎから夜までとに別かれて勤務している。

わが国の場合、幼保一元化がむりだとしても、幼稚園がだんだん保育所化してゆく傾向は避けられないのではあるまいか。つまり女性が、外に出て働くということが、世界の勢となりつつある現状では、専業主婦であることはむずかしくなり、パートにせよ全日制にせよ、母親が仕事にひきずられてゆくのが、避けられないとすれば、保育時間の延長ということは、たんに保育所のみならず、幼稚園にも波及してくるようになるのではあるまいか。

今日いわれるように、三種の神器として、送迎バス・給食・保育時間の延長という3つの条件が、話題になりつつあるのも、時代の変化を示すものであろう。これにどう対処するかは、今から研究しておかなければならないことである。

3 ひるねの問題

西洋の幼稚園・保育所を視察すると、子どもたちに「ひるね」をさせるための設備があるのに気がつく。大体、西洋では、大人でもよく「ひるね」をする。とくにスペイン・ポルトガル・

イタリアなど南欧系の国々はそうである。昼食はふつう午後1時からであるが、それも大てい自宅に帰って食べる。ゆっくり1時間ぐらいかかって、昼食を食べたあと、昼寝を1時間ぐらいとるのである。通勤距離の遠いわが国などでは、考えることもできないことである。私が昔、下宿していた西ドイツの平凡なサラリーマンの家庭では、中学生の男の子は、1時には帰宅して、家人とともに昼寝をとっていた。ただ水曜日だけは、朝の1時間目に「宗教」の時間があり、ミサがあるので、午後の授業が1時間はみだすので、2時すぎでないと帰宅できない。そこで朝、コッペパン一つを持って登校する。するとおひるに学校でミルクの給食があり、コッペパンとミルクでおひるをすまし、2時に帰宅して、また食べなおすのがきまりであった。

そういった生活習慣もあってか、子どもの「ひるね」は健康上必要と考えられているのである。もっともスペインのマドリッドでは、夜おそく11時頃に繁華街を歩くと、小さな子どもが両親に手をひかれて歩いているのを見かける。ひるねのせいで、夜ふかしになるのかもしれない。それはともかく、勤勉な日本人には、子どものひるねの制度は、定着しないのであろう。

4 子どもの認識と触覚との関係

今回の応募論文のなかに、「陶器の食器を使用させる」という方法を実践している保育園の例があったのが、私の注目をひいた。たしかに普通行われているプラスチック食器やアルミ食器とちがって、陶器（やきもの）の食器の厚み、重さ、形などの与える、子どもへの影響は、良い効果を与えるであろう。モンテソーリの子ども理解は、彼女がローマ大学卒の女医であり、女性医学博士の第一号であっただけに、非常に深いものがある。その一つは、子どもの認識は触覚を通じてくる、という原則である。子どもは、なんでも触りたがる。触ることによって、物を理解する。目で見ただけでは満足しない。ラジオ、テレビ、蓄音機など、すぐに触って、ボタンを押したり、つまみをまわしてみたり、ネジを抜いてみたりして、すぐこわしてしまう。さわってみなければ、気がすまないのが、子どもの本性にある。いや子どもだけではない。大人でも触りたがる人がいるので、大てい展覧会や博物館には「触るな」という注意表示が貼りつけてある。人間が挨拶するのに「握手」ということをするのも、相手を認識するのに必要な手段なのかもしれない。そこでモンテソーリの考案した教育用具には、子どもに触らせるように、木製やセルロイド製のABC……や、地図の図形や動物の姿などがあって、子どもはそれらを何度も触っているうちに、理解を深めてゆくのである。

また同じ保育園で、「ぞうり保育」と称して、園児に「ぞうり」をはかせることが報告されていた。これも足の健康に適していると思われる。靴ばかりはいていると、足のウラの土ふまずが発達しない心配がある。足の裏の皮膚感覚は、手のひらの触覚と同様に、幼児の神経組織を刺激するのに有効であると思われる。人間が動物と区別されるのは、直立歩行をするようにな

って、2本足で立つかわりに、2本の手が自由に使えるようになって、道具を発明したところに、人間の文明は始まったのであることを思うと、2本の足の感覚が鋭敏であることは、頭脳の発達にもひびいてくるにちがいない。英語で、「わかる・理解する」ということをunderstandというが、これは「下に立つ」つまり「2本足で立つ」ということであり、日本語でも「足」という字は「たる」とよみ、「満足」とか「充足」の意味をもつ。足の神経を刺激して、発達させることは、幼い時ほど、有効なのではあるまいか。

同様の意味で、埼玉県幼稚園で「裸足・はだしの習慣」をつけることで体力づくりをはかっているのも、一つの方法であるし、また東京の石神井の幼稚園が、「なわ遊び」を考え出し、「なわとび」の競争によって、足の訓練に力を入れているのも、一つの方法であろう。

5 家庭への呼びかけ

こうした幼稚園・保育所での教育の工夫については、母親たちによく説明し、園の方針について周知徹底し、理解を求めることは、もちろん必要なことであろうが、それよりも家庭がかかえている母親たちの、育児についての悩みを、園が推察して、「何か子どものことでお困りのことがありますか」と、よびかけることはもっと大切である。若い母親、はじめての子育ての、経験の浅い母親たちは、多くの悩みをかかえている。何もかもうまくいっている家庭など、そうあるものでない。なにかしら問題を抱えている。

友だちを作れない子、落ちつきのない子、ウソをつく子、園のおもちゃや友だちの絵本をだまって家へ持って帰ってしまう子、弟や妹が生まれたためにヤキモチをやいて、性格的にゆがんでいる子、父親が単身赴任や多忙で夜おそいため、父親の不在感で、登園拒否におちいる子、両親の仲が悪いために幼いながら人間不信になって、何するにも消極的で、やる気を起こせない子などなど、少し気をつけてクラスの子どもを観察していれば、いくらかでも問題児はいるのである。それを、親が相談に来ないからといって、知らん顔をし、面倒だから関わりあわぬよう、見て見ぬふりで、逃げていとすれば、それは良い先生とはいえない。

現代日本の教育の欠陥は、全般的に「見て見ぬふり」が横行していることにある。なるべく関わりあわぬようにして、何か事件が起こると、「ちっとも知らなかった。よく調査します」などと責任回避するのが、校長・園長・教育委員会には多いのである。やはり教育の根本は、「子どもの痛み」に敏感であることでなければならない。子どもたちが、どんなにその小さな胸を痛めているか、そのことを知らずにいる親たちがあまりにも多い。そういう親たちに、その誇りを傷つけないような言葉づかいで、それとなく注意してあげることが、いやしくも教育のプロである以上、教師といわれるものつとめである、というべきではなからうか。

●特別論文②

幼稚園・保育所と家庭との連携について

文部省幼稚園課教科調査官
岸井 勇雄

1 はじめに

幼稚園は学校教育法に基づく学校であり、保育所は児童福祉法に基づいて保育に欠ける乳児又は幼児を保育することを目的とする児童福祉施設であって、各々目的、機能を異にするものである。昭和38年、文部・厚生両省に共同通知を出して幼稚園と保育所の設置については十分に連絡の上、計画的に進めること、及び保育所の保育のうち教育に関するものは幼稚園教育要領に準ずることが望ましいこと等の基本的な考え方を示して今日に至っている。

また50年には行政管理庁から勧告が出され、それに基づいて文部・厚生両省が設置した「幼稚園及び保育所に関する懇談会」は56年に審議の結果を発表、いわゆる幼保一元化は簡単に実現できる状況ではないとしつつ、幼稚園については、(1)未設置市町村の解消、(2)私立幼稚園の保育者負担の解消、(3)いわゆる預かり保育の検討等が提案され、保育所については入所措置基準の適正な運用等が求められた。62年に発表された臨時教育審議会の答申も、ほぼ同様の考え方を示している。

一方、女性の社会進出や幼児教育への要望から小学校入学前に幼稚園または保育所を経験する幼児はほとんど100%に近く、親たちの要求も幼・保に共通し、中にはその区別さえ理解していない場合もある。またいずれに通う幼児も本質的に全く同じ幼児であることから、その保育の在り方や家庭との連携については共通する点が多い。そこで本稿では、無用の混乱や複雑さを避けるため、以下、幼稚園と家庭との連携について論ずることにしたい。保育所については、主として母親の事情と保育時間・期間の長さを考慮して補正する必要があるが、基本的な点についてはほぼ共通すると思われるからである。

2 幼稚園と家庭との連携に関する研究委託

文部省は、昭和60・61の2年度にわたり、全国47都道府県及び2政令指定都市の教育委員会に委託して「幼稚園と家庭との連携に関する研究」を行った。各教育委員会では、父母・幼稚園・学識経験者・行政のそれぞれの立場を代表する人たちによる連携推進会議を設け、その会議が主体となって研究を進めるために原則として5園ずつの研究協力園を指定した。協力園は公私立双方を含むこととした結果、全国で公立145園、私立95園、合計243園となっている。

幼稚園と家庭との連携を推進するためには、一定のねらいの達成を目標にした方が手がかりが得やすいのではないかと考えて、今日的課題をもとに研究分野を例示したところ、ほぼ

それに従う形となり、次の4分野となった。1県では2つの分野をとり上げたところもある。

- (1) 日常生活に必要な技能に関する分野
- (2) 基本的な生活習慣や態度に関する分野
- (3) 自然とのふれあいに関する分野
- (4) その他、健康、情操などの分野

従来文部省においては幼稚園教育課程研究指定校の中で家庭教育との連携についての研究をすすめてきており、特に58～61年度は「幼児一人一人を理解し、個人差に応じた指導を行うためには、家庭教育との連携をどのように図ればよいか。幼稚園と家庭のそれぞれの役割、幼稚園教育の在り方への理解を深める方法等について研究する」というテーマによって行い、実践的研究をあげてきているが、今回の研究委託は、すべての都道府県で行うこと、各都道府県ごとに5園の協力園を設けて行うこと、という大規模なもので、このことには、研究成果の信頼性が高いこととともに、全国的に幼児を核とする幼・家連携の気運を盛り上げる効果を生んだものと考えられている。

3 研究委託の成果の分析

2度の中央連絡協議会を経て、最終的にまとめられた研究成果は、各都道府県（及び参加した2政令指定都市）の報告書として提出されており、現在文部省ではそのとりまとめとともにその成果を全国に還元する方途を研究中である。

また、初等中等教育にかかわる諸問題の検討を目的とした「教育研究開発に関する調査研究委嘱」の一つとして、大場幸夫(大妻女子大学教授)、中田カヨ子(東京成徳短期大学教授)、民秋言(白梅学園短期大学教授)の3氏に委嘱して「幼稚園と家庭との相互信頼関係の形成過程について明らかにし、幼児の望ましい成長発達を促すための幼稚園と家庭の連携の在り方に関する研究開発に資する」ことを求め、その報告書「幼稚園と家庭の相互信頼関係の形成過程について」(昭和62年9月)を得た。この研究の資料は、もっぱら上記研究委託の報告を中心としたものである。以下この報告書に基づき、研究成果の概要を紹介したい。

(1) 連携における幼稚園の役割

243園の実践研究を参考にして連携における幼稚園の役割を検討した結果、次のような実態が明らかになった。

① 園生活を伝える

連携における園の役割を考える時、まず基本としては、親に園生活を理解してもらうことがある。具体的には、幼児期に園で何をすることが大切であるかを、各園の保育方針を通して親

の理解を図ることであるが、ア、園の保育方針を伝える、イ、園の生活を知らせる、の双方ともに必ずしも十分に行われていない実態がある。

② 家庭生活を知る

幼児を理解するにはその生活を知らなくてはならない。園における生活と家庭における生活とは全く異なる場合もあり、家庭生活の実際については、家庭訪問や連絡帳等を通じて十分に把握する必要がある。その内容は、ア、家庭での親子を理解する、イ、親の考えを理解する、ウ、家庭と地域の関連を理解する、等である。

③ 園と家庭相互理解のための方法

園と家庭が信頼関係を得るためには、上記のほか、相互理解の方法として、ア、相互の役割分担、立場を確認する、イ、意見を交換する、ウ、親子で行事に参加する、等が行われている。イについては各種の懇談会、個人面談、アンケートなどがあり、ウについてはきわめて多種の行事が工夫されているが、それが日常の保育をゆがめたり、幼児・親・保育者の負担になるとの声もあり、十分な配慮を必要としている。

④ 親の意識を高める

連携上問題になる親の態度として、ある県の報告で、ア、保護者が果たすべき役割の依存、イ、園や他者への責任の転嫁、ウ、甘やかし、玩具の与え過ぎ、エ、園への要求、不信感、非協力的態度、等があげられており、特に他の園と比べて、やっていないことがあると心配する、遊ばせてばかりで、学校の準備になることを教えてくれないと非難する、等が目立つとされている。これらへ適切に対応し、親の意識を高める必要がある。

⑤ 園生活を見直す

連携の実践研究を行う中で、ア、日常の保育の見直し、イ、保育参観の工夫、ウ、行事の見直し、エ、保育者の資質を高めるための工夫、オ、幼小の連携の必要性、カ、特別に配慮を要する家庭との連携、等が必要となった。それぞれについて多様な工夫がなされ、個別に貴重な実践例となっている。

⑥ 連携上の効果

家庭との連携を図る中で、ア、親の変容、イ、幼児の変容、ウ、保育者の変容、等が見られた。親については、園の教育方針への関心が高まり、幼児との生活や家庭でのしつけを反省し、大切にする傾向が見られた。幼児については、園生活で経験した事象を家庭で再現し、さらに園生活に持ち込んで再現して遊ぶなど、家庭生活とのつながりが増大し、親同士の親しさが増したことと関連して近隣の幼児同士で遊ぶなど地域環境とのかかわりが深まり、分野ごとのねらいの達成も次第に順調となっている。保育者の変容については、幼児の家庭生活への理解とともに幼児理解が深まり、親の信頼を得ることのメリットを体験して自分の保育を客観的に評価・

反省できるようになるなど、多くの成果がみられた。

⑦ まとめ

親が園生活に最も関心をもつ入園時からの連携が大切で、特に幼児の発達の特性や、この時期にどのような生活が大切であるかについて話し合う必要がある。園長や主任だけが親との窓口になるのではなく、保育者全体が常に一人一人の幼児について話し合うことを通じて共通理解を得ていることが大切である。

保育者の側の思い入れに対し、親から「おまかせします」という態度がとられることも多い。これは信頼感の表明であるよりも、無関心や無期待の表れであることが少なくない。むしろ注文をうけられるところから、「ホントで話し合える」という関係が生まれる。連携は円くおさまることではなく、子供を中心に深くかかわり合うことでなければならない。

(2) 「連携」概念の整理と連携の方法

「連携」とは「目的を同じくするものが、連絡・交渉・共同して、その目的達成につとめること」である。この場合の「目的」とは「幼児の成長・発達を助長して、人間形成の基礎を培うこと」である。「目的を同じくするもの」「連絡・交渉・共同するもの」は単純に「園」と「家庭」というようなものではなく、①個々の「家庭」、②グループとしての「家庭」、③家庭（家族）成員一人一人としての「家庭」、④「地域社会」、⑤保育所・幼稚園、小学校など、⑥個々の保育者、という内容をもつ。連携の方向も、一方的作用と双方的作用とがあり、一方的作用から双方的作用への転換、双方的作用の追求・実現こそ、「連携」がかかえる課題である。またそれぞれの要素の組み合わせによる多くの連携パターンが見られる。

4 むすび

生活習慣、生活技能、自然とのふれあいなど、手がかりとして設けられた分野は、確かに園・家連携の具体的な手がかりとして有効であったかもしれない。しかしこうした個々の保育内容の違いとは無関係に、幼児を保育する意味の根源が問われ、そのことが明らかになることと比例して、保育者と親、園と家庭とのきずなが深められたといえる。結語すれば、保育とは何かを問題にすると、園・家の連携は不可欠の要素であることが確認されるのである。巧拙や結果の如何を問わず、園のみで保育を行う時代は過去のものになりつつある。

なお、本稿では「協力」を含めて「連携」という言葉を用いた。

①

個人研究



団地内の幼稚園として園の主体性を保ちながら園児家庭との連絡協調をどうはかるべきか

——音楽保育を通して——

北海道北見市高栄幼稚園
〔園長 遠藤智恵子〕

Ⅰ 主題設定の理由

本園は北見駅の北部約3kmのところを在り、太陽と緑のニュータウンとして高栄地区に昭和46年に開園した。都市化の進む北見市の現代にふさわしい住宅団地の中の幼稚園ではあるがまだまだ自然に恵まれ、幼児教育の環境としては極めて理想的な立地条件を備えている。この中で最近特にさげばれ要望されている「幼児教育の重要性」に応えるために、教育基本法の本質に基づいて、

自主的で創造性豊かな、心身ともに健全で明るい幼児の育成にあたり、人間としての基礎的な習慣の養成につとめる。

家庭では個人の生き方に関し、園では主として集団の生き方に関する指導と育成であることから、この方針実現のために、子どもと専門の先生とが肌を触れ合う集団生活の中で、子どもが豊かにのびるであろう音楽保育を一つの手がかりとして、父母にも理解・協力を求め一貫性のある取り組みが大切であると考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

人間はいろいろな音の世界で生活している。母親の胎内にいる時から鼓動のリズムとの出会いがあり、これが音楽体験の始まりである。幼児は聴感覚がすぐれ、想像力も強い。たくさんの音の刺激の中でそれを聞き分け、感動し、豊かな情操を身につけていくことのできる育て方を考える時、ともすれば技術中心・教師本位になって子どもを忘れた現場を作り出していない

か、その結果として音楽保育を熱心に進めれば進めるほど音楽嫌いの子どもを育ててはいないか、現状を反省し無理なく指導計画を作成しなければならない。

音楽好きの子どもを育てるよう研究努力をしながら、自らも音楽を楽しめるしあわせを味わっている。

Ⅲ 研究の内容と方法

1. 音楽で何を幼児期に育てるか

- (1) 音楽的なことをするのが本当に好きという子どもにしたい

「ピアノに合わせて歌いましょう」

「もういやだよ」にはしたくない

- (2) 一人でする音楽から相手の必要な音楽

より楽しくなる→よい人間関係へ

家庭の中での音楽(レコードを聞く、歌う)

友達同士での音楽

- (3) 音に対する鋭敏さ

2. 育てるにあたって

- (1) 幼児の実態把握
- (2) 基礎資料の作成
- (3) 指導者との相互理解と連携指導
- (4) 指導計画の作成
- (5) 音楽領域の実践
- (6) 家庭との連携

Ⅳ 実践例

幼児の実態を把握し、基礎資料を作成するにあたってチャイルド本社で発行された望ましい経験や活動シリーズ第12巻を参考にした。園独自の年間指導内容を作成し、これを学年ごとに月の指導計画、週の指導計画に細分化、日々の計画へとおろしていった。

〈昭和62年度年中組年間指導内容(音楽領域)〉

1. メロディオンでド〜ソまでの指使いを知り番号・位置を理解する
2. 合奏をする

3. 楽器の使い方を知り正しく扱う

4. リトミック

音符を覚えリズム遊びをする



5. 曲に合わせて身体を動かす

6. いろいろな歌を楽しんで歌う

7. レコード鑑賞をする

<昭和62年度年長組年間指導計画(音楽領域)>

1. メロディオンでド〜ドまでの指使いでキラキラ星・聖者の行進・自由曲

2. 合奏1曲

3. リズムスティック

4. リトミック

2・3・4拍子

音符を覚えてリズム遊びをする



これらを無理なく行うための最良の指導法というのにはあり得ないわけで、それぞれの指導法に特色・長所があり、園の実状・目的に合うかどうかで価値を決めるものと思う。

さて、本園では57年度より情操教育の一環として音楽領域に力を入れた保育を進めているが、過去(58年)に北海道私立幼稚園教育研究大会北見大会において音楽の公開保育をした。

【その1例 5歳児(2年年長)指導案】

男21名 女19名 計40名のクラスである。

1. 単元 「合奏」

2. 単元の目標 いろいろな楽器に親しみ楽しんで合奏する

3. 本日の活動 「器楽合奏」

4. ねらい ・いろいろな楽器に親しみ曲に合った打ち方を工夫する

・自分の役割をしっかりと覚えてみんなで力を合わせて合奏を楽しむ

5. 指導の経過

(1) 4～6月 ド〜ソまでの正しい指番号と鍵盤名を覚える

(2) 7月 ド〜ソまでの正しい指番号と鍵盤を覚え簡単な合奏をする

(3) 8～9月 階名とリズム打ちを覚えて部分奏をする

(4) 10月 「むすんでひらいて」の合奏をする

(5) (本時) 「むすんでひらいて」の合奏を楽しんでする

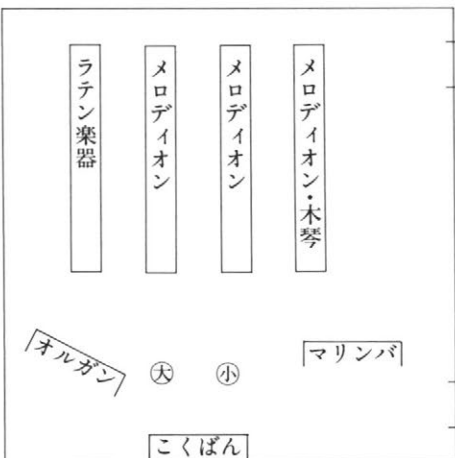
6. 子どもの実態

明るく行動するクラスである。協調性も大いにあるが、調子に乗り過ぎる時もある。遊びの

面ではグループ的で同じ友達でも長続きしていて、リーダーシップを多分にとりたがる子もいる。虫をさがしたり集めたり世話をすることが大好きで観察力も鋭い。音楽に興味を持ち、楽器の使用は積極的であり楽しく参加している。一学期はメロディオン奏で「ひげじいさん」や「オースザンナ」の合奏もした。

7. 本日の指導案

時間	幼児の活動	指導上の留意点	備考
8:30	○登園 ・挨拶 ・身のまわりの始末 ・シールを貼る ・うがい手洗いをする	○視診 元気よく挨拶をかわすようにする。 健康状態をよく見るようにする。	
9:00	○自由遊び	○自分の好きな遊びを選び友達と仲よくさせる。	
9:30	○おかたづけ		
9:40	○お集まり ・挨拶 ・体操	○集合・整列を機敏にさせる。	
9:50	○入室		
9:55	○朝のつどい ・歌 ・挨拶 ・カレンダー ・ニュース ・出席 ・先生のお話	○気持を落ちつかせてからつどいに入る。 ○きょうも楽しく過ごさせるように、元気よくつどいをさせる。 ○どんな時のおかたづけも、使ったものを所定の場所に返すことを話す。	
10:05	○「むすんでひらいて」の歌を歌う ○4拍子のリズムを机の上でとってみる	○繰り返し歌うことにより、自然に身体を動かし、4拍子のリズムであることに気づかせる。 ○みんなができていないか見て、できていない子には指導する。強拍部に気づかせる。	
10:15	○楽器の用意をさせる ○各パートに分かれて練習する	○楽器の扱いはていねいにするよう言葉がけをする。 ○各パートを見て楽器の正しい持ち方や打ち方等を確認しながら曲に合ったリズムのとり方、強弱を工夫するようはたらきかける。	(使用楽器) マリンバ マラカス カウベル タンブリン

		<p>○環境設定</p> 	<p>ギロ オルガン メロディオン 木琴 大だいこ 小だいこ</p>
10:40	○全員で合奏をする	○自分のパートをしっかり覚え、役割の大切さを知らせる。	
10:50	○おかたづけ	○使った楽器を所定の位置へきちんと返しているか確認する。	
11:00	○トイレへ行きお帰りの支度 肝油 帰りのつどい	○落ちついた気持で降園準備ができるように配慮する。	
11:15	○降園	○視診 元気よく挨拶をかわし帰す。	

保育の公開だけで終わったが、音楽保育を進めるにつれ、幼稚園と家庭における幼児の姿の情報交換の場が多く持たれるようになった。

情報交換の場として主なものをあげると、

(1)家庭訪問 (2)保育参観(設定保育・自由保育・お弁当保育等) (3)運動会 (4)生活発表会 (5)楽しい音楽会 (6)お別れ音楽会 (7)お誕生会等々、どの園行事をとっても園と家庭の連携をはからなければやりこなしていけないものばかりである。

幼児教育における音楽保育は単なる音楽だけの分野ではないと確信を持っていえることである。

【ミュージックベルの実践例】

個人差や発達段階に応じて指導できるミュージックベルにも取り組んでみた。

指導のねらいは「みんなで楽しんで演奏する」「みんなで分担して演奏する」ことにおいた。

1. 指導の過程

(1) ベルを使って遊ぶ。

- (2) 階名で歌う。
- (3) 曲を音階のパートに分けて自分の担当のところをならす。
- (4) 繰り返しの練習でタイミングを合わせる。

2. 指導の結果

- (1) 子ども達の中に集中力・協調性・責任感が身についたように思う。
- (2) 物事に感動する心が見られるようになった。
- (3) 何事にも一生懸命さが見られるようになった。
- (4) 遊びを通してベルに充分親しめなかった子はむしろ負担を感じていたようだ。

V 研究の結論と今後の課題

- 音楽のねらいを年間通して実現するには、保育の場に即した細かい計画が必要となってくる。
園での保育がその場かぎりの無計画なものであってはならない。
- 計画したことで子どもの活動が他に発展展開してしまうことが多くあるが、生き生きした生活ができるよう教師は柔軟性ある保育ができる能力を磨く必要がある。
- 時代の流れにより歌も変わってきているが、その中での曲の選択を考えなければならない。
そして歌うことの楽しさ、演奏の楽しさを感じとらせるためには、幼児の心理や発達段階を考え、より一層の楽しさを加えることが大切である。このことが社会性の発達をうながすことになるように、音楽の領域に終わることなく、自然や言語、絵画製作、健康等の領域と常に深い関連を持たせ指導していくことを合わせ考え、今後の研究の課題としていきたい。

②

個人研究



「なわ遊び」の活用と家庭における運動的な遊び方

東京都練馬区上石神井幼稚園
〔教諭 小柳理香〕

Ⅰ 主題設定の理由

「なわ遊び」は、遊び方によっては幼児にも非常に楽しく遊ぶことができる。しかし、「なわとび」と言ってしまうと、運動種目を指し、幼児には、手と足の協応動作がなかなか上手にできないので難しいものになってしまう。

そこで、なわとびとしての運動能力を身につけさせることよりも、むしろ「なわ」を利用して、幼児がいろいろな遊びができるように工夫し、家庭で両親、兄弟と一緒にできる遊びを考え、さらに健康的な子どもを育てたいと考えた。

「なわとび」を教材として取り入れた理由は、①六領域にわたりねらいを達成することができる、②家庭の狭いところでも実施することができる、③運動の基礎練習となる、④親子で体力作りや心を通い合わせることができる、⑤いくつになっても体力保全に役立つようにしておいてあげたい、などをあげることができる。

運動という考えではなく、遊びの中での道具として「なわ」が、どのくらい幼児を楽しませるか、家庭でのなわ遊びがどのくらい幼児の遊びの中に入っているかを考え、主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

最近の子どもは、「体格はよくなったが運動能力は低下している」とか、「足腰が弱くこぼりやすい」という声を耳にする。そこで幼稚園、家庭での運動的な遊びの中に、リズムカルな「な

わとび運動」を取り入れて、子どもの運動能力を伸ばし、明るく健康的な子どもを育てるにはどのようにすればよいのか、またどのように指導をしていけばよいのか、具体的な方法を探して、実践していくことを、ねらいとした。

Ⅲ 研究の内容

1. 本園の各クラス、週1回（40～60分間）の体操正課（月4回）での指導を基に行う。
 - (1) 年長児の目標として、短なわにひっかからずに、リズムカルにとべること。
 - (2) 年中児の目標として、長なわにひっかからずに、リズムカルにとべ、さらに短なわでもひっかからず、自分のリズムで連続してとべること。
 - (3) 年少児の目標として、長なわが自分のリズムでとべること。
2. 外遊びの時間を利用し、体操正課での諸動作を反復させ、指導内容と効果をさらに深める。
 - (1) 朝の自由遊び時間は、学年、クラスを問わず、保育者が長なわを回し、子どもがとんだり、その周りでは、短なわをとぶ子もいる。
 - (2) 昼の自由遊び時間は、その日に体操正課を行ったクラスの子どもと一緒にとぶ。特に、とべない子どもに対し、もう一度説明しながらとばせる。
3. 家庭での反復

なわとびは、広い場所がなくとも家の周りでもできるので、家庭にも短なわを用意して、とぶタイミングと、連続してとべることを目的とし反復練習させた。家庭でのなわとびの様子は、子どもから聞くだけで実際には見られなかったのが残念だった。

Ⅳ 研究の方法

1. 体操正課での「なわ遊び」

体操正課で、長なわ、短なわ遊びをしながら基本的なとび方、リズム、応用的なとび方、競争を通じて、子どもの敏しょう性、リズム感覚を身につけさせる。


2. なわとびの片づけ

なわとびを使った後の片づけ方の指導として、なわとびが結べ、片づけられるようにし、手先の感覚と集中力を身につけさせる。これは3年または2年という幼稚園生活の中で、できればよいということにし、子どもには、決して急ぐことはないことを言い、保育者はきめ細かく個別指導し、家庭に帰ってからもなわとび以外にハンカチ、タオル、ヒモなどを使い練習するように言葉がけをする。子どもも、自分一人で結べるようになると、なわとびをとべない子ど

もでも、結び方を見てもらおうと、なわとびをとび始めた。そこで私達保育者は、結び方もほめると同時に、とべない子は、なわの動作だけでもほめてあげると、保育者の言葉かけが励みになり、何回でもとんで見せてくれるようになった。

V 実践事例

1. 学年別指導内容（時期 11～12月にかけ、5回の体操正課に基づく）

	子どもの活動と目標	指導内容
年少児	<ul style="list-style-type: none"> ○長なわ遊び 「なわとび」の導入として、なわに慣れさせ、保育者と一緒に遊ぶ「なわ遊び」を楽しんで行くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ○へびとび（図1） 子どものへびから次第に大人のへびへ変化する。 ○なわくぐり（図2） ゴム段の方法でなわにさわらないように通る。 ○しっぽマラソン（図3） 保育者の腰になわを結び、しっぽにし、それを追いかけさわる。 <p>図1 図2 図3</p> 
子どもの様子	<p>へびとび、しっぽマラソンは、キャーキャー言うほど喜び、体も動かし、「なわ遊び」を通してなわとびを楽しみ、寒い時期での外遊びとして活発になり、リズム感覚も身につけ出し、1月頃になると教えてもいないのに短なわを使い、前とびの連続をとべる子どもも出てくる。</p>	
年中児	<ul style="list-style-type: none"> ○長なわ遊び ひっかからず、リズムカルにとぶことができること。 ○短なわ遊び 自分のリズムで連続してとぶこと。 ○後片づけ 	<ul style="list-style-type: none"> ○連続3回とび→5回とび 保育者の回すリズムに合わせてとぶ。 ○名前とび とびながら自分の名前を言う。 ○自分のなわとびを結ぶ。（写真1, 2, 3）

子どもの様子

長なわ遊びでは、とぶ位置が一定しないため、なわを追いながらとぶので忙しくなり、ひっかかってしまった。名前とびは、10回とぶというより(回数)、名前を言いながらとぶので、子ども達もひっかからないようにゆっくりとしたリズムだが、とぼうとする様子が分かる。後片づけの結び方は、なわをただまるめるだけの男の子が多いのに対し、女の子はきれいに結ぼうといろいろ思案しながら結んでいた。短なわ遊びでは、短なわを使いとぶことが初めての子どもが多いが、指導が終わると女の子は保育者にとんで見せる子ども、子ども同士数を数え合う姿も見られた。最後には、みんなの前で一人ずつとび、上手になったことを言ってあげ、年長組になってもがんばることを約束した。

(写真 1)



(写真 2)



(写真 3)



年長児

○長なわ遊び

○短なわ遊び

ひっかからず、リズムカルにとべること。

○後片づけ

○いろいろなバリエーションをとぶ。(大波小波、郵便屋さん、ひっかかるまで数を数える。)

○500回とび挑戦

前とび、後ろとび、片足前とび、片足後ろとび、二重とびを各100回、合計500回とぶ。

○自分のなわとびを一人で結ぶ。

子どもの様子

長なわ遊びの大波小波では、一定のところとぶのではなく、ぐるぐる回ったり、座ったり子ども達で変化をつけていた。短なわ遊びでの500回とびは、正しくとぶ子どもはいないが、子ども自身すぐなわとびをとんだ、という感じはしている様子で、何か自信なくとんでいた子どもも、「500回！500回！」と言っていた。年長児は、体力もあり、持久力、リズム感、跳躍力が養われてきているので、応用のきくとび方や、遊び方ができるようになり、競争心も出てきた。

2. なわとびの目標回数と最高回数(短なわ)

最高回数をとんだ子どもは、すべての学年で女の子だった。

	目標回数	最高回数
年少児	3回	38回
年中児	10回	98回
年長児	30回	147回

目標回数はあくまで数だけのうえでの目標であり、その子どもにとり、3回からだんだん増えていき、リズムカルにとべるように、その都度ほめてあげ、次の目標、課題を指してあげるようにした。その言葉がけにより、子ども達がやる気を持

って取り組み、なわとび遊びを楽しいものと感じてほしいと思う。また、友達、仲間と協力し、励まし合って、さらに上達することを期待した。

3. なわとびがとべない子どもに対する指導

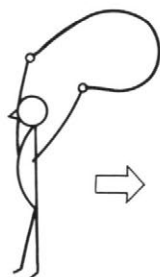
(1) 指導段階 (図4)

図4

A.



B.



C.



D.



「かっこいい用意」をとらせ、「この用意が上手だととべるよ」と保育者は子どもに声をかける。(図4-A) ⇨ なわとびを前に回す。(図4-B, C) ⇨ 「ピョン」ととぶ。(図4-D)

この後半の「前にきて→ピョン」を言いながら、ゆっくりとばせる、この時両足一緒にとべず、片足ずつになるので保育者も子どもの正面に立ち、一緒にとんでみせる。とべるようになってきたら、「前→ピョン→前→ピョン」と言葉を少なくして、リズムをとらせ、とばせる。とべないからと言って、あきらめず2回でも連続してとべたら、ほめてあげ早くとぶことよりも「両足でピョンと、とべるかな」と、問いかけながら指導する。両足でとべるようになると、「先生、見ていて」の声があちらこちらから出てくる。

(2) とべない子どもが好むなわ遊び (図5)

これは片手になわを持ち、ヒュンヒュンと音がするまで回すものでなわとびの導入の遊びだが、とべない子どもは、この音で自分がとべた気になるためか、好んでやりたがる。年長児の男の子が好み、これを見ていた年少児の子ども達から、「危ないよ」と声がかかった。とべない子どもが多少なわとびに対し、興味を示している点ではよいと思ひ、次の段階の「とぶ」という点に子どもの目を向けさせなければならない。ここで留意点として、広い場所で、他の子どもとぶつからないようにやらせる。

図5



4. 組み合わせなわとびの遊び方と種類

(1) 基本的ななわとび

〈前とび〉 なわのリズムが、子ども達に理解できるように、「前にきて、ピョン」と覚えさせ、またなわの音を利用して、「パッチン、ピョン」と声を出しながらとぶ。

〈後ろとび〉 腕を前から後ろに大きく回し、リズムは「後ろ、ピョン」とした。

〈片足とび（けんけんとび）〉 片足で、「ケン、ケン」と言いながらとぶ。

〈ばってんとび〉 腕を胸の前で交差させてとぶが、この動作ができず好まない。

〈二重とび〉 主に年長児がとび、134名中、5名がとべた。リズムは、前とび2回の「ピョン、ピョン」に、手を早く回す音の「ビューン」を加え、「ピョン、ピョン、ビューン」とした。

(2) 組み合わせなわとび

〈かけっこなわとび〉 かけっこしながら、前とびをする。これは、その場でのなわとびがとべない子どもでも、かけっこという運動はできるので好んでとぶ。

〈ダブルなわとび〉 短なわをとびながら、長なわも同時にとぶ。主に年長児の女の子が好み、それを見ていた年中児、年少児までとぶ練習を始めた。

さらに、二人で短なわをとびながら、長なわも同時にとんだ。



Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

今の子ども達は、住宅の問題、遊び場の問題など、狭い場所で遊ばなくては行けないが、大人が心配するほど子ども達は困っているとは思えず、上手に遊んでいる。が、そこでアドバイスをし、遊ぶ方法を教えてあげると、もっと遊び仲間が増え、楽しいものとなるだろう。

本来幼児の遊びは、大人の束縛から離れ自由に遊ぶことを喜び、特に戸外に出て走り回ったり、とび回ったりすることに喜びを感じ、これは運動する喜びとも言い換えられる。なわとびを使うことにより、とぶ楽しさ、友達と遊ぶことに喜びを感じるようになり、寒い時期の外遊びとして、いろいろなバリエーションが、子ども達の間から生まれてきた。

本園では、父母会の都度、子どもがとぶ様子を見学し、参加してもらい、その後家庭に帰っても、なわとび遊びを楽しんでもらえるよう、依頼してきた。今後は、「なわとびのがんばり表」などを作って、家庭とのつながりをもっと持つようにしたいと思う。そして、運動遊びのアドバイザーが私達保育者であり、両親であり、子ども同士であると思うので、今後も子ども達が、興味を持つような指導を考えたい。

③

共同研究



親と教師が深い信頼関係で結ばれ、共通目的を持って幼児を育てていくことができるようになるためには、どのような方策をとればよいか

宮城県仙台市めるへんの森幼稚園
〔代表 多田みちこ〕

Ⅰ 主題設定の理由

当園では、各家庭との連絡に、週1回の園長手書きの園だより、クラスだより、連絡帳、電話などを利用している。しかし、それらは、園から家庭への一方通行であることが多く、実際に親が子育てにどう生かしているのか、また、園の教育目標を理解しているかは、わからない。

入園時に保護者に示される教育方針には、望ましい幼児の姿、それに近づくための教育目標が明記されている。しかし、それを胸に描き続けて過ごしている父兄がどれだけいるだろうか。父兄にアンケートをとってみた。覚えていた父兄は4歳児で77%、5歳児で74%の結果が出た。(6項目から選択)園に入れば園に任せっぱなしの父兄もあるし、どんな子どもに育てたいのか、そのために、どんなことをしているのかははっきりしていない父兄も多い。

そこで、親と教師が共通目標を持って、親に信頼され手をつなぎ合って幼児を育てることができるようになるためには、どのような方策があるのか考え、実践するためにこの主題を設けた。

Ⅱ 研究のねらい

親と教師が信頼関係を持ち、幼児を共に育てていける態勢になるためには、園行事や普段の生活の中で、教師と親が気軽に声をかけられる間柄になれることが必要である。次に共通目的を持てるようになるためには、全園、学年ごと、クラスごと、個人のレベルでの適切な連絡、また父兄の啓蒙が必要であると考えた。そこで次の2点にねらいを絞った。

1. 親と教師間が深い信頼関係を結べるようになるための園行事を探っていく。
2. 共通目的を持てるようになるためにはどんな方策があるのか探っていく。

Ⅲ 研究の内容と方法

1. 「連携に役立つ園行事」の年間計画をたて、内容とねらいを整理する。

保育参観、個人面談など年に数回ある行事の場合、その時々で内容を考えてしまい、年間を見通してのねらいがなかったことが昨年の反省である。そこで、その時期に必要なと思われるねらいを考え、内容を練った。(別表参照)

2. 親と教師が深い信頼関係を結べるようになるための有効な園行事の在り方を探る。

(1) 保育参観

親と教師が同じ視点から幼児を見れるようになり、共通の目標を持てるようになるためには、実際の幼児の活動の様子を見ることが一番よい。この機会を生かした懇談会を設けたり、保護者同士での意見交換により、自分の子育てを見直す機会ができる。また、参観となると母親の参加が主になりがちである。家族ぐるみで子どもを育てていけるように「父親参観」を年に2回行い、成長の様子を知ってもらう。年2回のうち1回は、祝日にし、日曜出勤の方にも参加できるようにする。甘やかしがちな祖父母にも様子を知ってもらうための「孫を見る会」も設けた。また参観だけでなく、参観後には、必ず子育てに役に立つような講演会、懇談会を設けた。

(2) 懇談会

懇談会は、学期の終わりに子どもの様子を話し合う「学級懇談」、誕生会に誕生児の母親と園長が園全体の問題や園に対しての要望を話す「園長懇談」、教師が園を出て地域の親達と話し合う「地区懇談」を実施した。

(3) クラス行事

各クラスで年に3回、学級委員と教師が中心となって企画する、親子で親しみ合えることをねらった行事である。この行事を通して、おかあさん同士や教師とも親しくなることができ、お互いに、声をかけやすい関係となる。内容は、各クラスごとユニークな企画が多い。(親子ゲーム、親子でカレーライスを作る、いも煮会など)

3. 共通目的を持てるようになるための方策

(1) 園だより

園だよりは、週1回の園長手書きのたよりである。内容は、行事予定、全学年のカリキュラム、父兄に考えて欲しい新聞の記事、子育ての知恵などが載せてある。園の方針を示した

り、父兄を啓蒙するための内容である。ただし、情報が多過ぎて、父兄が読み落とすこともあるが、忙しくて本を読む暇のない父兄にも好評である。

(2) 学年だより

年に10回発行されている。内容は、園だよりに示されたカリキュラムを、具体的な姿を織り込んで細かく伝える、年齢に合った推薦したい絵本を紹介する、他のクラスの様子を知らせ、横の関係を持たせる、などである。学年で発行するので、年齢に合った平均的な幼児の姿を伝えられる。

(3) クラスだより

園だより、学年だよりの他に、各クラスがクラスだよりをそれぞれ年30回程度発行している。内容は、クラスの遊びの様子を子どもの名前が載るようにして、知らせている。我が子の交友関係を知ることができ、クラス全体の様子を知ることができる。連絡帳に載った父兄の記事を載せることで他の父兄からの反響がかえってくるなど、教師からの一方通行にならないで、父兄が紙面を利用して考え合う場となれるように工夫している。

IV 実践例

1. 地区懇談会

我が園でも初の試みであるが、親に来園してもらうのではなく、教師が地域に出て懇談会を開いた。親達は親近感を持ち、出席人数も多くなった。そのため親の本音を聞くことができ、活発な意見交換が行えた。

(1) 5月28日 第1回地区懇談会 (午後3～5時)

ねらい おかあさん方と教師が話し合い、お互いの考えを知り、理解し合える結びつきを持つ。

参加人数 49名 (全園児の20%参加)

形態 地区を3か所に分け、希望者を募り、懇談をする。父兄は都合よい会場に参加する。教師は全員参加し、3か所に分かれる。

内容 基本的な生活習慣における子育ての悩みを話し合った。教師から一方的に意見を述べるのではなく、母親同士でアドバイスし合えるように会を進めた。

考察 参加できなかった父兄から、「もう一度開いて欲しい」との要望も聞かれた。園との連携に対しての意識が高まってきたと評価したい。この会を通して、子育てについて話し合える、親同士の仲間作りの機会ができたようだ。

(2) 12月9日 第2回地区懇談会

ねらい 第1回目は、初の試みということもあり、おかあさん方と仲よくなることが主なねらいであったが、2回目は、子育てで今関心の多いテーマを掲げて、より多くのおかあさん方に参加してもらうことをねらった。

参加人数 54名

形態 前回と同じ

内容 進級・進学を控えて、聞く態度を育てるには、どうしたらよいか。

日頃の、子どもの話を聞く態度について思うこと、家庭での配慮、園で話を聞くことができるようになるために行っていること、その配慮を話し合った。

地区懇談会が終わった後、親から連絡帳での相談が多くなった。懇談会が刺激となって、子育てに対する関心が、一層高まった。

〈おかあさんの連絡帳から〉

(12月9日)

きょうは御苦労さまでした。「聞く態度を育てるには」を中心課題とした懇談会、とても興味深く参加し、聞くことができました。普段、家庭において将一が私に話す時、中途半端な聞き方をするととても嫌がり、「ちゃんと聞いて」と念を押します。従って、私は顔と顔を、心と心を向かい合わせて話を聞くように心がけています。

ところが、朝夕の忙しい時間、私の方から将一に話す時、その子の状態も把握せずにただ私の要求を押しつける時があります。例えば、「早く御飯食べなさい。早く着替えなさい」等々。実に子どもの心に響かない言葉が親の口ぐせになってしまっているのかと、先生やおかあさん方の話を聞きながら反省してしまいました。

また、将一はよくいろいろなことを質問します。「どうして?なぜ?」その時、私は答えることに懸命になり、話の要点を整理することや心をひきつけるような話し方に欠けていることにも気づかされました。

きょうの懇談会では、子どもの聞く態度というよりは、親の話す態度がいかに大切であるかということに改めて考えさせられた90分でした。

従ってこれからは、

- ① 何を話せばよいのか。
- ② 心の中にどう打ち込むか。心をひきつける。
- ③ 話の間が大切。(子どもに考えさせる時間を与える。)

⇩

聞く力は考える力を育てること。余裕を持って話す。

ということに気をつけながら、心と心を向かい合わせながら話しかけ、また、話を聞いてみようと思いました。ありがとうございました。

- ・母親は自然の中で、思いっきり体を使っての活動であったので、童心にかえって遊びに熱中していた。体と共に心まで開放されたのか、今まで口を開いたことのなかった母親同士がオリエンテーリングを通して親しくなることができた。
- ・母親同士が親しくなったことで話し相手ができて、気軽な仲間になった。子育てについて悩んでいることなど話題になり、「うちの子もそうなのよね」と比べたり、安心したりしていた。

〈おかあさんの連絡帳から〉

(10月1日)

きょうはとても楽しい(おいしい)クラス行事でした。9月23日の運動会には、妹のひばりが病気のため出席できず、肇に「申し訳ない」という気持ちでしたが、きょうの行事でバンカイできたかな!? 子どもと一緒に花を摘み、虫をつかまえ、どんぐりや栗拾い。どんぐりを見たのは10年ぶり。いやもっと前かしら。私も子どもにかえったみたいにはしゃぎました。ゲームの後の「いも煮」のおいしかったこと、また来年もしたいですね。

しかし、夕方頃には足の痛み!! 運動不足のせい、それとも年のせい。これは子どもには内緒にしておきましょう。

3. クラスだより

園だよりでは全園児の親を、学年だよりでは各学年の親を対象にしている。クラスだよりは、この2つを受けて親に子ども達の具体的な姿を示している。子どもの実際の遊びの様子を親に伝え、どのように教育目標に近づいていっているのかを知らせる。細かく知らせることで、親達に子どもの成長の芽に気づいてもらえた。我が子だけでなく、クラスの子どもの遊びの様子も手にとるようにわかるので、父兄に好評である。クラスだよりを発行するにあたっての内容、留意する点を探った。

(1) 親しんでもらえるように工夫する。

- ・簡潔な表現を使い、専門用語は使わない。
- ・読み手を考えて、誠意のこもった文字を書く。
- ・カットを工夫して、読みやすい紙面にする。

(2) 幼児の遊びを生き生きと伝え、教育目標に照らした書き方をする。

- ・幼児のつぶやき、幼児同士の会話を多く載せる。(教師は常にメモを持つようにする。)
- ・幼児を実名で載せる。(母親に公平感を持たせるため、全員の名前を載せる。)
- ・当たり前な遊びの様子でも、父兄が子どもの成長に気づけるように、教師の視点を示す。
- ・母親に子育てのヒントになるような記事を載せる。

〈クラスだよりから〉

— 鬼は外 福は内 —

●ダンボール箱とあき箱を使って鬼作り

みんなが持ちよったあき箱やダンボールで、鬼作りをしました。友達と協力し合い、グループごとに一つずつ作りました。自分の意見が通らず、ケンカしながら行っているところもありましたが、すぐに仲よし!!

また、「ここは〇〇ちゃん、こっちは私」というふうに分担して作っているグループもありました。みどり鬼、あか鬼、しましまパンツをはいた鬼と、おもしろいものができあがりしました。つのおおへそに工夫がこらされ、部屋に飾っているだけで楽しくなりました。

鬼って本当にいるの？

(絵本「おなかの中に鬼がいる」を読んだ後に……。)

先生 「みんな鬼を見たことある？」

じゅんや君 「先生、鬼っていないよ。あれは伝説なんだよ」

しんさく君 「大昔はいたと思う」

としろう君 「鬼が島にいると思う」

なおこちゃん 「えーっ！ 鬼が島なんてどこにもないよ」

じゅんや君 「そうだ、伝説だよ」

先生 「でも、こここのところに（胸に手をあてて）ときどき見えたりするよ」

だいすけ君 「あっ、ぼくも……しちゃいけないことをやれやれっていうんだ、鬼のやつ!!」

とても素直な子ども達。大丈夫!! 君達の胸の中はあまりに温かすぎて、鬼が入り込むすきがないようです。

4. 父親懇談会

2月の父親参観日に、幼稚園と家庭の連携の在り方についての研究発表大会が全父兄を対象として行われた。引き続き父親懇談会を行った。PTA会長、副会長が司会をし、「父親と子どものかかわり方について」の意見交換が行われた。

(1) 懇談会で出た父親の意見

- ・自分の子どもの頃を考えると父親の存在は大きかった。仕事柄、平日に子どもと顔を合わせられる日は、ほとんどない。そこで、昼休みか夕方5時頃に家に電話をかけて、子どもときょうのできごとを話し、コミュニケーションをとっている。(4歳児の父親)
- ・園からのプリントは必ず目を通して。家庭のしつけをしっかりとしていなければ、園では異和感をはたらくであろう。家庭でやるべきこと、園でやることをしっかりと分担していきたい。(3歳児の父親)

・子どもと友達関係で対話しようとしたが、難しい。それよりは、父親は叱るものであり、母親がフォローしていく役割を全面にアピールした。社会が大きくなるほど、子どもは、いじめいじめられしながら、もまれて成長するのがよいと思う。(5歳児の父親)

(2) 懇談会が終わって、父兄からかえってきた反響

〈園だよりから〉

●両親参観日に出席しての所感あれこれ

- 他の方々のお話を、主人にも聞いてもらいたいものと思いました。最近、育児におとうさん方も積極的に参加し分担して、その大変さ、おもしろさを肌で感じるようになってきているようですね。その基となる夫婦の話し合いもずいぶん多いのでしょう。家庭の在り方や家族の在り方が少しずつ変化してきているように思いました。我が家はちょっとダメです。(K)
- 家庭と幼稚園のコミュニケーションについての研究発表はおもしろくうかがいました。子どもと親、その他何につけてもコミュニケーションはとても大切な部分であると思います。園で作っているいろいろな「たより」は、文字によるコミュニケーションとせずいぶん役立っています。文字に書くということは、いろいろと整理した結果のもので、とてもよく伝わってきます。ホールで、数人の方のおもしろい、また勇気のあるお話を聞きましたが、その他の方(私も含めて)も、きっと自分のことについて思いをめぐらせたに違いありません。そういうチャンスは少ないものだと思います。(A)
- 私も平日は子どもと接する時間はほとんどありません。みなさんの話を聞いて、自分だけじゃないと正直行って安心しました。特にしていることはありませんが、朝「行ってくるぞ」と頭をなでてやります。帰るとみな寝ています。(E)
- きょうホールでのお話を聞いていて、この頃は家庭でのこと、小さなできごとなら毎日何かしらあるはずなのに、書くほどのこともないや、とついつい連絡帳がお留守になっていること反省しています。親が子どもの園での様子を知りたいように、先生の方は家庭での情報を欲しがっているということがよくわかりました。(S)
- 二年もめるへんに通っているのに、館山公園に登ったのは初めて。普段の運動不足が出て、子どもにひっぱられるかたちになりました。景色もよく、暖かくなったら弁当でも食べたいと思います。友達同士の話し方が家とはずいぶん違うのに驚きました。(S)

V 研究のまとめと今後の課題

当園の園長は、「幼稚園は、幼児の教育半分、おかあちゃんの教育も半分なんだ」というのが

口癖である。しかし、父兄を啓蒙していくということについては、教師自身ためらいはあった。園長ならでのことと決めつけていた部分もあった。しかし、一人一人の子どもの成長を見守り、伸ばしていくためには、やはり、親自身も成長していかなければならないこと、それを気づかせていくのも教師の努めであることを痛感するケースに何度かつき当たった。親と教師が互いに意見を言い合える関係になるために、手探りながら進めてきた実践が少しずつではあるが、父兄の間にも浸透してきている。保育参観の後の講演会なども、初めは忙しいから、と参観のみで帰っていた父兄も、外部からすばらしい講師を招いたりなど、回を重ねるにしたがって参加人数が増えていった。特に目立ったのが父親の参加である。父親参観日には、クラスの5分の4は父親が参加してくれるようになった。子育てを母親にだけ任せずに、家族全員が子育てにかかわっていかうとするようになった姿は高く評価したい。もちろん園主催だけでなく、PTA主催の文化講演会もあり、積極的に参加を呼びかけたり、子連れで参加できるようにと、託児を分担したりといった、活発な委員会も他の父兄を刺激させる重要なポイントになったことも見逃せない。また、地区懇談会など、担任クラスでない父兄とも話し合いの時間を持つことによって、多くの父兄と接することもできた。全園児を全教師で保育していく機運が育ったのもこの研究のおかげである。園側で一体となって、父兄に対処していくうちに、教師間の共通理解を深めていったのである。保護者の啓蒙を意識しながらも、逆に保護者から教わることを、気づかせてもらうことを意識し共に学ぶ姿勢を保っていかなければと思っている。

今後の課題として、保護者の幼稚園に対する理解、信頼がより深まり、地域社会から信頼され、気軽に交流できる場となるよう努力していかなければならない。子どもの喜び悲しみを共感できる感性豊かな教師になるよう研究精進しなければと思っている。

具体的な今後の当面の課題として次のことを考えている。

1. 話し合いの機会を多く持つようにすると共に、その計画的な内容の構成をはかる。
2. クラスだよりは、年間の見通しをもって発行できるようカリキュラムを考える。
3. 話し合いに出席できない保護者のために、その対策を考える必要がある。
4. 母親から、家族全体、地域にまで浸透する方策を検討する。

〔別表 年間の園行事のねらいと活動内容〕

日時	行事名	ねらい	活動内容
62年 4月14, 15日	保育参観 クラス懇談会	おかあさん方に、入園して間もない幼児の様子を知ってもらう。	自由遊びの参観。不安定な幼児に対しての教師の接し方、幼児の遊びの様子を知ってもらう。懇談会では、クラスの保育目標を伝え、PTA役員を決める。
4月29日	PTA総会 給食参観	給食の様子を知ってもらう。	PTA総会が主になり、おやつを食べる様子を参観した好き嫌いの多い幼児の親から給食に対しての相談をこの時期多く受けた。
5月28日	第1回地区懇談会 *実践例1参照	おかあさん方、教師が話し合い、お互いの考え方を知り、理解し合える結びつきを持つ。	基本的な生活習慣における子育ての悩みを話し合う。教師から一方的に意見を言ってしまうのではなく、母親同士でアドバイスをし合えるように会を進めた。
6月1～ 18日 *実質9 日間	家庭訪問	おかあさん方とのコミュニケーションを深める。 幼児の日常生活での具体的な状態を把握し、幼児の理解を深める。	学年ごとに、基本的な生活習慣で話し合うポイントを事前にプリントで知らせ、話し合いを密なものとした。
6月7日	第1回父親参観日	園になじみの薄いおとうさん方にも園での様子を知ってもらう、幼児教育の認識を深める。	3歳児……親子体操（肩ぐるま、でんぐりかえし） 4歳児……親子ゲーム大会（ロンドン橋、イス取りゲーム） 5歳児……ワリ箸鉄砲作り その後「父親と子どものかかわり方について」クラス懇談会を持った。
6月13, 14日	学級懇談	一学期の成長の様子を具体的に話し合い、成長を確かめ合う。	担任からクラスの様子、保育について話す。父兄からの意見をとり上げて懇談する。夏休みの有意義な過ごし方について懇談する。二学期以降の行事の父兄手伝いの依頼。
10月21日	孫を見る会 講演会	幼稚園教育のねらいと現状を理解してもらい、とかく過保護に	祖父母達の主役になるように、昔の遊びを用意した。自分の孫だけな

		なりがちな祖父母達に考えてもらう機会を作る。	く、他の子どもにも快く教えてくれた。おばあさん方も用意したペンダントを受け取って満足して帰っていった。お年寄りへの親しみがわいたようである。
10月19～ 31日 12月21～ 23日	3歳児、4歳児の 個人面談 5歳児の個人面談	子ども達一人一人について保育のねらいに照らし合わせて、どのように成長してきたのかおかあさんと話し合う。今後の課題について、教師からアドバイスする。	一人約20分で話し合う。学年ごとに話し合いのポイントを学年だよりで知らせておいたので、密な話し合いをすることができた。
12月9日	第2回地区懇談会 *実践例1参照	子育てで今の時期、関心の高いテーマを掲げて、より多くのおかあさん方に参加してもらう。	テーマ「進級進学を控えて、聞く態度を育てるにはどうしたらよいか」。日頃の、子どもの話を聞く態度について思うこと、家庭での配慮、園で話を聞くことができるようになるために行っていること、配慮を話し合った。
63年 2月11日 (祝)	第2回父親参観日 幼家研究発表大会 父親懇談会 *実践例4参照	父親同士の意見の交換による子育てへの理解を深める。	おとうさんと一緒に体を動かして遊ぶ。 3歳児……巧技台を使って遊ぶ 4歳児……園庭で親子ゲーム（鬼ごっこ、騎馬戦） 5歳児……隣接した児童公園で親子オリエンテーリング

④

共同研究



子どもの生活や活動を豊かにしていくために、幼稚園と家庭とがどのように気持ちを一つにして子どもにかかわっていったらよいか

埼玉県狭山市しいのみ幼稚園
〔代表 本木篤三郎〕

Ⅰ 主題設定の理由

幼児教育が重要だといわれている昨今、私達をとりまく社会には様々な情報が氾濫し、知育偏重の行き過ぎた刺激を親と子に与えているように思う。しかし、そういったものを一方的に与えることで子ども達の生活が本当に豊かになっているのだろうか。自主性の芽をつんでいるのではないだろうか。また、子ども達の遊びが貧しくなっているといわれているが、それと同時に子ども達の心まで貧しくなっているのではないだろうか、という疑問から子ども達の探究心や発想を引き出し、生かしていくためには、子ども達自身が自主的に活動できる場が必要であると考え、本園は「遊び」を中心とした活動の中から、子ども達の生活意欲、自主性、創造性、社会性の芽を育ていこうと日々の保育にあたってきた。

しかし保護者の側からは、日常生活や遊びを大切にされた保育よりも知的教育を望む声が多く、「ただ遊んでいるだけで何も教えてくれない」などの意見が聞かれた。保護者の不信感は子どもにも悪影響を及ぼすのではないだろうか。保護者に園の方針を理解し、信頼してもらわなければ、望ましい成長はありえない。そのためには、保護者と保育者が「子どもを見る目」を一つにし、気持ちを合わせていくことが大切であると考えた。

Ⅱ 研究のねらい

「幼稚園」という場が、初めての社会生活を経験することによって知的教育のみならず全てにわたって基本的な生活習慣を身につけるところであること、そして、自由遊びの時間は、様々な

ことを子ども自身が主体となって感じ、学び、成長していくための必要不可欠な時間であり、活動と活動のつなぎや放任の時間ではないということを保護者に知ってもらうために、また、子ども自身の変化や内面の成長を知ってもらうために、園が家庭にどのようなにはたらきかけていったらよいか、その方法を考える。

Ⅲ 研究の内容と方法

まず、保育者同士の和を大切に、みんなが同じ方向をめざせるよう、職員間の話し合いの場を多く持ち、一人一人の意見、考えを出し合って共通理解をはかった。そして職員が³一丸となって、家庭と園との接点を取り上げる中で次のような具体的方法を行っていった。

1. てがみの改善（クラスだよりの発行）
2. 出席ノートの活用
3. 行事の再検討
4. 保護者会の改善と内容の充実
 - (1) 保育参観
 - 一斉活動の参観
 - グループ参観（年少4歳時クラスのみ）
 - 自由参観
 - (2) 懇談会
 - (3) 個人面談
5. 家庭訪問

また、新しい試みを行った時には、その都度アンケートをとって保護者の生の声に触れる機会をできるだけ多くし、その変化を見ながら検討を重ねていくことにした。

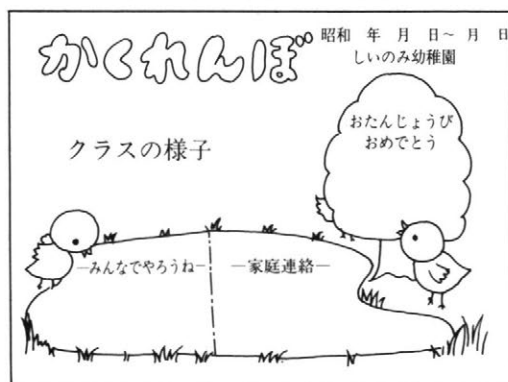
Ⅳ 実践例

1. てがみの改善

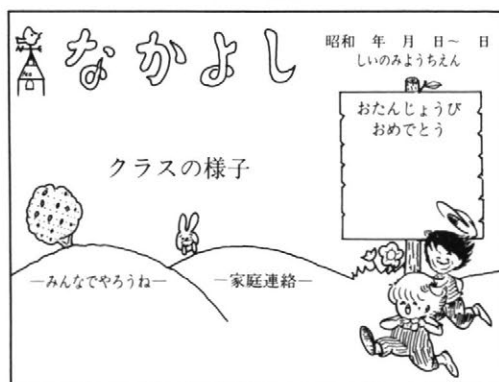
以前は、家庭へ連絡事項を伝えるだけの手段としててがみを発行していたが、内容の統一された学年だよりにだけではクラスの細かな様子や変化が伝わらないと考えた。そこで、今までの週1回のがみだけに限らず、保護者に伝えたいことや訴えたいことがある時に随時、クラスだよりを発行するようにした。内容も、クラスの遊びの様子や子どもの様子を紹介しながら保育者の子ども像、保育観をおりませたり、子どものつぶやきを載せたりなどクラスの味を出し

てクラスだよりのよい面を生かすようにした。また、内容によっては文献や新聞記事を利用し、子どものことを共に考えていけるような内容の充実につとめた。

昭和62年度 年少クラスだより



昭和62年度 年長クラスだより



●クラスだよりより

——入園当初の様子——

先生にも、お友達にも、幼稚園という場にも大部慣れてきた子ども達。「先生、お外に行ってもいい」「うん、いいわよ」と喜んで外に飛び出して行きます。お天気のよい日、しいのみ幼稚園のお砂場は年長さん、年少さん、様々な色帽子で超満員です。お水をくんで流し、川みたいなものを作っている子、はだしになってその川の中を歩いている子、プリンを作ったり、ゼリーを作ったり、先生にも食べてもらおうとまた同じことを繰り返す子……。でも、すぐに全員が心を開いて遊びこめるものではありません。誘っても「わたししない。よごれるもん」と見ている子もいます。「先生、はだしになっちゃったの」と先生の泥だらけの大根足に目を丸くしている子もいます。私達は、少しずつはたらきかけ、マシュマロのような白い肌を、日にやけた黒い肌になりたいと思っています。

——ものを作る楽しさ——

朝、登園して急いで支度をする、すぐ「先生、また〇〇の続きやる!!」と、しっかり必要な道具をそろえて、嬉々としてやってくる子どもの姿に、先生の方も心をあおられているこの頃。

目で見、心で感じたものを白い紙に表現する楽しさ、材料を選び、方法を考え、工夫しながら、一つのものを作りあげていく楽しさを子どもと共に実感しています。

「冬眠」をテーマにしたボード(壁の飾りつけ)では、毎朝「きょうも冬眠の続きやる!」という子がいて、それもよく見ると、それまでほとんど絵など描かなかった子もまざっている、びっくりさせられたのですが、作ってはロッカーによじのぼってはりつけてきて、「土の中」がいっぱい入りきれないほどでした。この時、動物を描く楽しさを知った子ども達は、「先生、今度はお面作りたい!」という一人の発言にすっかりその気になって、今度はお面作りに大忙し。ついに動物図鑑を囲んであれもこれもとページをめくり、ハイエナ、紀州犬、オリックスなどと随分難しいのも出てくる始末。先生もとても勉強になりました。これが「たつのこたろう」のお面作りにつながり、劇ごっこも始ま

りました。すると今度は「銀河鉄道を作ろう！」という声が出て、絵具やダンボールも必要になりました。

この時あまった絵具がはじきえの大流行となり、自由画帳の減りが急に早くなって、3冊目、4冊目に入る子も出ました。この後、お楽しみ会が近づいてきて、これまでの波にのって、サラダ島の大きな海賊船をはじめ、様々な小道具作りに熱が入りました。一つのを何個も作っては一番気に入ったものを本番用と決め、練習用(?)と共にたくさんの小道具が氾濫しました。入園当初は、おり紙を「おそば」に切るのも途中で曲がって短くなってしまったと泣いていた子が、今はダンボールのかたさにも随分慣れ、小さなハサミでジョキジョキ、何でも切っています。毎日のように誰かが持ってくるあき箱も「たまる」ということがなく、いつの間にか大きなあき箱入れは今もカラッポ。ガムテープもセロテープもあつという間になくなってしまい、子ども達の消費力には驚くばかりです。

楽しいことがどんどん増えていきますね!

伝承遊び

冬、特にお正月前後のこの季節は、伝承遊びの盛んな時期です。たこあげ、こままわし、おてだま、かるた、はねつき……どのおうちでもお正月にはきつと一つや二つ家族そろって昔ながらの遊びを楽しまれたことと思います。幼い頃、親に教えてもらった遊びを懐かしさと共に我が子に教えたという経験をお持ちの方もきつと多いことでしょう。親から子へと何代も受け継がれてきた遊びが現代の私達の中にも息づいている——とてもすばらしいことですね。

幼稚園でも第三保育期が始まると、こま、かるた、はねつきなどのお正月遊びの道具が子ども達の遊びの中に仲間入ります。

お正月におうちでやったことがあるという親近感から、あるいは初めてこれらの遊びと接した好奇心からしばらくは園庭もお部屋もお正月遊びでにぎわいますが、それでもこうした遊びに積極的に取り組む子は年々少なくなっているようです。特にこまはひもを使って回すということを知らない子がいたり、中にはこまを見るのも初めてという子もいます。おてだまやあやとりなども同様で遊び方を知っている子はごく少数です。それでも友達や先生がやっているのを見ると、興味を持ってやり方を教わりながら一生懸命に取り組む姿も見られます。

ただ、こうした伝承遊びの多くは、一対一で手とり足とり伝えるという性質のもので、幼稚園では一人一人に納得のいくまで教えるということがなかなかできません。おとうさん、おかあさん、小さい時そのまたおとうさんやおかあさんから教えてもらった遊びをぜひ子ども達に教えてあげてください。昔を思い出しながら、あるいは幼い頃にかえって子どもと一緒に懐かしい遊びをするのもスキップのよい機会になるのではないのでしょうか。

こまが初めて回った時の誇らしさ、あやとりを一つ覚えた時の嬉しさ、羽根がカチンと羽子板に当たった時の快い響き、そんな気持はいつまでも子どもの心の中に残っていくことと思います。そして、また、子ども達が大人になった時、自分の教わった遊びを次の世代へ伝えていってくれることでしょう。

—泥だんご作り—

今、年長・年少ともおだんご作りが大流行です。本館（職員室のある方）の裏は所狭しと、子ども達と先生でいっぱい。普段は小動物のお墓を作りに行くか、かくれんぼのかくれがにすがるいしか行かないこの場所で、みんなで座りこんでおだんごを作っているのです。

この泥だんご、なかなかコツと根気と研究心があるのです。先生がいくらがんばっても子どもの方が上手だったりします。年長さんのおにいさん、おねえさんに教えてもらったり、先生と一緒にいろいろと試しているうちにかたくピカピカのおだんごができるようになりました。

どこの土でもいいというわけではありません。粒子の細かい本館の裏の土がいいのです。土を集めるとお水との配合。ぐちょぐちょと手で割合を確かめながらおだんごを作ります。次に白砂。かけてはころころ、かけてはころころと手の中で大切にころがしていくうちに、やわらかかったおだんごは次第にかたくなっていきます。そして手のひらでやさしく磨きをかけるとつやが出て光るようになり、また白砂をかけ磨きをかけるのを繰り返しているうちにかたくかたく鉛の玉のようなおだんごができるのです。

「先生、ここのお砂、いい砂だよ」「○○ちゃんのおだんご、くろびかしてきた」「先生、さわって見て」……

おだんごを持って帰る子もいるでしょう。「ほら!!」と子どもがおかあさんに見せたとき、一言「まあ、きれい。さわってもいい？ どうやって作ったの？」と言ってあげてみてください。きっと子どもは目を輝かせ、こと細かく説明してくれることでしょう。

—みんなの力—

運動会の季節がやってきました。

年長の遊戯は、毎年運動会のしめくりであり、大きな山場です。今年年長の遊戯を考え始めた時、「組体操」をやってみたいという考えが出てきました。しかし、組体操は、合図一つで子どもが動くものであるということ、子ども達の自由な発想が生まれにくく、それを生かすには難しい題材であること、子ども達がそれぞれ自分のイメージを持ち、全体の中での自分の役割を理解することが難しいということ、どちらかという見栄が気になる「組体操」の中で、それよりも子ども達の取り組みを大切に、子どもの側に立った指導がしていけるのか……などたくさん問題点が出てきました。何回も何回も話し合いを重ねた結果、まず運動会での結果にこだわらず、その経過においていかに子ども達が楽しんで取り組んでいけるか、それを第一目的におき、意味のわからないままだ合図だけで人形のように動かされてしまう状態は避け、なるべくイメージしやすいようにしていこう、そして、大勢で同じ動作を行った時の美しさ、みんなで力を合わせて一つのものを作りあげる感動をこの活動の中で感じとってくれたら……という考えに行きつきました。

20日（木）に御狩場小学校5・6年生のマスゲームの練習を見学に行きました。各クラスで遊びとしてやってきたものを大きなおにいさん達が高いレベルで演じている姿に、かわいい歓声をあげ、拍手をしていました。最初、真剣な目つきで見つめていた子ども達も2回目になると思い思いに2人組、3人組を作りおにいさん達の演技を実にうれしそうにまね始めました。大きいおにいさん達と同じこ

とができたという自信は大変なもので、翌日の活動ではみんな「次はどういうふうにするの?」「これやりたい」「もう1回やろう」とやる気充分でした。今、私達も子ども達と一緒に未知の積木を積み上げていくところです。この活動を通して、子ども達はどんなことを吸収し、昇華していくくれるのでしょうか。また一歩、前進してくれることを信じて……。

2. 出席ノートの活用

毎月末、一人一人の子どもの様子や変化したこと（よい面を中心に）など具体的な場面を取り上げて書き表し、子どもにもわかるような書体で各家庭に伝える。次へのステップとして親子に大きな影響を与えると考え、保育者は、このノートを親と子への心のかけ橋として大切に考えている。

●出席ノートより

[7月 Mちゃん（4歳児）の場合]

とうとうまえまわりがひとりですることができるようになりましたね。おめでとう。まいにちまいにちこつこつとちょうせんしてがんばっていたんだものね。つづけてしりあがりにもとりくんで、すぐにできるようになってしまったときには、ほんとうにびっくりしました。あきらめずに、さいごまでがんばりとおすってたいへんだけど、とってもたいせつなんだってことをまなちゃんにおしえてもらいました。ながいおやすみにはいってしまいますが、9がつには、またまなちゃんのがんばりをみせてくださいね。たのしみにしています。

[11月 M君（4歳児）の場合]

ハイパークのどろのがけでは、いままでこわくてのぼれなかったところもがんばって、じぶんひとりのちからでのぼりきっていました。「せんせい、おりのこわいな」っていったら、「だいじょうぶ、まこちゃん、こわくないから」と、てをつないでくれました。どろぼうとけいさつごっこがだいすきで、まいにち、げんきにはしりまわっていましたね。いつもねばりづよいおまわりさんのまこちゃんです。なわとびにもときどきちょうせんしてがんばっていました。とぶごとにうまくなっているみたいだよ。またがんばりましょうね。

[11月 A子ちゃん（5歳児）の場合]

このごろ、いろんなかみしばいをつくってみんなをたのしませてくれているあさみちゃん。かわいらしく、すてきなおはなしに、せんせいもほれほれしています。このまえは、かにをみせてくれてありがとう。かにのなかよしかぞく、だいじにしてあげてね。しょうかくんれんのはきは、すごかったね。もえているひもこわかったけど、ほんもののしょうぼうしやきゆうきゆうしやにのれたこと、しょうぼうふくをきせてもらえたこと、おじさんたちにサインまでしてもらって、はりきっていたあさみちゃんでした。よいおもいでになったことでしょう。お

ちばでいろんなたのしいえをつくったりかもめがっそうたいをつくってえんそうしたり、なにごとにもはりきりまんてんですね。

〔1月 H君（5歳児）の場合〕

いろいろなおしょうがつあそびをしましたね。かるたやはねつきもたのしそだったけど、むずかしいこまには、なんどもちょうせんしているひろきくん、あきらめないでつづけてえらいね。マラソンもかもめではいちばん。まいにち、まいにち、じぶんからはしているひろきくんのがんばりには、せんせいもかんしんするばかりです。なんでも「つづける」っていうのは、たいへんだけどがんばってね。あやとりのうまさにもびっくりしています。こんどおしえてね！

〈1がつ30にち〉 ついにやりました！とうとうこまがまわったのです。やったね、ひろきくん！ あんなうれしそうなかお、いままでにないくらいです。もちろん、せんせいもだいかんげきです。まいにちつづけたかがありましたね。これからも、なんどもちょうせんして、さいごまでがんばるきもちを、もちつづけてくださいね。

〔1月 N君（5歳児）の場合〕

きよじんたいせいぶでやったやきゆう。なおやくんは、びっちやーをやってくれたんだよね。じぶんから、なげたいというきもちを、おともだちにはっきりいって、なげたたまも、ちからづよかったです。たくさんのおともだちと、げんきにあそべるようになりましたね。

3. 行事の再検討

でき上がりや見栄えにとらわれすぎて子ども不在の形式だけの行事にならないように、過程の大切さを保育者同士で確認し、日々の保育の延長として行事をとらえたうえで、子ども達が遊びの中でどのように行事に取り組んできたのか、などを事前にてがみで伝えていくようにした。

また、行事を終えた後に、保護者から感想を寄せてもらい、保護者の考えや理解の程をその都度、確認していくようにした。

4. 保護者会の改善と内容の充実

(1) 保育参観

子どもとの接し方や園での様子を知ってもらうための場として参観をとらえ、内容を多様化して、それぞれのねらいを明確にした。毎月1回行う。

〈一斉活動の参観〉

一斉活動の時間に参観してもらうという今まで通りの形ではあるが、その日の活動のねらいや見てもらいたい点をあらかじめてがみで知らせておくようにした。

●保護者から寄せられたアンケートより

○海の絵を描いたところを見せていただきました。先生のお話でだんだんと想像をふくらませていって着手。キョロキョロあたりを見回してまねする子があると思うと、マイペースでのんびり時間など気にしていない子あり。興味深く拝見。日常の忙しい中でつい急ぐことを強いてしまいますが、ゆったりと考えさせてから物事をやることの大切さを感じました。

○21日に行きまして、絵具を使ったり先生から海の話を聞いたりしている子どもの様子、ほほえましく思っただけで見学させていただきました。絵具の水をこぼしたり、先生の一人一人に対しての接し方、大変参考になりました。先生のご苦労が少しずつ分かってきたように思います。これからもお手数をかけることと思いますが、先生よろしくお願い致します。

〈グループ参観〉

あらかじめ作っておいた5,6人のグループで、半日保育の日に自由遊びを参観してもらう。半日の活動を共にして、遊びの様子や生活ぶりを見てもらう。事前にグループ参観の意図を話し、身軽な服装で遊びの中に入ったり、死角の場所から観察したり、様々な方法がとられている。降園後、30分程話し合いの場を持ち、子ども同士のかかわり、遊びの取り組みや展開などを中心に質問や感想を出し合い、一人一人が心を開いて話ができるような時間になっている。

●話し合いの場で出たおかあさん達の声

- 遊ぶ時はみんなばらばらのようだが、生き生きしている。何かをする時はまとまっているように見える。
- 童心にかえったようで楽しかった。
- 自分から積極的にいろいろなものに取り組めるようになった。
- 友達のことを自分のことのように考えていてほほえましかった。
- 友達に負けたくないがんばる姿がみられた。
- 遊びにちゃんと子どもなりのきまりがあつてびっくりした。

〈自由参観〉

決められた時間の参観に対し、一日の流れの中で見たい場面や活動を自由に参観できるように一日門戸を開放する。年に1,2回設ける。お弁当の時間に人気が集まる。

●保護者から寄せられたアンケートより

(年少自由参観)

○時間が自由で、私達にとっても助かりました。食事のきまりもこんなやり方で食べているのかとほほえましく思い、きまりがよくみんながそろそろまで待っているところは私も見習わなくてはと思います。のんびり座に落ち着くまで待つことに致します。

○遊びから一日のプログラムに移るところを見たくって10時過ぎに行きましたところ、部屋中いっぱい好きなことをしていた子ども達。おもちゃ、絵具などがスーっとかたづき、一つの輪になってみんながいすに座りました。その間、大きな声は何も聞こえません。みんなのこの成長ぶり、驚きました。私の一番見たかったのがここです。想像では「おかたづけ」のピアノの音と共にかたづけるのかな……とと思っていましたが、もっとみんなおにいさん、おねえさんでした。それに紙芝居を見る態度、とっつりっばでした。だれも一言も話さず静かに聞いていました。雨だったので、外の遊びが見れなかったのが残念でした。一步下がってゆったりと見ていてくださる先生の態度、みんなをここまで成長させたのだと感謝致します。幼児教育、集団生活の大切さを感じました。

(年長自由参観)

○一生懸命に作ってだんだんと動物達が生まれていくのを見て、感心しました。今まではでき上がった動物園しか見ていないのでどんなふうにして作るのかと思っていましたが……。大人にない子ども達の目から見たままの素直なやさしい動物達。また、完成した「かもめ動物園」が楽しみです。

(これでは手、足、着ているものに絵具がついてもしかたないですね。)

○子ども達一人一人の個性が見えて、とても楽しく参観させていただきました。一人で黙々とやっている子、みんなでワイワイやっている子、みんな楽しそうで一生懸命やっている姿を見ることができました。バラバラのように見えてしっかりみんながかかわり合いをもちながらやっているように見えました。かもめさん27人、大人から見ると子ども達が一人一人友達の作品でさえもはっきり認めることができるということが「すごいい」というふうに映りました。しいのみ幼稚園の子ども達をのびのびと遊ばせていく方針、これからも大事にしていってください。

(2) 懇談会

保護者と保育者のふれあいの場、保護者同士の交流の場としての機能を生かせるように内容の充実をはかった。一人一人の心が開かれるような会をめざす。

○全員そろうまでの間、園で子ども達が遊んでいる手遊びや歌を歌ったりして待つ。

「幼稚園でこんなことをしてるのね」と好評。

家に帰って、親子のスキンシップに活用している家庭もある。

○全員そろってから、まず簡単なゲームなどをして親睦を深めてもらう。

ゲームをして気持をほぐし、保育者からの一方的な懇談会にならないように配慮する。

○その後、子どもの様子(遊び、かかわり、役割、意欲など)、様々な成長の過程、及び今後の課題などを話し、保護者の生の声にも耳を傾ける。

○意見の交換の場として、保護者の側から質問や提案がなされるような雰囲気作りを心がける。

〈例〉お弁当の献立、帰宅時間の取り決め、持ち帰った空箱製作の作品をどうしているか、小学校入学にあたって小学生の子どもがいる保護者の経験談を聞く(年長)など。

(3) 個人面談

保護者と保育者が一対一で約15分、話し合いの場を持つ。家庭においての情報も得ながらその子どもの持つ個性を大切に考え、園での様子を具体的に話す。よい面をさらにのびしていけるよう話をする。短い時間ではあるが、より一層の充実をめざして努力している。

5. 家庭訪問

子どもや保護者との距離を縮めるための最初の接点として、入園した年の5月に実施。園の中で話すのとは違い、家庭に訪問するということは、そこが保護者にとって精神的に落ち着く場であるため、真実に近いよりよい情報、保護者の真意がうかがえると考えた。遊びの中から、子どものよい面を引き出していくための第一歩として、情報を交換する。

V 研究の結論と今後の課題

本園では、遊びの重要性を強く認識し、日々の保育にあたってきた。しかし、保育者が見る「子どもの遊び」と保護者が考える「子どもの遊び」に大きな差、すれ違いがあることに気づいた時、それをどう正確に保護者に伝え、理解してもらうか、ということを考えてきた。子ども自身の生活や活動を豊かにしていくためには、あらゆる分野、あらゆる面からのほたらきかけや様々な要素が複雑に絡み合っているものであるが、今回の研究においては、その複雑に絡み合っているものの中から「遊び」の重要性を伝えるために、園と家庭との連携という一要素を取り上げ研究を進めてきた。

1. てがみの内容を改善したことについては、日常的なできごとをありのままに、またチャンスを見逃さず家庭に伝えることができることによって、得たものは大きい。懇談会のような数少ない限られた場だけで口頭で伝えるよりも、新鮮味、真実味があり、はるかに印象的であったようである。この積み重ねの中から保護者は、園での子どもの様子を知り、さらに保育者の考えていること、伝えたいことを察して、てがみを楽しみに読んでくれる人が多くなった。
2. てがみがクラス全体に伝えていくものであるのに対し、出席ノートはクラスの活動の中でその子どもがどのように取り組んでいたか、具体的に書き表し、個人あてに伝えていくことができる。そのため、一人一人のよい面や変化した面を書くことによって保護者の子どもを見る目に大きな変化が感じられた。「おはようブックを親子共に楽しみにしています。大切な宝物です」という感想も聞かれ、感激することもしばしばだった。しかし、月1回それも限られたスペースの中でより端的に、子どもや保護者に伝えていくためには、何よりも日々の記録の大切さを痛感する次第であった。
3. 行事に関してはその本当のあり方を保護者と保育者が共に考えていくことができ、遊びの

中からみんなの気持ちが一つにまとまっていく過程や子ども達の気持ちの盛り上がりや気迫を感じてもらえ、感想を寄せてもらえるようになったのは大きな収穫であったと思う。

4. 保護者会においては保育者側からの一方的なものとならないよう配慮し、お互いに率直に話し合い試行錯誤を繰り返す中でよりよい形が確立されつつあるようだ。その中で感じたことは、保育者がいかに聞き上手になり相手を受け入れながら、自分の真意を押しつけることなく訴えていくことが大切であるかということだ。

今回の様々な改善は、他に数多くある要素の中のほんの一例にすぎない。まだまだ検討すべき点は多々あるだろう。しかし、保護者の遊びに対する考え方や、子どもを見る目に大きな変化と理解が出てきたことは、確かなようだ。もちろん考え方というのは十人十色、まして大人相手に強要することはできない。それぞれの方針があることは、お互い認めなければならない最低のルールであろう。この研究を通して、子どもを仲立ちに保護者と保育者が少しずつ歩みよれたように感じている。そして、お互いの考えを理解しようとするところから信頼が生まれ、それが子どもの成長に何らかの好影響を与えることができたのではないだろうか。子どもの人格を尊重すること、保護者の人格を尊重すること、そしてお互いに訴え、受け入れ合いながら望ましい方向へ前進していくことの大切さを感じている。

今後もこの研究を基盤に、よりよい方向に進んでいくことができるよう、さらに研究を進め幹を太くし、また新たに違う分野の枝葉も増やして、日々の保育に励んでいきたいと思う。

⑤

共同研究



一人一人の子どもが自然や人との
かかわりの中で心身共に健康
に育つためにはどのようにした
らよいか

—家庭と共に育てる保育の工夫—

静岡県裾野市立深良幼稚園
〔代表 山田成子〕

Ⅰ 主題設定の理由

裾野市の東北部に位置する本園は田畑も多く残る田園地帯であるが、近年工場の進出により住宅も増加し、園児の保護者はほとんどが企業勤務者で占められている。また、保護者の家庭の4割は祖父母と同居しており、概して穏健で教育熱心な気風があり、教育については関心を示し好意的である。生活も安定していて、子どもに落ち着きを出させている。

しかし、田園地帯とはいえ、国道や大型農道などかなり交通量の多い道路や鉄道が南北に縦断しており、家庭では安全を考慮して、子ども達を外で遊ばせることが少ない。従って、自然に親しんで遊ぶことも少なく、近隣の子ども達と集団で遊ぶこともあまりない状態である。

本園の周囲は比較的的自然環境に恵まれており、園の近くを水のきれいな小川が流れ、神社の森や雑木林の丘も近くにあり、小動物も多い。遊びに使える市のグラウンドも近くにある。

このような環境や、熱心な家庭や地域の人々の協力や支援をもとに、周辺の自然環境を生かし、個人差のある一人一人の子どもの心身をたくましく健康に育てるにはどうしたらよいか。どのような生活体験や遊びの用意をすることが必要か。こうした観点から本主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

本園の園児の実態から、「自分からやろうとする子、身体を動かして遊ぶことが好きな子、話を聞くときは聞けるけじめのある子、しかも思いやりのある子」に育てることをねらいとし、次の1～3をまず中心に据え、次に4を配置して教育計画を編成した。

1. 自然環境の中で子どもが思いきり活動できる園外保育
2. 友達との交わりの喜びや葛藤体験をもたらす集団遊び
3. 心の健康や思いやりの心を育てる縦割り保育、高齢者との交流行事など
4. リズム運動、動・植物の飼育栽培、本の読み聞かせ、地区のお年寄りや祖父母との交流行事
特に園外保育により自然や友達とかかわりあいながら、生き生きと自分を発育させること、特に縦割り保育において年長・年少のかかわりを進めることにより、年長児は年長らしく自信をもって行動し、年少に対する思いやりの心もち、年少児は年長児のモデリングで自然に園になじみ、よい影響を受けて伸び伸びと活動できる、また、思いやりの心が育つことに重点をおいて研究を進めた。

Ⅲ 研究の方法

身体と心を豊かに育てる活動の精選や、指導方法の工夫など環境構成に力を注ぎ、家庭・地域と連携して子どもを育てる工夫をする。

1. 研究実践活動

- (1) 園外保育、縦割り保育を最も重要な活動として年間計画及び指導計画に位置づけ、年間計画表と専用地図を作成して実施する。
- (2) 体力増進につながる集団遊びの年間計画の作成、縦割り活動をおさえ、年長・年少合同で遊ばせるなど工夫して思いやりのある保育を実施する。
- (3) 身体を動かすことが好きな子になるよう、リズム運動をとり入れて実施する。
- (4) 遊びながら体力のつく、竹や木を使った遊具の作成、隣接の土手にロープをかけて、登り降りできる場にするなど環境を設定する。(調整力をつけることをねらう)
- (5) 健康な生活、安全な生活を送るために必要な基本的な生活習慣をわかりやすく繰り返し指導し、身につけさせるようにする。
- (6) 毎日降園時間前の10分間を本の読み聞かせの時間とし、情操と心の安定と話を聞く態度を育てる。
- (7) 飼育栽培を通して思いやりの心や動・植物への親しみをもたせる。
- (8) 心を育てる人とかかわりのある経験を多くもつ。

2. 家庭・地域との連携

- (1) 親子の行事など、保育に同時参加する機会を設け、理解を深める。(親子アスレチック遠足、親子トリム、地区別参観会、親子指人形作りなど)
- (2) 栄養理解を深める食生活講演会、講習会を行う。(講習会は、弁当・おやつ作り実習)

- (3) 母親研修で絵本の与え方を学び、本を使っての心のふれあい、子どもの心にしみこむ物語などを学習する。さらに、園で行っている絵本の貸し出しの主旨を知らせる。
- (4) 意識を高める親子交通安全教室や当番制の登降園指導を行う。(交通安全マスコット作り、交通安全に対する立札、木の刈り込みによる見通しの確保)
- (5) 園だより・クラスだよりの工夫、連絡帳の活用をはかる。(認め、励ます保育で子どもを伸ばす。がんばり表、虫歯治療奨励の賞状、プールカードなど)
- (6) お年寄りと交流する機会をもち、心を育てる。(敬老会への参加、おじいちゃん、おばあちゃんと遊ぶ会、園児と畑作りなど)

IV 実践例

●園外保育

1. 園外保育の目標

- (1) 広々とした所で心身の解放を心ゆくまで味わい、情緒の安定をはかる。
- (2) 年少児の世話をすることにより、思いやりの心を育てる。
- (3) 長く歩くことや、木登り、高い所から飛び降りる機会などを通して、勇気と決断力、体力を養う。
- (4) 周辺自然环境に親しみ、地域の様子を知る。
- (5) 花摘みやどんぐり拾いなどで、季節感や自然の美しさに感動する心を育てる。
- (6) 身近な社会の事象に、興味や感心をもつ。
- (7) 集団行動のしかたを知り、約束を守って行動する。
- (8) 遊びの中で、安全な遊び方や、危険な所に近づかないことを身につける。
- (9) 道路を歩きながら、交通安全指導をする。

2. 実践例1 虫とり 10月1日 場所 中学校裏

二学期が始まり、運動会も終わった秋晴れの日、深良中学校裏の草地に虫とりに出かけた。行く途中の自然の様子に、あちこち目がいく。「わあ、あんな所に川がある」「先生の小さい頃には、この川で泳いだんだよ」「えっ、うそー」「だってプールなんて、幼稚園になかったもの」「ふーん」と感心する。

また、しばらく行くと、今度はこんにやくの木。「お茶の木の間の、あの変なのなーに」「それね、こんにやくだよ」「えっ、こんにやくって、これどうやるとこんにやくになるの」「これを抜いてね……」みんなが、首を伸ばして集まってきた。

途中で信号を渡って歩道が反対側になると、みんなで次々と教え合い、年長児が車道側にな

り手をつなぎ直していった。中学校へ着くともう大騒ぎ。「わあー、すごーくたかーい」「あっ、あのアパート、トヨタのだー」「ゆうちゃんとうちちゃんのお家も見える」「幼稚園、見えるかなあー」と高い山の上にある中学校から、深良の町を見下ろす。グラウンドと校舎の間の石段の高さにまたびっくり。「うわあ、高い階段。中学ってすごいねえ」。いろいろなものに感動して草地へ。

かばんを置いた後は、虫とりや、雨水でできた大きな水たまりでのげんごろう・水かまきりとり、そして芝の斜面での芝すべり。どこから見つけてきたのか、大きなシートに乗ってみんなで大喜びですべり降りる。普段口数の少ないY子とH男も、驚くような大声をあげてすべり降りたり上ったり。虫とりでは、年少のもって



いったビニール袋と、年長のもっていった観察ケースを上手に使い協力してつかまえていた。

帰りには、中学校のおにいさん、おねえさんに「ありがとう。今度遊んでねえー」「幼稚園にも来てねえー」と大きな声でお願いして帰ってきた。校門の外を少し歩くと、遠くの方に海が見えた。「うわあ、海が見える。みんな見てえー」「ほんとだ。きれい!!」と自然の美しさに大騒ぎだった。帰りの道では、歩道が反対になっても、サラリと自然のうちに年長児が車道側になり手をつなぎ直していた。

園にかえってからは、とってきた虫を見せ合ったり、楽しい一日を過ごした。

(考察)

- 園外保育には何回も行っているのだから、道を歩く時も、年長が自然に年少をかばってくれた。また、狭い道を歩くときには一列になるなど、身を守る態度もできてきた。
 - 虫とりをする時にも、年少がなかなか虫をつかまえないでいると、虫のいる場所を教えてくれたり、つかまえるのを手伝ってくれたり、とった虫を分けてくれたりする思いやりの姿が見られた。
 - 最初の頃は、「ねえ、あれ見てごらん」「ほら、きれいだね」などと、こちらから声をかけていたが、この頃になると自分達から「ねえ、あれ何?」「わあ、きれい、見て見て」などと、歩きながら変わる自然の変化に気づき、感動する姿が見られるようになった。このような積み重ねが、感性の育成につながると考える。
 - ふだんおとなしい子が、自然の中に行くと大活躍したり、心が解放され、大声をあげながら走り回ったりする姿も見られた。
- このように、自然の中に出かけていって遊ぶことにより、いろいろな望ましい姿が見られる

ようになってきた。これからも、時期や目的を再検討し、新しい場所を開拓して、楽しくかつ思い出に残る園外保育を目指したい。

3. 実践例2 体力増進 11月20日 場所 岩波地先

秋晴れの少し肌寒い日であったが9時30分、園を出発した。年少、年長がペアとなり、道路を歩いて行った。途中、歩道の都合で左側を歩かなければなくなると自然に年長児が車道側になり手をつなぎかえ、年少児をかばう姿がみられた。

2年間の園生活の間に地区をくまなく回るという予定で計画をたてており、昨年はこの方面に行かなかったということもあり、途中のあちこちで父兄が手をふってくれていた。年少のY君の家などは、おかあさんをはじめ、おじいちゃん、おばあちゃん、おとうさんまでもが歩道の近くで見送ってくれた。年長のMちゃんの家では赤ちゃんが生まれたばかりで、道路の反対側の少し入った自宅の二階の窓から見守ってくれていた。病気でしばらくお休みしていたN君も家の前でおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に「あとから行くねえー」と手を振っていた。

バイクではとても上りきれない程の急な坂を上りきるといよいよ目的地。上り坂の途中で「K子ちゃん、ホントにこんな山の上から毎日通っているの?」「そうだよ」「へえーっ、うそみたい。こんな坂道を毎日上ったり降りたりしているなんてホントに人間かあー?」の声にみんな大爆笑。本当に大人でも途中で休まなければ上りきれないような坂道を四人の子ども達は毎日登園しているのかと考えるとその努力を改めて感じた。子ども達も途中で振り返り、山の下に広がる岩波の町をみて、「うわあー、高い!」と大歓声。

目的地に着くと、近所の人達までもが家から出てきて歓迎してくれ、「こんにちは、いらっしやい」と声をかけてくれた。かばんを置くとさっそく、自分の背丈をはるかに越える位のすずき林にもぐってかくれんぼをしたり、紅葉した葉っぱを集めたり、細い山道を探険したり、所狭しと飛び回った。大きな葉っぱを見つけ、目と口に穴をあけて、「先生、だーれだ!」とニョコツと顔を出して驚かされたり……。



いっぱい歩いていっぱい遊んだ後は、みんなでお弁当。来年入園するH子ちゃんもお弁当をもって仲間入り。きょうは寒いからと地区のおかあさん方が率先して集まって作ってくれたみそ汁、思いがけない温かな心づかいに子ども達も大喜び。お弁当が終わるとまた、かくれんぼをしたり、追いかっこをしたり……。

帰りには、木々がトンネルのようになった下り坂を「ヤッホー、ヤッホー」といいながら走り降りたり、途中でどんぐり拾いをしたり、楽しい一日を過ごしてきた。

(考察)

- 家庭への働きかけに力を入れてきたせいも、父兄も楽しみに待っていてくれ、みそ汁を作ってくれるなど、園の行事に対する温かい心づかいを感じた。
- 年間を通して計画的に行われる園外保育や園内での運動遊び、アスレチック遊びなどで体力もついてきたようで、往復約4kmでしかもすごい坂道を平気でかけ上ったり、かけ降りたりで、遊びながら判断力もついてくることが考えられる。
- 自然に親しみをもち伸び伸びと活動できるようになってきたが、もっともっと素晴らしい自然を生かした遊びをとり入れ、変化に富んだ活動にしていきたい。

4. 家庭から——連絡帳より——

園外保育から帰った我が家のK男。「おかあさん、これ見て、大きなバッタだよ」。見ると虫かごの中に大きなバッタが入っています。「このバッタ、自分でとったの?」「うん、そうだよ」と、嬉しそうなお返事。1年前は、バッタにさわることすらできなかったのに……。

前に南堀でのカニとりをのぞきに行った時、楽しそうに川に足を入れ、石をどかして一生懸命カニを探している子ども達。何匹もとった子、のろのろしてカニに逃げられてしまう子、カニにさわれない子、そんな姿をみていると、本当に無邪気かわいらしく思えました。生き生きとしている子ども達、本当にいいものですね。

私が帰ろうとした時、南堀のおばあちゃんがふかしたてのさつま芋をもってきてくださったところでした。きっと、子ども達の楽しいおやつになったことでしょう。

園外保育を通し、四季の流れを感じ、自分達の住んでいる所を、自分達の足で見て歩く。いつも忙しく車で通る道でも、ゆっくり歩くといろいろなものが子ども達の目にとびこんでくることでしょう。四季の花、草の香り、木の実……すべてがみんな新鮮に見えるのでしょうか。

子ども達のためにと、トマトやきゅうりをもってきてくださった方々、いちご狩りや柿とりをさせてくださった方々の温かい心を子ども達はいつまでも忘れないと思います。小学生、中学生……そして一人前の大人になった時、きっと心のどこかで園外保育のことを思い出し、ほほえむことでしょう。

——年長K男母——

〈資料 I〉

62年度 園外保育年間計画

月	目的	場所	時間	参加集団	備考
4	並んで歩く 春の自然に触れる	赤子神社	徒歩10分	年長	
5	いちご摘み	町田いちご畑	徒歩40分	年少、年長	(地域の方の好意で)
	交通指導 伸び伸びと遊ぶ	御宿 田んぼ	徒歩20分	年少、年長	れんげ摘み
6	川遊び (春の遠足)	中央公園	バス10分	年少、年長	
	川遊び カニとり	南堀 沢	徒歩60分	年少、年長	単独で行動しない
7	プール遊び 交通指導	市営プール	徒歩30分	年少、年長	国道の渡り方
9	プール遊び 交通指導	市営プール	徒歩30分	年少、年長	
	体力増進 虫とり	中学校	徒歩40分	年少、年長	
10	アスレチック遊び (秋の遠足)	姫の沢公園	バス60分	年少、年長 親子	アスレチックカードの利用
	柿とり	和市	徒歩25分	年少、年長	(地域の方の好意で)
	どんぐり拾い	上原、くぬぎ林	徒歩10分	年少、年長	周辺の自然にも目を向ける
11	アスレチックごっこ	陣山	徒歩25分	年少、年長	
	友達作り	富二幼稚園	バス15分	年少、年長	御宿まで徒歩25分
	体力増進	岩波	徒歩50分	年少、年長	
12	体力増進	市営グラウンド	徒歩50分	年少、年長	
1	自然観察	切久保周辺	徒歩50分	年少、年長	
2	体力増進	柳端グラウンド	徒歩30分	年少、年長	サッカー、なわとびなど
3	自然観察	赤子神社	徒歩10分	年少、年長	

(園の畑) 草とり、さつま芋のつるさし、きゅうり・なすなどの収穫、じゃが芋掘り、
さつま芋掘りなど

(その他) よもぎ摘み, うさぎのえさと, 園の周辺を散歩

〈資料II〉

●縦割り保育

1. 縦割り保育の目的

- 兄弟, 姉妹が少なく, 地域での遊びの集団がなくなっている現在, 異年齢間の遊びの体験をさせる。
- 幅広く友達の選択ができるようにして, 生活の場を広げる。
- 心豊かな自発性のある子どもの効果的な育成をする。
- いろいろな友達とのかかわりから, 社会性を育てる。

2. 育つもの

年少児

- モデリングを通じて, 年長児のよい影響を受けることができる。
- 自然に生活習慣の自立, 言語の発達がはかられる。
- 年少だけでは発展しない遊びも年長児が入ることで発展していく。

年長児

- 年少児と行動することにより, いたわりや思いやりの心をもつ。
- 相手に教えたり伝えたりするにはある程度の力が必要なので思考力と行動力が養われ, 自信, 意欲につながる。

3. 実践上の留意点

- 全職員で指導方法の共通理解をする。(目標, 活動, グループ, 教師のあり方など)
- 個々の子どものあらわれや記録を重視し, 活動後の話し合いを必ずもち, 次の活動に生かす。
- 教師全員が一人一人の子どもの把握し, ペア, グループの子どものかかわりを見守る。
- 縦割り保育の短所もしっかりおさえて指導する。

力関係の固定化

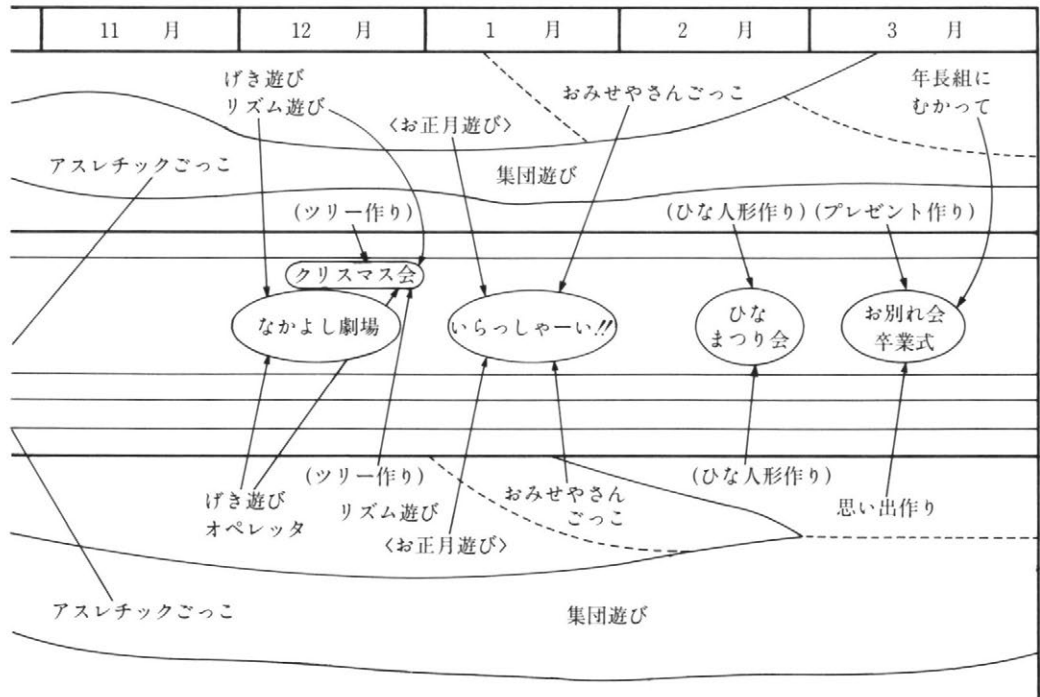
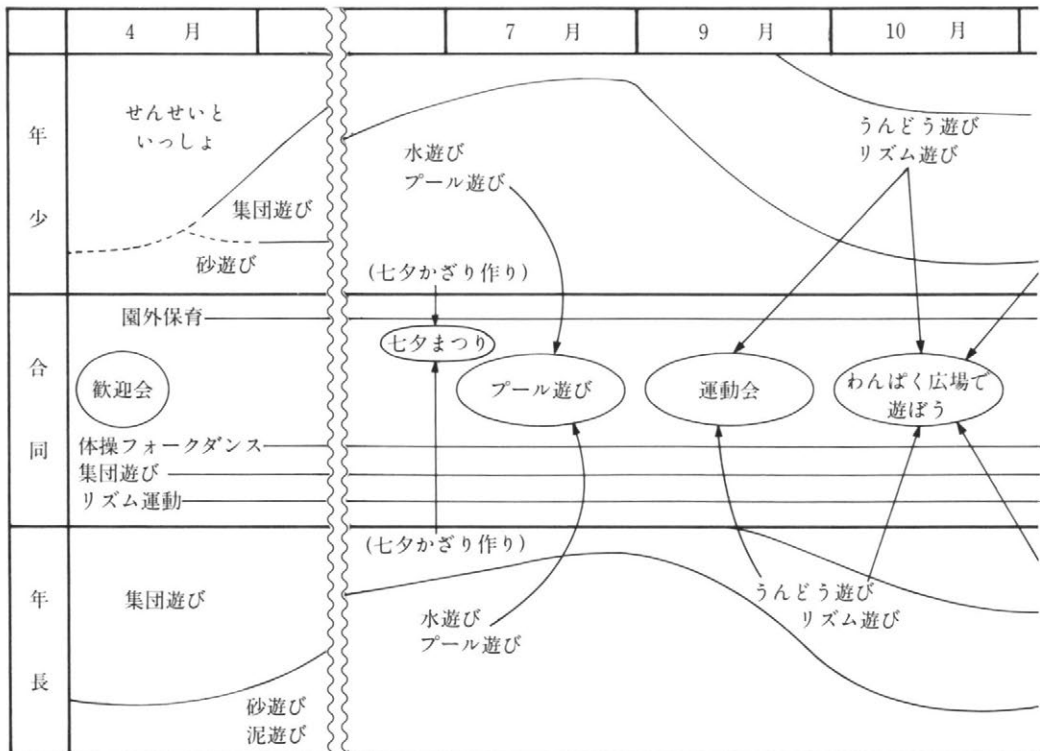
- ・子ども達の組み合わせを固定化しない。
- ・いろいろな場面で一人一人をほめ認める。

子どもの負担になることがある

- ・自然な生活の中にとり入れる。
- ・縦割り保育にふさわしい経験や活動を選択して充足感, 快感を味わわせる。

- 環境設定を工夫し, 自発的, 自主的に活動できるようにする。

4. 縦割り保育の位置づけ



●家庭・地域との連携

○園児を心身共に健康に育てるため、家庭との連携を重視し、園の理解を深める活動の創意工夫を加えた教育計画を作成し、実践した。

1. 実践内容

○母親研修

- ・食生活講演会
- ・お弁当作り講習会
- ・心を育てる講演会
- ・絵本の与え方講演会
- ・交通安全マスコット作り
- ・卒園児コサージュ作り

○高齢者、祖父母との交流

- ・畑作りを教わる
- ・敬老会への参加
- ・祖父母と遊ぶ会
- ・運動会への招待

○連絡

- ・連絡帳
- ・クラスだより・園だより
- ・虫歯治療奨励の賞状
- ・健康だより
- ・がんばり表
- ・プールがんばりカード

○親子行事

- ・親子交通安全教室
- ・親子トリム体操
- ・親子アスレチック遠足
- ・親子運動会
- ・お別れ運動会
- ・親子指人形作り

○その他

- ・個人面談
- ・地区別参観と調理
- ・リズム運動・プール自由参観
- ・登降園児の当番送り迎え
- ・絵本の貸し出し
- ・園外保育時の協力

2. 家庭から——連絡帳より——

「もしもしかめよかめさんよ」と先生の弾くピアノに合わせて体を動かす園児達、その子なりに自由に伸び伸びとした明るい表情がとても印象的でした。園児も先生も裸足になり、とんだり跳ねたり……。年長さんのお手本を見てから年少さんがやり、見ている時は手拍子をしながら元気な声で歌っている様子はとてもほほえましい光景でした。年長さんは年長らしく、自信をもって堂々としたものでお手本を見せてくれます。年少さんはまだ自信なさげに一生懸命最後まで頑張っていました。その姿に年長さんから「がんばれ、もう少し！」と大きな声援がとび、いつしか身をのりだして応援してくれています。私も我が子の様子を見ていて目頭が熱くなってきました。親バカと思いながら、もうこんないろいろなことができるようになったんだな

と感激でいっぱいでした。リズム運動を通して共に汗を流し、先生と園児、また年長と年少というように「大きなふれあいの和」を感じました。家庭においても少しの時間でも子どもとのふれあいを大切にしたいものだと思感しました。

——年少T子母——

V 研究のまとめと今後の課題

自分からやろうとする子、身体を動かして遊ぶことが好きな子、話を聞く時は聞けるけじめのある子、しかも思いやりのある子に育ててほしいと願い、研究を進めてきたが、これは決して目標が多いわけではない。自分からやろうとする子に育てるため、全職員で一人一人の子を知り、場面をとらえ、認め励ます保育をする。そのことにより一つでも意欲や自信をもつと他のことにもやる気をもち伸びていくのである。

子どもは本来、自ら伸びようとする芽をたくさんもっているが、時代、社会の風潮によってその芽がつぶされている面が少なくない。今の子どもは自己中心的だとか、善悪のけじめがないなどと言われたりするが、社会が悪い、人が悪いと言う前に、家庭がしっかりとした子育てをすることである。そのためには、園は一人一人の子を育てる工夫をすることが大切である。環境を整え、望ましい活動の精選をし、地域の自然や人とのかかわりを考慮し家庭との連携をうまくとりあっていくことである。

子どもは自然の中で伸び伸びしたり、思いきり活動することが情緒の安定や、意欲をもつことに通じる。子どもが生き生きしてくると親もより一層園を信頼してくれ、保育効果も高まる。また地域や家庭との結びつきをより確かなものとするため、地域の人達とのふれあいや親子活動の工夫や見直しをして温かく見守ってくれる人々の中により一層とけこんで、地域に根ざした健康と心の教育を大切にしていきたい。

そして、今まで育ったものがうまく小学校へも引き継がれていくよう、幼稚園と小学校の連絡をより一層密にし、打ち合わせの場を設け、一貫性をもたせた幼小の関連についての研修を深めたい。

6

共同研究



聞く耳を育てる
—お話聞けるがんばりまん—

静岡県御殿場市立玉穂幼稚園

〔代表 鈴木道子〕

I 主題設定の理由

昭和60年度、61年度と2年間、文部省から「幼稚園と家庭との連携」に関する研究委託を受け、その後研究を継続して現在に至っている。

人の話を聞く態度が身につくことは、幼児期の基礎づくりの重要なポイントであり、それは幼稚園と家庭との連携の上になりたつ。そこでそれぞれの立場での役割を見直しながら、「人の話をよく聞き夢中になって、園生活に取り組める子をめざして」をテーマに研究をすすめた。

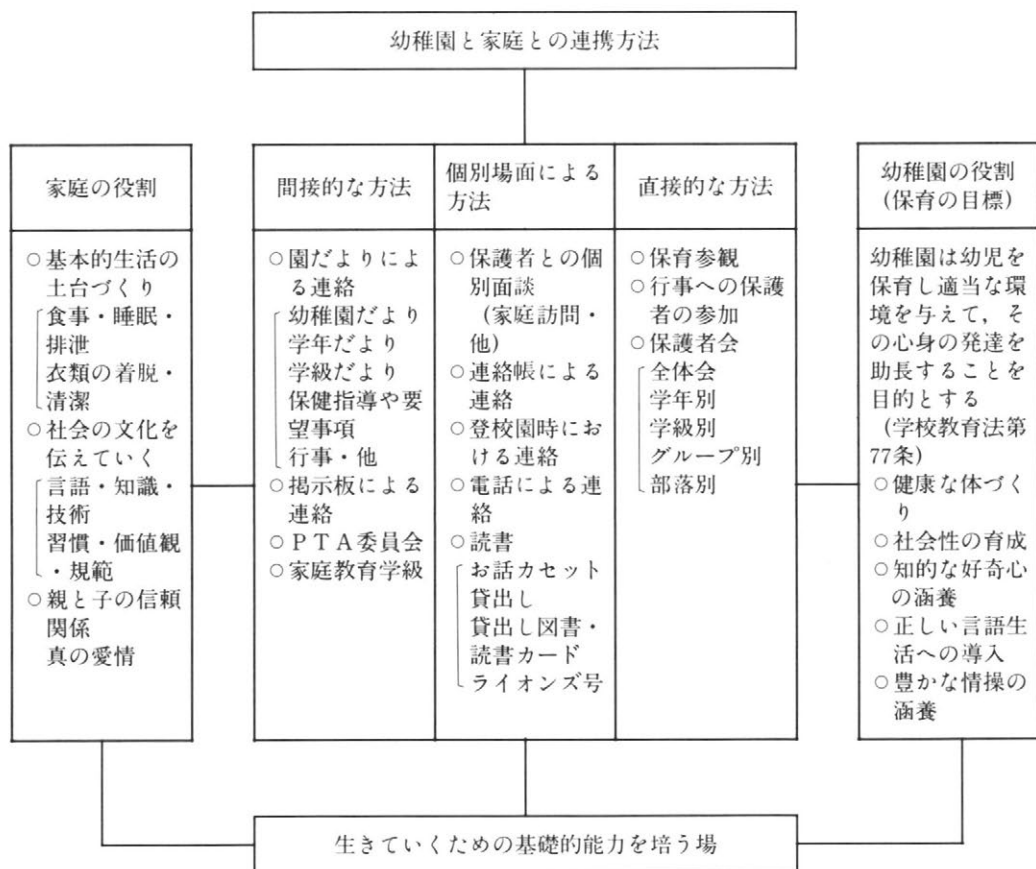
現代の子ども達はテレビやファミコンなどに接する時間が多く、人の話に耳を傾けて聞く態度や聞いたことの理解が希薄になっている。人の話をしっかり聞き、人の心がわかり、生活していく上でのルールがわかっていくことは、友だちと仲良くできる子、元気いっぱい園生活のできる子、夢中になって遊べる子、進んで仕事に取り組める子、すなわち園目標「心身共に元気な子」につながると考えた。

II 研究のねらい

園目標「心身共に元気な子」に向かって、幼児の心身の健全な育成を願って、幼稚園と家庭の機能と役割の見直しをし、共通理解を深め協力し合う、幼稚園での保育の場、家庭との連携から、「お話聞けるがんばりまん」を合言葉に「耳から聞く態度を育てる」「家族揃って話し合いの場を作る」ことや、「思いやりや想像力の豊かな心を育てる」ことを願って、研究に取り組む。

Ⅲ 研究の内容と方法

幼稚園と家庭とが、それぞれの教育機能について相互に理解を深め、その分担協力関係を明確にすることにより、幼児の心身のより健やかな育成に資することができるよう、幼稚園と家庭の在り方について研究、実践を進めるにあたり、具体的な方法として間接的、直接的、個別場面による方法の3つの柱を立て連携を深めるための構想図を下記のように作成した。



60年度からの実践内容の見直しと実践方法の検討として、幼児の一般的な発達段階をふまえた子どもの姿から、聞くことに対するねらいを学期毎にうち出し、実践方法として、幼稚園としての実践、家庭との連携の中での実践にわけた次頁の表を作成し、それをもとに研究実践を進めていった。

Ⅳ 実践例

1. たよりを通して

研修テーマである『人の話をよく聞く』ことは、園だけでなく、家庭にも、その大切さを知らせ、共に協力して育てていきたい子どもの姿である。そのため、各種のたよりを通して、家庭に啓蒙することにより、園での子どもの生活する様子や、話をよく聞かせるために園で行っていることを理解してもらってきた。

園から出しているたよりの種類には、「園だより」「幼家連携だより」「学年だより」「クラスだより」「保健だより」等がある。昨年度のたよりを見直し、本年度の年間計画表を作成し、それぞれのたよりを発行する。

保育活動やねらい、子どもの現れ、連絡事項等の他に、話の聞き方目標をのせ、園と家庭とが共通理解のもとに意識づけを行ってきた。

たよりの種類と内容

種 類	回 数	内 容
園だより	毎 月 1 回	月の行事予定、保育内容、園の方針、発達の特性をおさえ、年齢別に子どもを正しく見つめられるように、子どもの現れをのせている。
幼 家 連 携 だ よ り	必要に 応じて	“家庭の役割ってなんでしょう”等、見出しをつけ、読みやすく重点をつかんだ内容で、あらかじめ表紙、クリップを分けて順に綴じていけるようにし、手頃な大きさ（B5の $\frac{1}{2}$ ）で目を通しやすくしている。
学 年 だ よ り	毎 月 1 回	年少は「ちびっこ」年長は「たけのこ」というたよりとし、月の保育活動やねらい、子どもの現れ、連絡事項、誕生児の紹介、月別に段階を押えた話の聞き方目標、その他気がついたことをのせていく。
ク ラ ス だ よ り	必要に 応じて	学年だよりを更に詳しいものにし、保育内容や教師の構え、考えをのせたりする。一方通行にならないように、親の悩み、感想などをのせ園と家庭が共に作っていったよりにしている。
保 健 だ よ り	必要に 応じて	例えば“虫歯予防について”とか、“梅雨時の衛生について”などである。

このように、たよりを通して家庭に啓蒙してきたが、まだ正しく父母に伝わっていなかったり、見落としがあったりすることもみられるため、読み手の気持ちになって、誰が読んでもわかりやすいたよりに書くことを心がけていきたい。

（たより資料）

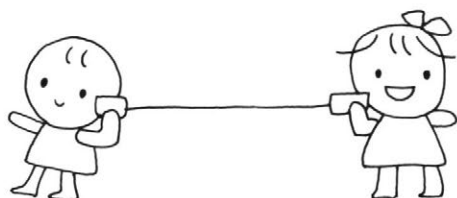
幼家連携だより

幼稚園と家庭の連携はなぜ必要か。

家庭と幼稚園とは、それぞれの役割と責任をもっています。

しかし、最近の子どもたちを取りまく環境は大きく変わってきました。

とくに自然とのふれあいがなくなったことや、家庭生活の変化により、幼児の成長発達にいろいろな影響を与えております。これらの変化に適切に対応していくためには、これからは、今まで以上に家庭と幼稚園がより一層密接に連携をとっていくことが必要となってきたからです。



保健だより

保健だより



昭和62年5月23日

玉穂幼稚園

若葉の美しい季節になりましたね。天気の良い日は子ども達も戸外で元気いっぱい遊んでいます。今回は子ども達の健康状態について、また、今の季節の衛生についてお知らせやお願いのたよりをいたします。

▶風疹について◀

皆さんはもう知っていらっしゃると思いますが、今年は風疹の大流行の年です。園でも現在4、5名がかかっています。風疹は人に感染する病気ですので出席停止になります。

風疹は朝はそれ程でもないと思っているうちに1、2時間もすると首すじ、おなかのあたりにパーっとひろがります。朝の着がえの時などによく注意してみてください。そして、もしや……と思った時には登園させずに様子をみてください。風疹の症状は、はしか等と比べると軽いものですが、やはり風にあたるのはよくないというお話を園医さんからうかがいました。

(クラスだより資料)

さくらぐみだより

S62. 4. 22

玉幼年長クラスだより

年長組になって2週間。「おおきいくみさん」になった喜びと共に、少々戸惑いの様子も見られましたが、クラスの雰囲気にも慣れてきて、明るくにぎやかな声がいっぱい聞かれるようになりました。「おにいさん」「おねえさん」として、年少組さんにやさしくしている姿も見られます。

さくら組のみんなと仲よく元気にがんばりたいと思っています。一年間よろしく願いします。

★31人の友だちが元気に揃って年長組がスタートしました。おうちの方にもさくら組のみんなを早く知ってほしいと思い“おともだち紹介号”を出したいと思います。

子どもさんの紹介(特徴, すきなことetc)を書いて提出してください。

..... きりとりせん 4月25日(土)まで.....

たんぼぼ

S62. 4. 22

玉穂幼稚園

年長クラスだより

年少のとき、子どもたちの植えたチューリップの球根も、一斉に花を咲かせます春らしくなる今日この頃、子どもたちは年長児という自覚が少しずつ芽ばえ始め、年少さんをやさしくいたわる姿もみられます。

まだまだクラスの中では、年少のときから知っている子どもたち同士が仲よくしているようですが、新しいクラスにも慣れ始め、子どもたちの顔からも笑顔がみられるように、私自身努力したいと思っています。一年間ご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが精一杯がんばりたいと思います。

御協力よろしく願いします。

2. 参観日を通して

本園では、子どもの園での様子を知ってもらうのに有効的な方法として、月1回の参観日を設けてきた。幼家連携を進めていく上で、今までの参観日についてふり返り、昨年度の参観日について「活動内容、ねらい、参観日のもち方」を検討し、学年別の計画表を作成した。

昭和62年度 参観日・懇談会一覧表（一部抜粋）

	内 容(年少)	ね ら い	参 観 日 の も ち 方
4 / 17	クレパスあそび 総会	○クレパスに親しみ喜んであそび ができる。	○参加
5 / 15	お弁当参観 学級懇談会	○友だちと一緒に喜んで食べる。	○参観（お弁当の準備、食べる様子） ○学級懇談会（父母同士の親睦をはかる、自己紹介など）
6 / 21	父親参観日 講演会	○お父さんに親しみをもち、楽しくあそぶ。	○参加（親子ゲーム、各保育室でお父さんを交えての活動） ○講師の先生を招いて講演会
6 / 30	祖父母参観日 誕生会	○6月生まれの友だちを知る。 お祝いのことばを言う。	○参観（園での誕生会の様子を知ってもらう）

参観日は、園での子どもの生活を知ってもらう場であり、参観ばかりでなく、父母の活動への参加という形式もとり入れて行ってきた。その結果、積極的に参観日にのぞむ父母の姿がみられた。また、祖父母参観日、家族参観日を設け、ふだん園に来る機会の少ない家族の方にも気軽に来て子どもたちの様子を理解してもらった。

▼祖父母参観日の様子



連絡帳より

今日の「おじいちゃんおばあちゃん参観日」私の母も参観させていただきました。母の感想を私が代弁しますと、子どもの参観日にはよく行ったけどまさか孫の幼稚園の参観が出来るとは思ってもいなかったのでもっと楽しみだったようです。

帰ってきて香と2人で「香の先生赤ちゃんうまれるんだよね」とか「元気に遊んでいたね」……といろいろ幼稚園の話をしていました。今回は誕生会の見学と先生の劇をみたらいいのですが、もっと子どもとふれあいのある、たとえば歌をうたったり、フォークダンスをしたりゲームをしたりするのもいいねと言っていました。これからもどんどんこういう機会を作ってほしいと思います。行きたかったのに仕事で行けなかったおじいちゃんが残念がっていました。

参観日を通して

研修テーマの合いことば「お話聞けるがんばりまん」を共通理解し、家庭にも啓蒙して連携を深めることができた。

3. お話カセットを通して

(1) お話カセットについて

「お話カセット」とは、教師の語りによる手作りのカセットで家庭に貸出しをしている。

テレビを見ることが多く、思考力の薄れてきている現代の子どもたちに、

★耳から聞く態度を育てる。

★家族みんなで聞きふれあいの時間をもつ。

★お話の内容を理解すると共に、思いやりや想像力などの豊かな心を育てる。

という目的で、S60年より開始した。3年間の積み重ねの中で、録音する話の内容、録音方法などの検討や工夫をくり返したり、父兄のアンケートなどによる意見もとり入れたりしながら現在に至っている。

▼お話カセット

A	B
手あそび	
・やまごや いっけん	
もりのおもちやさん	
・たぬきのおもちやさん さんにとんすおもちや ちやがなるぶがな	
DATE/TIME NOISE REDUCTION <input type="checkbox"/> ON <input type="checkbox"/> OFF	DATE/TIME NOISE REDUCTION <input type="checkbox"/> ON <input type="checkbox"/> OFF
AE120	

お話カセット貸出し表 玉穂幼稚園

借りる日 月 日	名前	誰と聞きま したか	かえす日 月 日
6月26日	A	家族	6月28日
6月28日	B	家族	6月30日
6月30日	C	母, 姉	7月2日
7月2日	D	母, 妹, 弟	7月4日
7月4日	E	家族で	7月7日
7月7日	F	母, 妹, 弟	7月9日

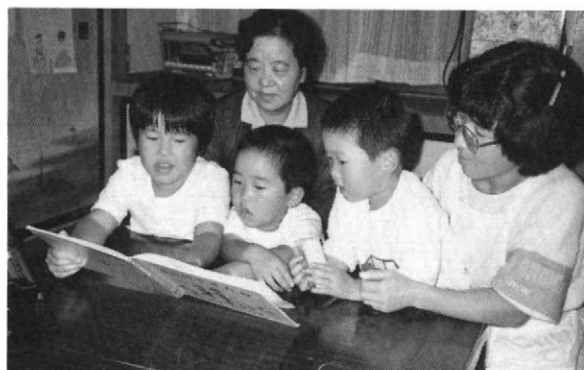
▼先生たちの録音風景



▼お話カセットたくさんになりました



▼家族で楽しいひととき



連絡帳より

くり返し聞きたがりましたので家族全員で静かな時をすごすことができました。テープを借りてきた時ぐらいしかこういう時間を持つことがないのですが、それではいけないあと反省しました。

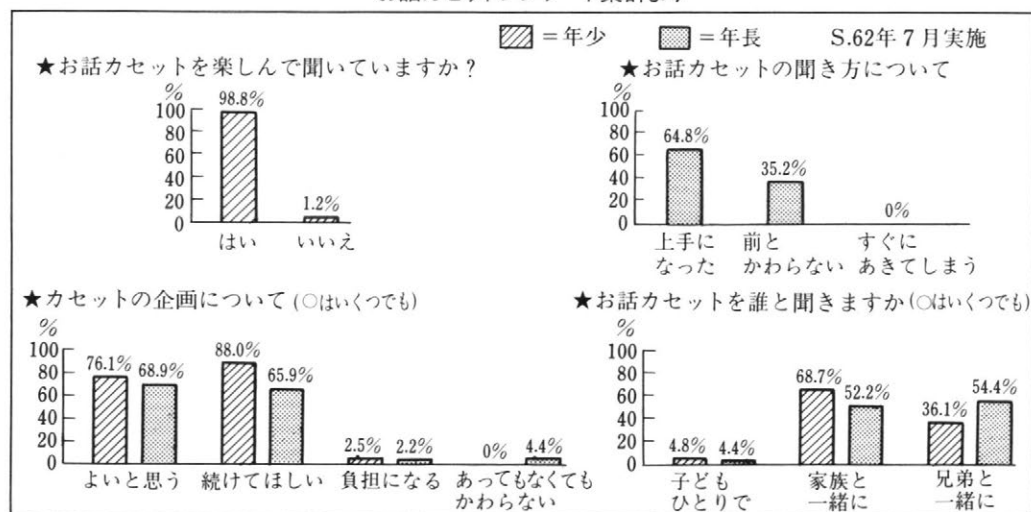
お話カセット、今回はすごくきれいに音が入っていましたね。夕飯の時、みんなで聞きました。とくにお兄ちゃんが先生たちの声をなつかしうに聞いていました。

カセットでお話を聞くことで、お話好きの子が増えてきている。また、耳から聞く態度だけでなく、内容を理解しようとする力や、想像力、主人公の気持ちがわかる心が育ってきた。

連絡帳より

楽しみにしているカセット、年長になって初めて借りてきて、とても楽しそうに聞きました。年少の時と同じような感想になってしまいますが、年少の終わりごろから興味のある話は、しんげんに聞こうとする様子が見えてきました。今回のカセットも聞いている最中に私が話しかけたら「うるさいだまって……」なんていったくらいです。これからは興味のある話だけでなく何の話もちゃんと聞けるようになるといいと思います。

お話カセットアンケート集計より



(注) 2つ以上回答された場合もあるので、割合の合計は100%とならない。

読書指導とし、カセットの貸出しと並行して園の本の貸出しや、年長児は市の移動図書館ライオンズ号も利用しており、子どもたちの絵本への興味も深まってきている。書店や図書館へ行くことが多くなったという声もよせられ、家庭に対してもよい影響があらわれてきている。

年間計画表 62年度 お話カセット実践計画〈年少〉(上段お話, 下段手あそび 絵本つき)

回数	組	ことり	うさぎ	きりん
1回		そらいろのたね	ぐるんばのようちえん	そらいろのたね
		でんでんむしどこだ	おとうさんゆび	まがりかど
2回		ぐるんばのようちえん	ちいさなきいろいかさ	たろうのおでかけ
		ハイおまたせ	て・て・て	くいしんぼうのゴリラ
3回		たろうのおでかけ	そらいろのたね	ぐるんばのようちえん
		おやゆびさん	1びきのねずみさん	ハイおまたせ
4回		三匹のやぎのガラガラドン	わたしのワンピース	三匹のやぎのガラガラドン
		1びきのねずみさん	いとまきまき	一丁目のドラネコ
5回		おおかみと七匹のこやぎ	たろうのおでかけ	おおかみと七匹のこやぎ
		くいしんぼうのゴリラ	くいしんぼうのゴリラ	1びきのねずみさん
6回		ぐりとぐらのお客さま	てぶくろ	ぐりとぐらのお客さま
		ちゅうかりようり	いっぽんばし	ちゅうかりようり
7回		てぶくろ	三匹のやぎのガラガラドン	てぶくろ
		いっぽんばし	一丁目のドラネコ	いっぽんばし
8回		ちびくろさんば		
		うさぎがびよん	なちべえさんと じゅうべえさん	うさぎがびよん

○8回めは3人の声で「ちびくろさんば」を録音する。○テープの長さに応じて「うた」をいれる。

(2) お話カセットの貸出しをはじめて

担任の声のお話や、園でしている手あそびや歌をカセットで聞くことにより、先生に親しみをもったり、家族にも園での様子を知ってもらうことができた。子ども、担任、家族、幼稚園、いろいろな面からのコミュニケーションの方法の1つとなることができた。

手あそびを子どもが家族に教えたり、歌を一緒にうたったり、お話を聞いて感想を話し合ったりなど、家族のふれあう時間をもってもらうことができた。

連絡帳より

夕方、貴也と2人でお話カセットを聞きました。手あそびの「1びきのねずみさん」は貴也に教えてもらい2人でやりました。貴也はカセットに向かって「裕子先生」なんて話しかけながら1びきのねずみさんをやりました。おはなしの「だるまちゃんとかみなりちゃん」はとてもおもしろかったといって、テープを聞いたあとで、またもう一度読んでやりました。このお話カセットは本当にとってもいいですね。「お家にも裕子先生と一緒にいるみたい」なんていっています。

これからも楽しいお話をたくさん聞かせてください。

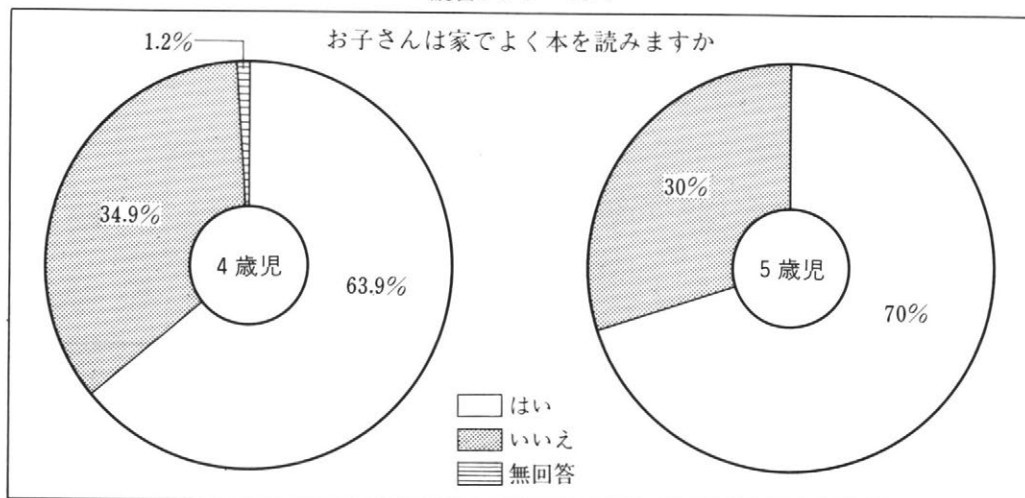
—連絡帳より—

テープと絵本ありがとうございました。歌の好きな幸ちゃんは合わせて手を出してうたったり、妹まで一緒に手をたたいていました。おじいちゃんやおばあちゃんも幼稚園での様子が想像ついたようです。

毎週月曜日に提出の読書カード

読書カード No.			
くみ _____		なまえ _____	
月日	本のなまえ	誰と読んだか	教師の印

読書アンケートより



▶ライオンズ号で本を貸りる子どもたち



クラスだよりより

読書カードの枚数もだんだんふえてきました。ひとりひとりみせていただいておりますが、同じ本(好きな本)をくり返し読んでいる方もいるようです。

そこで、あなたのお子さんの好きな本のベスト3をお知らせください。他のお母さん方の参考にもなると思いますので、結果は19日の懇談会にお知らせ致します。

.....きりとりせん.....

● _____ ちゃんの好きな本

No1.

No2.

No3.

(3) これからの課題

子どもたちの興味、理解力に個人差があり、録音する話の選定がむずかしいが、発達段階や子どもたちの実態を十分把握してカセット作りをしていきたい。また、家庭によっても差があるので、お話カセットの目的などをくり返し呼びかけながら、園と家庭とが協力して人の話を聞ける子に育てていきたい。

教師の朗読方法、効果音楽、うたや手あそびなどの内容にも工夫を加えたり、父兄からの意見などもとり入れ、開始して3年目のお話カセットがマンネリ化しないように心がけていきたい。

V 研究の結論と今後の課題

園での実践はどこの園でも行われていることではあるが、毎日生活の中に聞く態度を育てているものが多くあることがわかった。それを教師自身がどのように意識し保育の中に役立てていくか、また、教師の存在が大切な教材となっていることや、教師が自分の生活の中で聞く耳をもって過ごしているか、反省するよい機会にもなった。

このような研究内容は研究課題という研究のためではなく、日常の中の基本的な生活態度として大切なことであり、これからも、反省を基に心して教育に取り組む姿勢を持ち続けたい。

7

共同研究



親子のふれあい・体力づくり・
自然をみる目の育成
—園外の自然環境を生かした権
現の森・蔵王山登山を通して—

愛知県渥美郡田原町蔵王幼稚園

〔代表 河合旻子〕

I 主題設定の理由

「最近の子どもは、足腰が弱くなっている」ということばをよく耳にする。考えてみると、車社会の発展により、どこへ行くにも車を利用する人が多くなった。本園の登園状況を見ても、乗用車で送迎や、登園バスの利用者がほとんどで、近くの住宅地の子どもが歩いてくるだけである。

幸いにも、本園は蔵王山(標高220m)のふもとに立地し、周囲は新しくひらけた住宅地にある。権現の森や蔵王山登山のための遊歩道へ行くのにも、園から適当な距離(1.3km)にあるので、このような環境を利用して、心身共に健康でたくましい子どもを育てたいと願い、5年程前より、園外保育を取り入れて実践してきた。そして、自然の中で十分に遊ばせることにより、充実感と満足感を味わわせ、更に、くり返し登山することにより、脚力の育成、がまんする心の育成、根気強く物事をする態度の育成も図ってきた。これを年間指導計画の中に意図的に計画して組み入れ、季節の変化に伴う自然環境の変化も幼児自身の五感を通して体得させるように図った。家庭への働きかけとしては、園活動の実態を幼児自身から親へ、また、ある家族の実践などを園だよりや学級通信などを通して広め、親子のふれあいの輪の拡充もはかりたいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

1. 地域環境を生かした園外保育を年間指導計画の中に有効に位置づけ、体力・脚力の増強をは

かる。

2. 園外保育における自然をみる目を養うための教師のはたらきかけ方を追求する。
3. 自然環境を生かした親子のふれあい活動の拡充をはかる。

Ⅲ 研究内容と方法

1. 研究の内容

(1) 自然環境を生かした園外保育

- 園外の自然環境を生かした保育活動を記録し、幼児の体力の発達過程を追求する。

(2) 自然をみる目の育成

- くり返し、くり返し同じ環境に遭遇させることにより、四季による自然環境の変化を子ども自身に発見させるための教師のはたらきかけ方を追求する。

(3) 親子のふれあい

- 地域の自然環境を利用して、親子で歩くことにより、親子のふれあいを拡充する。

2. 研究の方法

(1) 園外の自然環境を生かした活動を年間指導計画の中に有効に位置づける。

- 年齢別、月別に子どもの姿及び教師の指導の手だてと感想を記録して、発達段階に伴う子どもの体力の変容・自然への対応の仕方の変容を追求する。
- 実践結果により、指導の改善をはかる。

(2) 四季を通して、自然環境の中で活動させることにより、幼児自身が主体的に自然の変化を発見し、それに対応する教師のはたらきかけ方を究明する。

(3) 親子で歩くことの実践活動の報告を園だよりによって広め、親子のふれあい活動の拡充をはかる。

- 家族登山を生活の中に計画的に位置づけて親子のふれあいを深めている家庭。
- 子どもに刺激されて登山グループを作った家庭同士の連携とふれあい。
- 子どもと共に登山することにより、成長度を再確認する親の感動。

Ⅳ 実践事例

1. 本園の特色（園児数278名、年少児100名、年中児90名、年長児88名）

教育の根底を流れる基本理念として、元気、本気、根気、という気（木）から、はだか、はだし、はみがきという三つのは（葉）を出し、人間味（実）豊かな子ども、健康でたくましい

子どもの育成をねらいとしている。

本園の活動内容で特筆すべきものを列挙すると、

- (1) 健康領域は、体育専科教員が全園児を系統的に発達段階をふまえて指導している。
- (2) 地域の自然環境にも恵まれているので、園外活動も安全にのびのびとできる。
- (3) はだか・はだし・はみがきを徹底しているので年間を通してはだかで過ごす子どもが多い。
- (4) 毎日出す園だより、月に二度出すクラスだより、個に応じた通信するおたより帳など家庭と園との連携は密接につながり、幼児育成のための大切なパイプ役となっている。
- (5) 行事を通して、親子のふれあいの場をもっている。(春・秋の遠足、保育参観日、運動会、もちつき会、クリスマス会など)
- (6) 「がまんする心」の涵養の場として、夏の一泊二日園内合宿、秋の一泊二日の修学旅行、年間を通しての蔵王山登山園外保育などの実践をしている。
- (7) 地域との交流の一貫行事として、中学生の保育実習も受け入れている。

2. 園外の自然環境を生かした活動を年間指導計画の中に有効に位置づける。

年少の園外保育(抜粋)

月	4月 ～ 5月
日	27. 30. 7.
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ●交通安全に気をつけ、右側通行をわからせる。 ●歩くことになれる。
環境	<ul style="list-style-type: none"> ●幼稚園のまわり ●権現の森
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ●年少児も年長児と手をつなぐと落ち着いて歩くことができた。 ●整列して歩くことは、不可能である。行きは年長児と手をつないで歩き、帰りは、PTA 2人と補助担任に囲まれて歩いた。 ●あみのぼりや丸木わたり等、高さに怖さを感じる子が多かった。タイヤにつかまったり、ブランコで遊んだりすることに人気があった。
抽出児	<p>M子(遅進児)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●集団からすぐに外れ、かってな行動をとるため、補助担任がマンツーマンでついてた。行きも帰りも手をつながれて歩くことができた。
教師の手だて感想	<ul style="list-style-type: none"> ●入園して1か月がすぎ、はじめての遠足で権現の森へむかった。整列して歩くことは、不可能なため、行きは年長児と手をつないで歩き、帰りは、PTA 2人と補助担任でしっかり囲み、帰路についた。 ●常に人数を把握した。 ●2～3歩歩くと、左右にひろがったり、前の友達を追い越したりするため、何度も止まり、列を整えた。 ●全体にまだまだ足腰が弱い。もっと歩かせたい。

教師の指導後の感想（5月7日）

天気に恵まれ、けがをする子もなく、楽しく遠足に行くことができた。持ちものがいっぱい入ったリュックを背負って権現の森まで歩くことは、3歳の子どもにとっては簡単なことではない。現地に着いたときの子どもは、暑さと疲れのためにぐったりとしていたけれども、おにぎりを食べたり、お菓子を食べたりの休息で元気を取り戻し、楽しく遊具で遊ぶことができた。帰りも歩くことを嫌がったりする子もなく、全員歩き通すことができた。

〈考察〉

春の登山から冬の登山までの実態を記録し、子どもの発達過程を追求した。歩く速さも増し、落ちていた赤や黄色の葉を集めて楽しむ子どもの様子など、回を重ねていくことにより、子どもたちの体力も増し、自然に対する態度も変容してきた。

年長の園外保育(抜粋)

月	4月 ～ 5月
日	16・17・23・30日 2・7日
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ●安全に気をつけて山道を歩く。 ●安全に気をつけて歩く力をつける。
環境	●蔵王山の遊歩道登山
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ●山道を登っていく速度は、様々である。 ●一目散に登る子、まわりの自然を眺めながら登る子もいる。 ●アスレチックの遊び方は、説明しなくても子ども自身で挑戦していく姿がある。
抽出児	<ul style="list-style-type: none"> ●A子（紫斑病） 歩いていなかったためか、みんなについて歩けず離れて登山する。
教師の手だて感想	<ul style="list-style-type: none"> ●引率者は体育教師、担任3人、補助教師2人の6人である。先頭に体育教師、後に1人、途中で4人がはいたり、子どもの様子をみながら登山する。 ●個人のペースに合わせて山登りをさせた。 ●子どもたちは、山登りがすきではしやぎながら歩く。 ●速さを競うようになった。 ●ほとんどの遊具を使いこなして遊ぶことができた。

教師の指導後の感想（4月16日）

蔵王山へ登った。速さを競いあっている子、景色を楽しんでいる子、草花に興味を持ってい

る子、子どもたちがさまざまに楽しんでいるという感じだった。桜の花びらが風に吹かれて散っているのを見て、「わあ、きれい」と歓声をあげている子どもたちの目は一段と輝いていた。

〈考察〉

年長になると、体力も増し、登る速さも速くなり、自然に対する興味・関心も高まり感情も表現できるようになってくる。春には、桜の花びらに歓声をあげ、秋には落ち葉の色や形に興味を持ち、それで、「こすり出し」の活動もできた。冬には、寒さの中ではく息を「けむりみたい」と表現するなど、それぞれの季節感を体でとらえている。

▼年少の園外保育



▼年長の園外保育



3. 自然をみる目の育成

四季を通して、同じ自然環境の中でくり返し活動させることにより、子ども自身に自然環境の変化を発見させるための教師のはたらきかけ方を追求する。

権現の森・蔵王山登山（2月）年少児の実践記録

- ねらい (1) 冬の自然の中で活動させることにより環境の変化をみつけさせる。
 (2) 広い環境で解放感を味わわせ、自然を利用した遊びを創造させる。
 (3) 遊歩道を楽しく登らせる。

<p>9時40分出発 三列小先頭でクラス別に歩く。 C1: キャベツじゃん。C2: ちがうよ! C3: あれは、ブロッコリーだよ (興味・関心) C4: うん。そいでさあ。キャベツの中からブロッコリーがでてくるじゃん。 C5: 本当だ、さくらの花? (興味・関心) C6: わかった。うめばしだ。 C7: え一本本当なの? C8: 右を見て、左を見て、もう一</p>	<p>●歩きながら、まわりの環境に目をむけるように言葉がけをする。 T1: あれは何だと思う? (誘いかけ) T2: そうだね。ブロッコリーだね。 T3: あっ、お花が咲いてるよ。 T4: ううん、あれは、梅の花だよ。 T5: そうだよ。うめばしのうめがなる花だよ。 T6: そうだよ。 T7: あっ、車がきたよ。(安全指導) T8: えらかったね。ちゃんと見てたんだね。</p>	<p>畑ぞいの道 民家ぞいの道 横断歩道</p>
---	--	--

<p>度右を見て、横断べけ。</p> <p>C9：先生、あそこにおじごうさんが立っとるよ。</p> <p>C10：忘れた。</p> <p>C11：覚えとるよ。座る所があるだてー。みんなで座ったじゃん。</p> <p>C12：今日、あそこへいくの？</p> <p>C13：えー、がんばろう。(意欲)</p> <p>C14：大丈夫。朝ごはんいっぱい食べてきたもん。</p> <p>C15：先生、みかんがいっぱいあるよ。(発見)</p> <p>C16：大きいみかんだなあ。</p> <p>C17：あれは、甘夏だよ。</p> <p>C18：まだ、青かったよ。</p> <p>C19：いつの間に黄色くなったのかなあ。(感動)</p> <p>C20：先生、冬でも葉っぱいっぱいあるね。(発見)</p> <p>C21：長い葉っぱだなあ。 権現の森着：排泄</p> <p>C22：先生、橋わたる？(園出発あたりから不安がっていた)</p> <p>C23：うん。(安心)</p> <p>C24：先生、ぬかしたよ。(教師を追いこす子ども)</p> <p>○転ぶ子がいると、まわりにいる子どもが集まって手助けをしている。また、教師を呼んでくれる。</p> <p>○一人で平気で登っていく子がほとんどだが、まだ教師と手をつないだり、エプロンのすそをにぎったりして、登る子も少数いる。</p> <p>C25：「あっ」と、いって拾う。「どんぐり！」(発見)</p> <p>C26：うん。知っとる。もっていこう！(と、手ににぎる)</p> <p>C27：うん。</p> <p>○それからは、歩くたびに松ぼっくりに目がとまる。満足顔。(満足)</p> <p>頂上着。アスレチックで遊ぶ。</p> <p>C28：先生、ゆれるから怖い。</p> <p>○園にあるせいか人気集中、怖がる子も少なかった。</p> <p>○どんぐりや松ぼっくりや葉っぱをならべっこあそびをする子どももいた。(遊びの工夫)</p>	<p>T9：観音様だよ。秋の時行っただけ覚えてる？</p> <p>T10：そうそう。幼稚園やジャスコもみえたね。</p> <p>T11：ううん。今日は一番上まで登るんだよ。がんばろうね。(高揚)</p> <p>T12：ほんと。たくさんだね。</p> <p>T13：この前来たときは、何色だったか覚えている？(示唆)</p> <p>T14：そうだね。青かったね。</p> <p>T15：本当だね。</p> <p>T16：これは、冬でも平気な葉っぱなんだね。</p> <p>これより三列は解散し、学年で各自登山。先頭、最後尾、中間(4名)計6名の教師が、間隔をあけ共に登山。</p> <p>T17：大丈夫だよ。橋わたる時は手をつないで、一緒にわたってあげるでね。(安全)</p> <p>○大変満足気で、声をかけておいては、その先でまた振り返り、声をかけてくる。</p> <p>○子どもなりの登山を楽しんでいる様子がうかがえた。</p> <p>○ことばがけして、励ましたり、ほめたり、勇気づけたりする。(示唆)</p> <p>T18：ううん。どんぐりじゃなくて、松ぼっくりだよ。戸松ぼっくりがあったとサ……おさるが拾って食べたとサ戸知っとる？</p> <p>T19：おみやげだね。</p> <p>T20：もう、ポケットいっぱいだね。</p> <p>T21：もっててあげようね。(と、さわっているだけで安心して少々ゆれてもチャレンジしている)(安全)</p>	<p>産業道路ぞいの道から蔵王山をながめて</p> <p>みかん畑ぞいの道</p> <p>まきの木</p> <p>丸太でくんだ橋(3m程)</p> <p>登山中</p> <p>タイヤ あみのぼり テーブルベンチ</p>
---	---	---

<p>排泄：下山</p> <p>○登る時より怖がる子が多い。</p> <p>○「すべるから、ゆっくりおりようね」と、子ども同士で言いあっている。 (安全)</p> <p>○葉っぱを集める子もいる。</p> <p>C29：いいら、しゅりけんつくるだよ。</p> <p>橋の所で。</p> <p>C30：わたし、今度は一人でわたれるかも知れない。 (挑戦)</p> <p>○一人でわたりおえ、「わたれたよ」と、報告してくる。</p> <p>11時45分園着。</p> <p>C31：うん。おもしろかった。</p> <p>C32：松ぼっくりを見つけたよ。(と、見せる。) (満足)</p> <p>みんなで歌う。</p> <p>C33：橋がおもしろかった。</p> <p>C34：アスレチックがおもしろかった。</p> <p>C35：わあーい。</p> <p>C36：みつけたよ。(2～3人)</p> <p>C37：おさるが食べたんだよ。</p>	<p>○すべるため、気をつけるようことばがけをする。 (安全)</p> <p>T22：何するの？</p> <p>T23：できるかも知れないから、やってみよう。 (高揚)</p> <p>T24：山はどうだった？ 楽しかった？</p> <p>T25：何かみつけた？ ●松ぼっくりがあつたやさ…●</p> <p>T26：また、行こうね。</p> <p>T27：どんぐりあった？</p> <p>T28：秋には、あんなにたくさんあったのにどこに行っちゃったのかね。</p>	<p>丸太でくんだ橋</p>
---	---	----------------

教師の指導後の反省

年少児には、うす暗い山道よりも園から権現までの道の方が、環境が次々に変化するため関心が高まっていた。年中児は、頂上でおみせやさんごっこが始まった。松ぼっくり、くり、どんぐりなどを拾い、石をお金にして数をかぞえながら満足そうに遊んだりした。また、大きな石の下に虫がいっぱい入っていたことから、「寒い寒いってかくれていたんじゃない？」と、つぶやいていた。年長児は曇天で海と空との区別がつかないため、「海と空がくっついたらね」「船がみえる」寒さのため、「口からけむりがでるよ」「これは、息っていうんだよ」などの会話があった。頂上では、木の棒を拾って忍者ごっこをする子もいた。

〈考察〉

園外活動をくり返すことにより、子どもたちの観察力もたかまり教師よりも目ざとく自然の変化を感じみつけるようになった。それに対する教師のはたらきかけも臨機応変に対応して示唆したり、高揚したり常に指導者であることの心がまえが大切であると再認識した。

4. 親子のふれあい

(1) 生活の中に位置づけた親子のふれあい

親自身からの発案で、率先して家族の体力づくりをかねて、親子のふれあいを深めている

家庭がある。一か月に一度「権現デー」を決めて、このように生活の中に計画的に位置づけてこそ、本当に長続きする親子のふれあいと体力づくりができるものと思われる。

歩き通すことは「がまんしてやりぬく」という根性の育成にもつながる。かつまた、自然に親しむこと、交通安全に対する教育や、道徳教育の一端もできるという効果がある。今では、一か月に一度の「権現デー」を子どもたちは勿論、母親自身も楽しみに待つようになってきた。歩いている途中、冬の自然にも関心がいき、枯れた木や草をみて、「あっ、この木、冬に負けただよね」「ちがうよ。ねてるだけだよ」「枯れたけど春になると、また緑になるんだよね」「ふーん」

等々、次から次へと話がはずみ、親も子どもの心に同化するようだとっている。

このように親子のふれあいをしながら歩くことは、精神的にもやすらぎを与え、子どもにとっては、心の安定と満足感も与えている。

親子そろっての体力づくりをかねての「権現デー」を実践しているこの家庭のよろこびが更に多く家庭に広がることを望む。

体力づくり

年長児母 小原 慶子

最近、子どもたち（小五の長男、小二の長女、幼稚園年長の次女、年少の三女）と話しあって月に一度、権現の森へ歩いて行く「権現デー」を決めました。今までどこへ行くにも車に乗って用を足し、遊びに出かける時にも必ず車です。この「権現デー」を決めた時、末娘が、「何で歩いて行くの？ 歩くと疲れるじゃん。車で行かにやあいやだ」と、泣いておこりました。他の三人は権現の森に行けること自体が嬉しいので、大喜びでした。はじめての権現デー。おにぎりとおやつを自分自分で持ち出しました。距離は2kmくらい。道中、子どもたちとおしゃべりをしたり、いろいろな木々や草花をみたりしました。今まで、さっと通り過ぎただけで気づかなかったことに目が向き、親子で感動してしまいました。とても、嬉しく思いました。権現の森に着き、休む間もなく、遊び回りました。遊ぶ子どもは、とてもいきいきして気持ちが良いです。おにぎり、おやつを食べた後もたくさん遊べました。そして、帰りました。帰る途中、「疲れたよォー。だっ」と、言っていた末娘も他の兄弟に励まされ家まで歩き通しました。おおいにほめました。「来月も行こうね」と言うとう、喜んで「うん！」です。歩くということは、健康にとってもよいこと。それに、道中自然に親しむことができる。道路の歩き方、渡り方の再確認ができる。人に会えばあいさつもできる。とても有意義なことだと思います。私たちの体は、神様からの借り物といえます。この体を大切に使用してもらうためにも体力づくりを親子共々楽しみながらさせてもらおうと思っているこの頃です。

(2) 子どもに刺激されてつくった山登りの会

幼稚園の近くの団地に住んでいる母親たちが、子どもたちが登る蔵王山に親も登ってみようとして結成したグループがある。

これこそ、幼稚園と家庭との連携が自然にできてきた成果だといえる。狭い家の中から出て、自然環境の中へ足をのぼすことは、ストレス解消の効能大といえる。

(3) 子どもに教えられての山登り

幼稚園でいつも登っている蔵王山に親子で登る計画は以前からしていても、なかなか親の都合で実践が伴わない家庭が多い。これは、2月のある土曜日、子どもと約束して実践したものである。

子どもが朝からわくわくしながら楽しみに待っているようす。また、登山中は、子ども自身が先生になった気分で両親にいろいろと気をつかって行動している様子が伺え、何ともほほえましい。また、秋に来た時に見つけたどんぐりの実のこと、夏にとんでいたはちのことなどを親に話して聞かせる子どもの得意気な顔も想像できる。そして、うれしそうに親と手をつないで、

「もうすぐだからがんばってね」

と励ましていることなど、かわいらしいしぐさでのことばや、いたわりの心もあらわれている。親は、頂上へ着くとやれやれと思うのであるが、子どもは元気はつらつとして遊び始める。この様子をみた両親が、子どもの成長した姿をまのあたりにみて、再度、感激を新たにしている。

子どもに教えられての山登り

年中児母 鈴木 朝子

「お母さん、きょうは何時頃出かけるの？」

朝から楽しみにしている子どもの声。わたしは、外を見て（この天気ならいいかな）と決め、

「二時頃から出かけようね」

というとき、

「早く帰ってきてね」

蔵王山に登ろうと約束したものの両親共働きのため、なかなか親子そろって山登りをする機会もなく過ぎてしまいました。

私が帰宅し、さあ出発しようという時に父親がちょうど帰って来て、

「たまには、蔵王山へ一緒に登ってみるか」

といい、親子三人で登ることになりました。

娘は、うれしさを体で表現するかのように歌いながら走って登っていきます。

「お母さん、早く早く。お父さん、ちょっと待ってよ。お母さんが可哀想だよ」

「気をつけないと危ないよ」

「前に来た時は、どんぐりがたくさんあったよ。それに、はちもとんでいたよ。気をつけないと危ないからね」

幼稚園でみんなと、登った時の様子について、くわしく話してくれます。

くずれかかった石段の所へ来ると、

「こういう所では、手をついて登るといいんだよ。こうやってね」

と、登り方を見せてくれます。つぎからつぎへと話がはずみ、うれしそうな顔。いつのまにか手をつないで歩いています。

「敬子、疲れないの？」

「お母さんは疲れたの？ もうすぐだから、がんばってね」

と反対に励ましてくれます。権現の森から登り始め30分ほどで山頂に着きました。

やれやれ、やっと着いたかと、わが娘をみれば、もう、アスレチックへと走っていきました。

「すごいなあ。走ったり歌ったりして休まずに登ってしまうんだから」

と父親も驚いています。

アスレチックに夢中になっているわが娘の後ろ姿を見ながら、まだまだ小さいと思っていたけれどいつの間にか心身共に成長し、たくましくなったものだと思います。

これからは、山登りによい季節。機会を見つけて、親子でがんばって山登りをしようかと思いました。

V 研究の結論と今後の課題

園外保育の活動をすすめてきた結果、次のような成果が認められた。

1. 子どもの体力面について
 - 登る速さ、足腰の強さなど、回を重ねるにつれてたくましさが増してきた。
 - 下山の時など平衡感覚を自分でつかみ、ころばないようにしてきた。
2. 子どもの観察力について
 - 雨の翌日の山道は、かれ葉のにおいがいっぱい、「先生、なんか山のにおいがする」と、ちょっとしたことにも気がつくようになった。(年中児)
 - しいの実が、どんなどころに落ちているか等にくわしくなった。(年中児)
 - その日の状況、季節により「今日は道がぬれてるね」「今日の石はつるつるするね」「葉っぱが赤くなってきたね」と、回を重ねるごとに周囲をみるようになった。(年中児)
3. その他
 - 速さを競い合い山道を登ることによって“頑張る気持ち”などが目芽えてきた。また、アスレチックなどを通して“挑戦する気持ち”も養われてきた。
 - 集団行動もよくできるようになり、約束や指示をよく守るようになった。
 - 子ども同士の結びつきが広がり、自然に触れながら、気分的に解放されて楽しく活動するようになった。
4. 親子のふれあいの拡充について
 - バス登園を徒歩登園にして親子のふれあいと体力づくりを試みた家庭がある。海岸ぞいトヨタ自工の団地から山を一つ越えて幼稚園まで一時間もかかって歩き、自動車が来た時の安全な歩き方や、道ばたの雑草の実を服につけこしたりして歩いたり、ワイワイと楽しみながらの登園風景。親とのリラックスした会話などから子どもの成長を再確認した親もいる。
 - 親子のふれあい登山を実践した記録を園だよりで知り、休日を利用してこの頃では蔵王山登山を試みる家族が増してきた。この実践の輪をこれからも広めていきたい。
5. 今後の課題
 - 広い場所での様々な反応を示す幼児の姿をどうとらえ、そのための適切な指導や示唆を与えるには、どうしたらよいか等、教師自身が事前研究することが大切である。
 - 園外保育は楽しい体験も得られるが危険がつきまとう面もある。引率者はなるべく多くし、安全対策を講じ、幼児自身も自ら安全に対する態度をとるように指導することが必要である。

⑧

共同研究



ひとりひとりの幼児が身近な環境にかかわりながら夢中になって遊ぶにはどのように指導したらよいか

—砂や土を使っての遊びを通して—

富山県新湊市立本江幼稚園
〔代表 能松富士子〕

Ⅰ 主題設定の理由

本園は、富山新港東側の静かな田園地内に位置している。田んぼ、畑、小川、海などに囲まれており、豊かな自然に恵まれている。

園児は、6地域から通園しており、住居が互いに離れている。そのため近隣の友達と遊べず友達同士育ち合う機会が少なくなっている。また、少数の子どもに、比較的多くの大人がかかわり過保護・過干渉になりがちである。幼児の多くは、基本的な生活習慣にかかわるしつけや挨拶等はよく身につけているが、けんかが少なく自己主張をあまりしない。素直な性格で従順であるが、自分から取り組んだり、挑戦しようとする意欲に乏しく自発性に欠ける。

砂や土は、可塑性に富み、作ったり壊したりなど子どもの働きかけで、自由に変化させて遊ぶことができる。その素材のもつ優しさ、不思議さ、おもしろさ等から、子どもの心に安定を与え、さまざまなイメージをかきたて楽しく遊ぶことができる。また、砂や土を使った遊びでは、自然に会話が生まれ、心をふれ合わせることから、友達のつながりも深まる。そこで、これまでかかわって遊んだことの少ない身近な自然環境の中で、夢中になって遊ぶ子の育成をめざし、本主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

1. 幼児が、十分に自己を発揮し、夢中になって遊べるような環境づくりについて考える。
2. 一人一人の幼児の活動の姿をとらえ、成長の発達の仕方を探り、個々の援助活動をする。

Ⅲ 研究の内容と方法

1. 研究仮説

- 幼児の心の動きを大切にし、幼児の考えをもとに、のびのびと遊べる場、補助材料、用具を準備し構成すれば、活動意欲が高まり遊びを发展させることができる。
- 経験を生かした遊びを繰り返す中で、教師の励ましや援助、友達の認めや助け合いなどから、友達と遊ぶ楽しさを知り、“やった、できた”という満足感や充実感を味わうことができる。



2. 研究の内容

幼児の活動意欲をそそる魅力的な環境構成と、教師の援助のあり方について研究を進める。

- (1) 環境を生かした実践活動を通し、遊びをみつけ遊びこんでいく姿から育ちをみつめなおす。
- (2) 砂や土での遊びの様子と日常生活の様子、また相互の関連などから、遊びの発展や崩壊の要因をさぐり、望ましい援助のあり方をさぐる。
- (3) 砂や土を使った遊びを通して、父兄との連携を深め、幼児理解に努める。

3. 研究方法

- (1) 実践保育を通して、幼児の言動や遊びの様子をビデオやメモ等の記録をもとに観察し、どのような発達の姿を示すかをとらえる。
- (2) 幼児の自主性や自発性を育てるための環境（友達や教師とのかかわり方）を工夫する。
- (3) 効果的な連携をはかるために、おたより帳、懇談会を通し、遊びの意義や子どもへのかかわり方について話し合い、共通理解のもとに指導にあたる。

4. 研究実践の計画

- 春の自然に親しむ
 - 泥んこ（田）で遊ぶ。（だんごづくり、おぼけごっこなど）
 - 砂や土で遊ぶ。（ごちそうづくり、こたつづくり、山づくりなど）
- 夏の自然に親しむ
 - 砂浜で遊ぶ。（砂風呂づくり、池や山づくりなど）
 - 砂や土で遊ぶ。（天の川づくり、トンネルづくり、プールづくりなど）
- 秋の自然に楽しむ
 - 砂や石で遊ぶ。（町づくり、楽器づくりなど）
 - 畑の土で遊ぶ。（芋掘り、球根植えなど）

- 冬の自然に親しむ
 - 紙粘土で遊ぶ。(おかしづくり, ペンダントづくりなど)
 - 雪で遊ぶ。(雪だるまづくり, 雪山づくり, 氷づくりなど)

Ⅳ 実践例

1. 活動1——「田んぼで遊ぼう」(4・5歳児混合保育, 31名)

(1) 活動の概要

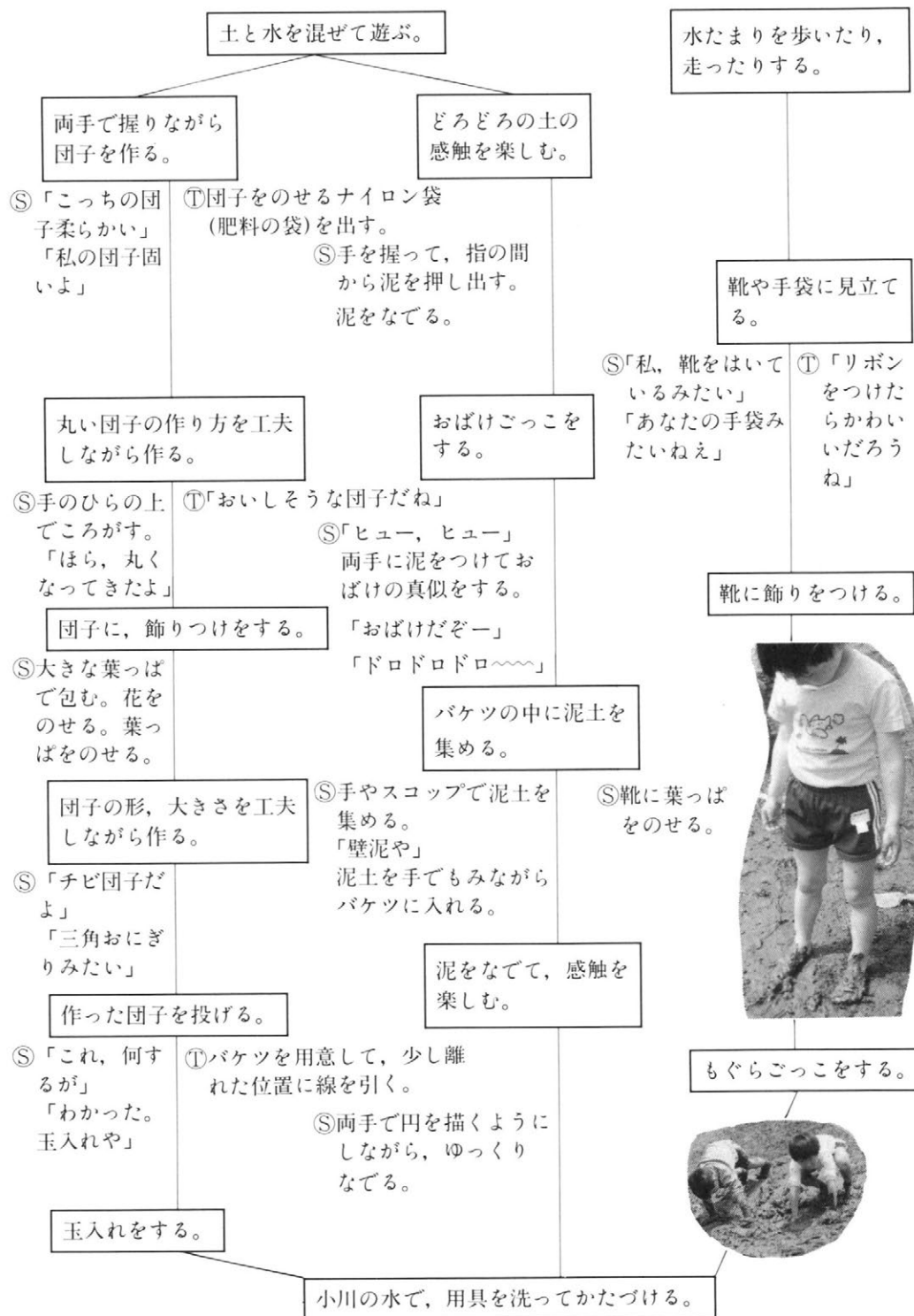
園より約500m程にある休耕田を借用した。幼児は、汚れてもよい服装に着替え、素足になって出かけた。途中のじやり道では、「ちくちくして痛い」「あったかい」などと素足の感触をつぶやきながら歩いていた。田んぼでは、幼児の要求に応じながら水を準備し、乾いた土が少しずつ変化していく様子、田んぼの土と園庭の砂や赤土との違いに気づくように配慮した。

(1日目) □……主たる活動 ⑤……幼児の様子 ①……教師の援助活動

	□ シャベルやくまでで、土を掘る。	
	⑤ 穴掘り, トンネル作り, 迷路作り 「水, ないかなあ」 「水, ほしいのう」	
	□ 水たまりから, シャベルやスコップに水を入れて, 運んで来る。	
	⑤ 「粘土みたいになった」 「もっと, 水持ってきて」	① 大きな空き缶(1個)を出す。
	□ 友達同士力を合わせて, 空き缶に, 水を入れて運ぶ。	
	⑤ 「川になった」 ○穴の中に溜った水の中へ足を入れ 穴の深さを見たり, 感触を楽しむ。 「すべるぞ」	① バケツ(21個)を出す。
	□ 小川から水をくみ, 自分たちのグループの場所へ水を運ぶ。	
	⑤ 「コーヒー風呂や」 「落とし穴だー」	① 「わあー, 足がぬけない」
	□ 泥んこの中へ, 手や足を入れて遊ぶ。	
	⑤ 「ぬるぬるするよー」 「どろどろや」 「深いよー」 「あなたチェンジロボみたいよ」	① 用水の水を田んぼに引く。 (次回の活動への意欲づけ)
	□ 水の流れる方へ走り出す。	
	⑤ 「キヤー」 「つめたい」 「足がぬけないよー」 ○泥んこから, 足をぬく時の音を確認している。	

○活動の実践にて
↑具体的に記載

(2日目)



(2) 活動の実践

活動の過程で思わぬ現象に心引かれて遊びを発展させたかずあき君たち

□-----主たる活動 ①-----教師

<p>環境の構成</p>		<p>用具</p> <p>スコップ 20本 シャベル20個 くまで 7個</p> <p>(幼児自身で遊びに必要なものを選んで、出かける。)</p>
<p>幼児の活動の様子</p>		<p>教師の援助活動</p>
<p>○あき缶の周囲に水がこぼれて、ペチャペチャになる。</p> <p>(のぶゆき)「わあー」足をすべらせて、身体のバランスをくずす。 (かずあき)「ようへい、ここすべるよ」 (ようへい)「しりもちついたらだめやぞ」</p> <p>○足をすべらせて喜ぶ。</p> <p>(つよし)「すべる、すべる」 (かずあき)「わあー。すべる」 (のぶゆき)○足をすべらせながら踊り出す。 ① のぶゆきを真似て、すべる。</p> <p>○バケツで、小川の水を繰り返し運ぶ。</p> <p>(けんたろう)○土と水を混ぜて、トンネルを作る。 (まこと)「先生。川になったよ」 (たけひろ)○川を掘りながら水を流す。 (のぶゆき)○穴に水を入れる。 (かずあき)「もっと掘れ、もっと掘れ」 (のぶゆき)「わあー。やった」「コーヒー風呂や」</p> <p>○どんどん土を掘り、水を入れる。</p> <p>(かずあき)○穴の中に足を入れる。 「落とし穴だ。先生も歩いて来られ」 ① 歩きながら、落とし穴に近づく。 「わあー。落ちた。足がぬけない」</p>		<p>○幼児が泥土で、足をすべらせ、驚いているかずあき君やのぶゆき君の活動を大切に見守る。</p> <p>○幼児といっしょに、足をすべらせて活動に加わる。</p> <p>○バケツ20個を出す。 「小川から水をくんできてもいいよ」</p>
<p>○穴の中に足を入れて遊ぶ。</p> <p>(たけひろ)「ぬるぬるするよ」 (のぶゆき)「ドロドロや」 (かずあき)「こっち、深いぞ」</p>		<p>○幼児の作った落とし穴を認めてやる。</p> <p>○泥土の感触をどのように感じているか、観察する。</p>

家庭からのたより

「田んぼ遊び」ってどんなことをするんだろうと、親子ともども楽しみにしていました。田んぼでの子どもたちの様子は、みんないきいきとしていました。

その日は家へ帰っても数人でどろんこ遊びをしていました。

でも、ばあちゃんたちに見つかってすぐやめさせられてしまったようです。家ではわりとみんなどろんこ遊びはいやがられているので、子どもたちにとっては楽しいひとときだったようです。

しいていえば、もう少し暑く、パンツ一枚で遊べる時期におもいきり遊ばせてあげればよかったなあと思いました。

家でも結構どろや水を使って遊んだりしていたものですが、そのたびに「きたないことやめられ」と子どもの遊びをさまたげてきたように思います。

当日、家に帰ってきて「お母さん、ころんじゃった。服ドロドロになっちゃった。おもしろかったよ」のひと言の顔のキラキラ輝いていたこと、体のあちこちに乾いたどろのあとを見て、本当に自由にすきなことをおもいきりして楽しかったんだなあ、私もついついうれしい気持ちになって「よごれたとこ洗っておかれ」とやさしく言えました。またあってもいいです。

(3) 活動1——「田んぼで遊ぼう」の実践から

幼児が自らの考えをもとに、のびのびと遊べる場として休耕田を指導計画に位置づけた。田んぼで遊んだことが初めての経験だったため、固い土をどのようにしたらよいかと、戸惑いながら遊び出した。

かずあき君が水をほしいと思い始めたことから水くみの活動が発生し、水にぬれた土のドロドロやぬるぬるの感触に驚き、その感触を楽しみだした。そして、「掘る」「積む」「すべる」「つかむ」など、多様な土との取り組みが展開された。

砂の中に水を入れても、砂の状態はあまり変化しないが、土は柔らかくなり、ドロドロになるという驚きや思う存分泥んこになって遊んだことが、幼児を夢中にさせていったのだろう。また、幼児が水を要求し、その要求に教師が応じるという、幼児の主体的な活動を見守る教師の構えが、活動意欲を高めたと思われる。

ひとりひとりの幼児が、田んぼで遊んだ時の驚きや楽しかった様子を家庭で話したことか

ら家庭から園にたくさんのたよりが届いた。園では、遊んだ後の衣服の汚れがひどく、家庭からの反応を心配していたが、子どもたちの活動に、暖かい理解が得られたようだ。そして、砂や土を使つての遊びの大切さが少しずつ理解され、家庭での遊びにも広がっていった。

2. 活動2——「大きい山を作ろう」(5歳児, 17名)

(1) 活動の概要

保育室や砂場から、障害物もなく、ストレートに見える呉羽山を眺めながら、幼児のもつ山のイメージや、「あのような山を作りたい」という願いなどを大切に、教師も活動の仲間入りをしながら展開させた。

最初は、個々に山作りを始めたが、活動の途中から、教師が幼児達に負けないくらいの土山を作ろうと活動に加わった。このことがきっかけとなり、徐々に仲間を増やして砂山作りを進めていった。

作りながら、崩れない高い山作りの工夫(砂に土や石をまぜる、斜面をたたいてかためるなど)をしたり、友達といっしょに力を合わせれば速く大きい山を作ることに気づいたりしていった。

そして、最後には、砂山と土山の高さ比べへと発展していった。

(2) 活動の実践

幼児の心をゆさぶる集団の刺激から活動を発展・工夫していったさくら組

□……主たる活動, ①……教師

環境構成	場の構成	用具
		○シャベル 20個 ○くまで 7本 ○バケツ 20個 ○スコップ 18本 ○二輪車 2台
幼児の活動の姿		教師の援助活動
○保育室から見える眺めについて話す。 (けんたろう)「山が見える」 (りょうこ)「ほんとだ。山がずうっとある」 ① 「高い山だねえ。先生、あの山作りたいなあ」 (けんたろう)「とんがり山を作ろう」 (かずあき)「富士山にしよう」 ○どの幼児も一人で一つの山を作り出す。 ① 上の所で「大きい山作るぞ」と、山を作る。 (のぶゆき)「先生の山、大きいなあ」		○「向こうの方に何が見えるかなあ」と窓の外を眺めさせ、「先生、あの山作りしたいなあ」と心を動かして活動するように呼びかける。

(のぶゆき) 「りょうちゃん、合体しよう」

(りょう) 「うん」

○ 2～3人のグループで作り出す。

(けんたろう) 「先生の山に勝ってきたよ」

(かずあき) 「勝ってきたぞ」

㊦ 「ああっ、先生負けとる。がんばろう」

(つよし) 「先生になんか負けないぞ」

(ようへい) 「がんばろう」

㊦ 「わあっ、先生、負けちゃうよ。だれか手伝って」

(けんたろう) 「ぼく、手伝ってあげっちゃ。まこと君一人でやれやれ」

(まこと) 「おう」

(ようへい) 「こっちも4人パワーでいくぞ」



○ 歩きながら砂運びから、足の位置を変えないで砂を砂山に積み上げていく。

○ 4人から6人と、人数を増やしていく。

(のぶゆき) 「こっちは、6人パワーになったから負けないぞ」

○ 砂山に土や石を混ぜてかためる。

(けんたろう) 「ぼく、土持ってきてあげっちゃ」

(かずあき) 「うん、持ってきて」「この砂山に土まぜよ」

㊦ 「どうして土まぜるの」

(かずあき) 「かたまって、かたくなるが」

㊦ 「そうか、いい考えだね」

(けんたろう) 「いつやら、あの山へ行って、がけくずれしたの」

(ふじお) 「うん」と返事し、土山に小石を入れる。

(けんたろう) 「コンクリートにしよう。強い山になるよ」と二輪車に小石を入れて、土山の方へ持ってくる。

○ 砂山の数を一つに統一していった砂山グループと、土山グループの二つに分かれる。

(ようへい) 「こっちは、12人パワーになりました」

㊦ 「わあ、すごい山できたね」

㊦ 「どっちが高い山かなあ」

(砂山の幼児達) 「こっち、こっち」

(土山の幼児達) 「なあん、こっち」

㊦ 「どっちかなあ」

○ ひもで山の高さを比べる。

(たけひろ) 「先生、ひもでどちらが高いかわかるよ」

(かずあき) 「ほどけたひもの端をもって、土山の方へ「ちっちちっちちっ〜月」と口ずさみながら走る。

○ 大きい山を作るという目的意識を高めるため教師も活動の中に加わり、土山で大きい山を作る。

○ 「負けちゃうよ、だれか手伝って」と言葉がけし、人とのかかわりを深めさせる。

○ 友達と協力しながら、速く高い山ができるよう工夫している幼児達の姿を見守る。

○ 山作りで工夫している幼児には、個別に言葉かけをし、ほめる。

○ 高さ比べのアイデアがでるよう促す。

○ ひもで山の高さが比べられるという幼児のA

- (かずあき) 「おい、そっちもて」
 (ようへい) もつ。
 (かずあき) 「やっぱり、砂山の方が大きいや」
 ㊦ 「そうかなあ。土山の方が高いんじゃないかなあ」

○山の斜面の長さを比べる。

- (たけひろ) 両手を広げて、山の斜面の長さを測る。
 (りょう) 園庭に落ちていた木の枝(12m程)を山の斜面に置いて砂山と土山を比べている。
 ㊦ 「りょう君、何してるの」
 (かずあき) 「先生わかった。砂山に棒おいたら、てっぺんに届かんけど、土山に棒おいたらてっぺんまで届くよ」
 (幼児達) 「やっぱり、砂山大きかった」
 ㊦ 「そうだったね。砂山の方が大きかったね」



アイデアを取り入れ、ひもを提示する。

○山の高さ比べを自分なりに試みている子にはみんなの前で表現するよう促す。

(3) 活動2——「大きい山を作ろう」の実践から

いつも何気なく眺めている「呉羽山」を指導計画に位置づけて展開した例である。

「何が見えるかなあ」という教師の声を耳にし、前方に広がる山並みを目にし、視覚と聴覚の刺激が幼児の心を動かし始めた。「大きいなあ」「高いなあ」「作ってみたいなあ」「〇〇の山にしよう」という心の動きが、初めは、個々に小さな砂山を作り、しだいに合体を重ねてやがて一つの砂山となった。片方では、教師が幼児と同じように土山を作り始めた。このことが、より高い砂山を作ろうとする意欲をかりたて、互いに高い山作りの工夫をすることへと発展していった。このような活動の状況は、教師のかかわり方が、幼児同士のかかわり合いに大きく反映し、人間関係を広げる要因となったと考えられる。

V 研究のまとめと今後の課題

1. 場の構成から

土や砂を使つての活動は、一般的に砂場や幼稚園園庭を考えるが、大自然に触れての活動は自然現象の不思議さ、おもしろさに気づき、個々の能力に応じた活動ができると考える。たとえば、田んぼに例をおくならば、穴を掘る、足ですべる、土をつかむ、トンネルを作るなど、個々の特性、能力に応じての活動が展開できる。従つて、個々の幼児の活動に応じた場の構成について、今後自然環境にかかわる保育面から見直していきたい。

また、教師は、事前の環境構成のみならず、活動の途中にも幼児の動きに応じて補助教材などを付加することで活動も発展的になると思われるので、幼児の活動の姿やつぶやきをよく見

つめ、幼児と共に活動することを心がけたい。

2. 心の動きから

幼児は、思わぬ自然現象を体験した時や、自らの発想に基づいて活動に取り組む時、生き生きとしている。砂や土での遊びでは、ここの条件を多くもつ活動である。そのため、いつも消極的に遊んでいる子ども、不思議に思ったことや発見したことをつぶやいたり、自分の思いをはっきり主張したりして、生き生きと活動する姿がみられた。これらの姿こそ、自己を確立していく基盤になると考える。従って砂や土での遊びは、幼児期に十分経験させたい活動である。

また、幼児は、心を動かし、自分自身のめあてをもって活動に取り組むと夢中になって遊ぶ。幼児が、心を動かして遊び込む要因には、思わぬ現象に出くわした時、願いをさらに発展させようとする時、友達と刺激しあいながら交友関係が高まってきた時等が考えられる。

3. 家庭との連携から

園での遊びの様子を教師を通して家庭へ知らせることも大切であるが、それよりも幼児自身が遊んだことの胸のふくらみ（感動）を言葉より体で家族の人に感じとらせていった。このことから、親や祖父母の砂や土での遊びの拒否反応を取り除き、地区ぐるみで空き地に砂場を作ったり、家庭に砂場を作ったりした。日頃の実践の大切さをつくづく感じた。

また、ビデオで記録した園での遊びの様子を定期的に父兄の方々に視聴していただき、幼児期の遊びの大切さや親の接し方等について、今後話し合う場を設けていきたい。

4. 交友関係から

いつも決まった友達と遊ぶ幼児も、夢中になって遊びだすと、ごく自然にいろいろな友達とかわり、共通のめあてをもって遊びだすことがよくあった。

活動過程の中で、偶然に共通のめあてであったり、また、個々に作り出した遊びがどこかで合体した遊びになったりすると、その喜びが非常に大きく、さらに共通の喜びとなり、心の通い合いとなっていくことがわかった。

⑨

共同研究



野菜（畑）づくりを通して、園と家庭と地域のつながりを深め、豊かな心と健康なからだづくりをめざす

福井県福井市立北部保育園
〔代表 前田喜代恵〕

Ⅰ 主題の設定の理由

生活様式の変化とともに、育児に対する考え方もかわり、最近の育児傾向に疑問をもつことが多い。当園は市街地で、園庭も非常に狭く、自然環境にもあまり恵まれていない。

子どもの実態を見ると、歩くことは上手でなく、よくころぶ。暑いから、寒いから、疲れるからと動くことを好まない。また、家庭環境としても、本県は母親の就業率が高く、降園後の育児は祖父母の手にゆだねられることが多い。交通量が激しく、家ではテレビ・ファミコン・既製の玩具でのあそびが多くなりがちで、外でのびのびとあそぶ子どもの姿はあまり見られない。保育園での生活が長時間で多年にわたり、母親が忙しく園に預けっぱなしになりやすいことなどを考えると、子どもの成長発達における園生活や環境はどうであろうか。

子どもが目を輝かせながら、意欲をもってあそび、給食をばくばく食べて、力いっぱい動きまわり、ぐっすり午睡をし、きげんよく過ごすには……。もっともっと運動量を多くし、戸外に出かけることで活動範囲を広げ、自然に触れ、感覚を十分に働かせて発見や感動をし、自らの手づくりだすことへの喜び、生きているものへのいたわりや、いやなことでもがんばってしようとする強い心をもたせたい。これらを満たす活動として、野菜づくりを取りあげ、家庭と地域の協力を得ながら、すすめていきたいと考えこの主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

1. 自らの手づくりだす喜びや、感動、目的意識、知的発達、仕事への意欲を育てる。

2. 野菜づくりを通して、園と家庭、さらに地域へのつながりを深める。

Ⅲ 研究内容と方法

1. 年間計画を作成し実践する。
 - (1) 畑の土地探しをする。
 - (2) 収穫した野菜を料理する。
 - (3) 日々の活動を記録する。
2. 園での活動内容を、いろんな方法で家庭や地域の人に知らせ、アンケートで意識調査をする。

Ⅳ 実践例

1. 畑の誕生

マンション建設のため、従来の畑を返却することになったある日、散歩に出かけて畑のあった所をみると、きれいに地ならしがしてあった。「ぼくらの畑もうないよ」「どうしたの」「野菜もうつくれんの一」と、現実を目のあたりにしての声であった。畑になりそうな空き地を求めて、子ども達と一緒に、まいにち、まいにち園の周辺を歩きまわる。保護者の方からも、「畑はどうするのですか」「どこかにあるといいですね」「ぜひ続けてください」などの声もきかれ、空き地を見つければ役員さんといっしょにとんでいき、地主さんをお願いした。

しかし、周辺は住宅地でなかなか見つからずなかばあきらめている時に、いろいろとトラブルはあったが、距離もほどほどのところでようやく借りられるようになった。しかし、いざ畑にしようと思えば、地面は硬く、ほりおこそうにもスコップがささらず、畑用の土を入れる。荒れた土地の雑草や笹の根を保護者と職員（保母と調理員）で取り除く。

春の種をまく時期より少し遅れて約165㎡の畑が誕生する。

2. 野菜づくりの年間計画と実践

(P.100～101参照)

3. ぼくらははたけ 5歳児

◆畑の草をとりましょう！

6月中旬から、野菜の花や実が沢山つきはじめた。子ども達にも、目に見えて野菜の成長が



わかり、収穫への期待がますます出てきた。また、収穫できるようになると、以前にも増して畑へ行く楽しみも出て来た。「なす、実がなってるかな?」「ピーマン、大きくなって、もうとれるかな?」など気になってくる。雑草がのび始めて、畑はうっそうとしてきた。「お水いっぱいあげよう!」「雨が降る時は水まきせんでいい」「太陽も出んと大きくならんよ」と野菜に関心を持って見に行くが、雑草には気づかない。(保母としては、子どもの方から草とりに、気づいてくれないか待っていたが気づかない。)保母が、黙々と草とりをしていると、「先生何しているの?」「きょうは畑のお掃除やよ。いらぬ草をとろう。草とりしないと、野菜の栄養とられてしまうから……」と知らせ草とりをする。子ども達にとって、草とりのしごとは収穫とは違って楽しいことではない。

たまたま、雨あがりの日、雑草が根っこから、すうーととれるので、「うまく根っこから、とれるよ」「先生草の山できた」「へー根っこって白かったんや!」などおもしろがったり、新しい発見にもなったりして草とりが遊びとなって楽しんでいった。草とりは、子ども達の手では追いつかず、保母や、いつも気にとめてくださるおじいちゃんの協力もあって、子どもと共に毎日少しずつ進めていった。

◆暑いけど、お世話頑張ろう!

7~8月は収穫ラッシュで、試食したり自ら調理してバーベキューやカレー作りと、活動の広がりと共に、ますます野菜の収穫に楽しみが深まっているものの、暑い中での草とりは大変であった。土が硬くなり、雑草は抜けず、「あつーい!」と不満の声も出てきた。汗びっしょりしている子ども達。そんな中、野菜の世話への関心は薄れ、単に試食する方へのみ関心は移ってきているようだ。

夏まつりや夏休みがあって久しぶりに畑へ行くと、トマトの実が熟しすぎていたり、なすの実がわれてしまっていて無残な姿になっていた。「あれー、なすがわれてる」「トマトが、ぐにやぐにや」と野菜の姿にがっかりし、期待はずれとなってしまった。「なんでこうなったんかな?」「毎日見に行かんかったでや」「水やりや草とりの世話をせんかったでや!」と言うことばが、子どもたちから出た。「明日から毎日畑へ行こう」と、気持ちも高まった。

小さい子たちに、畑でとれた野菜を、食べさせてあげて、喜んでもらった時、また、おうちの人に見せてほめてもらった時、畑の行き帰りに、近所の人に「畑づくり、頑張ってるね」「おいしそうな野菜がとれたね」とほめてもらった時の満足感があって、畑づくりの喜びを改めて感じとってくれた。みんなが自分たちの畑づくりに、期待をもってくれているといったことも励みとなって、次の日から、再び、水やり、草とりの世話がはじまった。友だちのおじいちゃんも、暑い中やって来て、一緒に草むしりをしてくださったことで、ますます『やらなければ!』という気持ちになって全員が頑張ってくれた。

はたけのうた



翌日雨と強風の悪天になった外を心配そうに見ている、「いちごの苗大丈夫かな?」「ぐちゃぐちゃになっていないかな?」「雨ふったらダメ、早く天気になれーっ!」

数日後ようやく雨も上がり、早速畑へ。「あっ、かわいそう!」「黒いおふとんとんでってしまったよ」土にうもれた葉をそっと出し、流れ出てしまった肥料を直す。子ども達の手は宝物を扱う様である。「何か白いものが出ているよ」「これは根っ子だよ。枯れなくてよかったね」と保母と共によるこぼ。

5歳児と一緒にいちごを食べた楽しい経験をしているので、進んで草とりをしたり、石を拾ったりする姿が出てきて、少しずつしごとに対する気持ちも育ってきている。

5. なんでも食べられるよ 3歳児

ピーマンマンの絵本と出会ったのがきっかけになり総合活動へと発展していく。年長児が畑にピーマンの苗をうえ、看板にピーマンの絵を描いてくれたので、畑に「ピーマンマンがいる」ことがわかる。どんなものができてくるのか楽しみに待つ。散歩のたびに立ち寄り「花がさいた、白い花や」「赤ちゃんピーマンマン見つけた」と変化に気づく。ピーマンが実り子ども達の手で収穫。落とさないように両手に包んだり、ポケットに入れ時々確かめながら園に持ち帰る。大きい子が収穫したナス、トマト、きゅうり等と一緒に塩もみしたり炒めて食べる。野菜の大嫌いな×ちゃんも、みんなにつられて、知らず知らず口にする。「×ちゃんすごいね。ピーマンもナスも食べられるのね」「うん、わたしピーマンマンになるんやもん! お母さんに話そ

4. いちごできてるかな 4歳児

園庭の苗を子ども達と一緒にとり畑へ持って行く。うねを作り、マルチシートをかける。じっと見守っていて「なんでそんなことするの?」「黒いのはなあに?」シートの周囲がめくられてこないよう子ども達の手で土をかけおさえていく。カッターで、シートに切りこみを入れ、各自一本ずつ苗を持ってしゃがみ保母と一緒に植えながら肥料も両わきに埋めこむ。「これは黒いおふとんやね」ここからつき破って草も生えるのかな?」「いちごのごはん(肥料のこと)ってウンチみたいやけど臭くないね」「口がないのにどうやってごはん食べるのかな?」

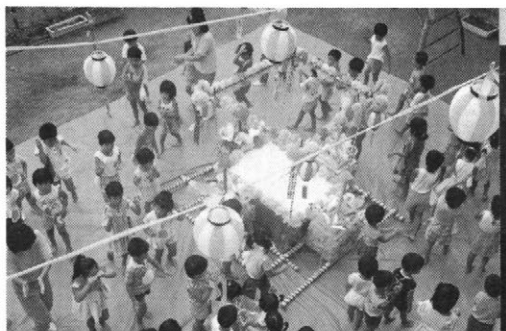
うっと」「本当に食べたんですか？」と半信半疑のお母さん。収穫のたびに味わっているうちに「家でもいやがらずに食べられるようになりました」と嬉しい声。天気の良い日は、どんどん外に出て遊ぶのでおなかペコペコ。園の給食もペロリ。今まで便秘がちだった子も毎朝できるように、おうちの人も大喜び。ピーマンマンの遊びや園での様子を毎日掲示板で知らせることで、親子の会話も多くなり、お家の人も関心を持つようになる。月2回の弁当も好きなもの中心から、野菜が入りバラエティに富んだものを工夫するようになってきた。何でも食べられる自信がつくとあそびも活発になってきた。

6. 保護者や地域の人といっしょに

園の行事や活動は、園内だけにとどまらず、保護者や地域の人に知らせ、園に来ていただいたり、いっしょに参加していただいたりしている。

- (1) 行事の内容を知らせる
- (2) 夏まつり、敬老のつどい、おもちつきにお客様を招待する。
- (3) お世話になっている方に収穫したものを持っていく。

▼保育園の夏まつり



保護者の感想文の中から

保育園に夏まつりがある。「じいちゃんおまつり見に来て」と、孫娘。おみこしが町内をねり歩く。ワッショイ、ワッショイ。近所の人もたくさん出てきて、おみこしに花をそえる。大つぶの玉の汗。気のせいか子ども達のがんばっている姿をみて、ジーンとくるものを感じた。

▶おとしよりの集いの御案内

ご案内

おじいちゃん おやばあちゃんいつも
ほろくえんに おむかえにきて
くれてありがとう。2にちおとし
よりのつどいがあります。
ぜひきてください。ほろくたちと
いっしょにあそびましょう。



おまわりさんとおもちつき
おまわりさんと地区の交通指導員さんを招待し、交通安全を願っておもちつきをする。おもちをたくさん食べて、交通事故にあわない約束をする。日頃お世話になっている地域の方にも食べていただくよう配る。

◀おまわりさんとおもちつき

7. アンケート（野菜づくりや散歩について子どもの育ちと保護者の意識を調べる）

(1) 設問 4), 6), 7), を図表にする。

〈アンケート〉回収率91%

- 1) 畑の野菜づくり、散歩など、戸外での活動に重点をおいていますが、どのようにお考えですか。
 ① とてもよい ② よくない…理由をおかき下さい ()
- 2) 野菜づくりのことが、おうちの中で話題になることがありますか。
 ① はい ② いいえ ③ あまり関心がない
 ④の方へ それはどのようなことですか、おきかせ下さい。

- 3) 収穫物の展示、試食コーナー、クイズをしましたか、いかがでしたか？
 ① とてもよかった ② 少なくともよい(○印をつけて理由を記入して下さい)
 いちばんよかったのを選んで2つ ○をつけて下さい。
 ○畑でとれたものが見られた 1. 展示
 ○親子でいっしょに考えられた 2. 試食
 ○試食ができた 3. クイズ
 ○大きいクラスの活動がよくわかる
 ○いろいろな知識が身につく
- 4) 園では収穫物を利用して、クッキング(料理)をしていますか、おうちでもなさったことがありますか。
 ① いっしょにやってみた(料理名) _____
 ② 知ってはいたが、忙しくてできなかった
 ③ 知らなかった
- 5) お家でお子さんといっしょに野菜をつくったり、世話をしたことがありますか。
 ① ある _____
 ② ない _____
 ④の方へ お子さんの様子をお聞かせ下さい。
 ① よろこんでしている
 ② 家の人に言われてやっている
 ③ いやがっている
 世話をしている時のエピソードなどがありましたら、お聞かせ下さい。
- 6) 野菜づくりをしていてよかったと思われる場所はどこですか。いくつでも○をつけて下さい。
 ① いっしょに料理をつくった
 ② 畑のことについて、共通の話題がもてた
 ③ いっしょに家庭で野菜づくりをした
 ④ いっしょに親子で畑の野菜を見に行った
 ⑤ 食べものの好きらいがへった
 ⑥ きらいなものでも、食べるようになった
 ⑦ まわりの様子によく気づくようになった

- 7) 野菜づくりや散歩を通して、お子さんに何が育っていると思われますか。
健康なからだ がまんするところ 知的関心 思いやり、やさしさ 特になし
- 8) お子さんにどのような変化がみられますか。
土いじりをいやがらない よくなるようになった
外へ出てあそぶのを好む よろこんで保育園に行くようになった
ごはんをよくたべる よろこんで歩くようになった
- 9) **5歳児の保護者の方へ** 当番で野菜や小鳥の世話などをしていましたが、お子さんは、どんな様子でしたか。
とても楽しみにしていた
当番の時間におくれないように気をつけて登園した
当番の仕事のことを家の人に話す
いやがっていた
年長児としての責任感をもっている
いよなこともあるががんばろうとする気持ちがあった
- 10) **4歳児の保護者の方へ** お子さんが5歳児になったとき、野菜づくりをさせたいと思いますか。
はい いいえ
- 11) 散歩にいったときのことを、お子さんから聞かれたことがありますか。
 (その時はどんなお気持ちかひと言ご記入下さい)
- | | |
|------------------------------------|--|
| <input type="checkbox"/> いつも話してくれる | |
| <input type="checkbox"/> 時々話してくれる | |
| <input type="checkbox"/> 話さない | |
- 12) 家の近所の方、又は地域の方から保育園の畑のことについての話題を聞かれたことがありますか。
 ある ない
の方へ それはどんなことですか、簡単にご記入下さい。
- (
- 野菜づくりや戸外活動についてどうお考えですか。
ご意見のある方は、簡単にご記入下さい。

ご協力ありがとうございました

設問4)



- 一緒にやってみた
知っていたが忙しくてできなかった
知らなかった

忙しい中でも親の意識が出てきて、一緒にやりたい気持ちが表れている。

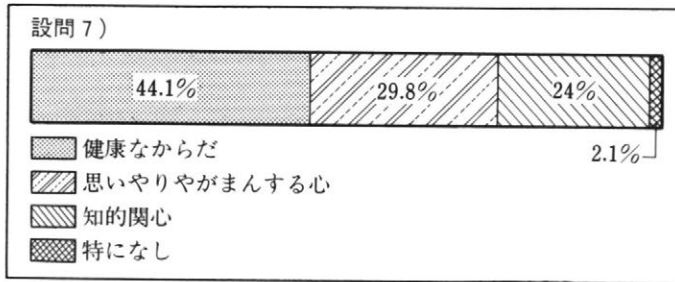
また、家庭菜園や親子で公園に出かけることも多くなってきている。

設問6)



- 畑のことで共通課題がもてた
家庭で野菜づくりをした
親子で野菜を見にいった
好き嫌いがなくなり嫌いなものもたべるようになった
まわりのようすに気づくようになった

親と子のかかわりが増え、自然に対する興味や食生活にも変化がでてきて、意欲的に生活できたことをうらづけている。



健康なからだは、各年齢とも第1位。第2位に4, 5歳児は心の育ち, 1, 2, 3歳児では知的関心がきている。心の育ちは周囲の環境や人と人とのかかわりによって育っていくために表れにくい。

その他9), 10)の設問から, 5歳児は自分達の生活に見通しを持ち, 当番や世話をすることによって自覚や責任感がでてきている。4歳児の保護者の多くは, 今後の野菜づくりや園外活動に期待を寄せている。

(2) 保護者の意見から抜粋

野菜づくりや戸外活動についてどうお考えですか。
ご意見のある方は簡単にご記入下さい。

他の園にくらべて, 外へ出ることが多いので, 喜んでいる。自分達で作って, 育てて, 食べるという中で, 子どもなりに満足感を味わい喜んでいると思います。汗をかいたらシャワーを浴びて, いたれりつくせりのお世話を受け, 長い間ありがとうございました。

協力的な意見が多い中で, 子どもの健康状態や活動範囲など親として心配する声もあった。ごく少数意見ではあったが, しっかり心に受けとめ, 配慮していきたい。

V 研究の結論と今後の課題

一年間をとおしてすすめてきた結果, がんばる, 相手を思いやる, 感謝する, 共によろこぶなどの, 人としての大切な心が, 少しでもあるが育ちつつある。畑の野菜づくりや戸外でのあそびを総合活動としてとらえ, たのしいあそびを十分経験したことが, 感動として言葉にも表れ, 心の糧となった。自らの手でつくり出すよろこび, 汗を流して最後までやりとげたよろこびは, 子ども自身のよろこびであり, 親のよろこびであり, 保母のよろこびである。

忙しい親にかわって, 目の前の子ども達をよく見つめ, 望ましい環境を設定することが, 園側に求められている。さらに, 子ども達に何を育てなければいけないのか, 親と共に考え, なお一層の理解と協力を得ながら, 今後の保育をすすめていきたい。

研究にたずさわった者

前田喜代恵	若山 裕子	濱田 智代	山本かすみ	跡部 節子	廣部 繁子
津波留美子	野坂 繁子	青木 京子	山腰 芳子	清水美穂子	栗林 和子
野田 真弓	坂井比都美	高須 峰子	古田 孝子		

9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
おとしよりのつどい	いもほり 親子で歩こう会	足羽山探検 歩け歩けさんぽ(木の葉,木の実ひろい)	もちつき会			畑のひきつき式
三尺さざげとナスのあえものカレーパーティー	やきいもパーティー △いもの茶の油いため	ちゃんこなべ △かぶの酢漬(保存)	たくあん漬け	たくあん試食		

← (大根・かぶ・さといも) →

5歳児から4歳児へ
○一年間の畑のライド、絵本、収穫表、畑のうた、などを送り、引き継ぎをする。

← (いちご・えんどう・きぬさや・玉ねぎ・4月菜) →



どうしてピンク色になったの…?
まほうのくすり、かけたのかな。
給食のおばちゃん
おいしかったよ。

---大根・カブ掘り---
土の上に顔を出している大根、カブ!
“これはきっと大きいぞ”…“こっちの方が大きいぞ”と、期待をもってぬく。
「なかなかぬけないぞ」
“大きなカブのお話を思い出して、何人もつらなって、ぬこうとする、こっけいな姿。
両手いっぱい大根を収穫した、大根にうれながら、大・大・大満足!

やきいもパーティー
いもを洗って新聞紙にくるんで、アルミホイルにつつま、火の中に。けむりも暑くてもがまんがまん。
竹串をさして焼け具合をみる。
よし!おいしいにおいと共に
チョッピリこげつけた焼いも
ができあがり!



さつまいも掘り
いものつるをたどって、要領よく掘るが、イモが小さいのを見て「葉っぱ、大きかったのにおイモ小さいわ」とがっかり。小さいイモを見て「かわいいおイモ」とうれしそう。近所の人から「大きいおイモがとれるんですね」「私のうちでは小さいのばかりで…今度うえ方、教えてください」と言われ、得意顔の子どもたち。

いもじくでなわとび
みつあみとはちがう、3本どりあみに挑戦!
集中してとりくんでいます。(5歳児)

えんちょうせんせいは、じょうずにしていたけど…むずかしいなあーようちやん、しっかりもっててや〜。

さといものはっぱあそび
大きな葉っぱの上に、雨の水玉がついているのを見て、ころがしてみる。くっついたり、はなれたりするのを見て「ワーゲームみたい」「雨粒、合体したよ」と大よろこび。

ねぎ・肉 だいこんの葉
さつまいも にはんにん ぼうすあげ
具のいっぱい入ったちゃんこなべ、フタをあけると、「ワー〜やきいもおどってる」「地獄みたい、ブクブクしてる」大さざぎ。おいしにおいにさそわれて、近所の人「お鍋の中に何が入っているの?」「いいにおいがするね」「三角巾とエプロンしてかわいらしいね」と、園庭をのぞきこむ。何杯もおかわりして、お腹はいっぱい。

重石はさんぽにひいてひろってくる。
ぬかは近くの、お米やさんへ買いに行く。

- (たくあん漬け)
- 大根 138本=21kg
 - 塩 1.5kg
 - ぬか 15kg
 - 石 10個くらい

---(たくあんの試食会)---
「うす味でおいしいですね」
「家で経験できないことを、保育園でさせてもらい、本当に素晴らしいことです」と親からの反応。

10

共同研究



陶器の食器を使用させることによってすべての物を大切にし、物に対する感謝の気持ちを育てる

福井県福井市社中央保育園

〔代表 山田健一〕

I 主題設定の理由

幼児期は人間形成の基盤であり、心身共に著しい発達を遂げる重要な時期である。特に生活環境や、育て方によってその後の人生に大きな影響をなげかけるといわれている。

私達は主題設定に先だち、当保育園創設昭和41年当初時にさかのぼり、園舎の建設にどのような気配りをしたか、主題設定との共通点を考えてみた。

北陸地方の人間が都会に就職すると、“何となく暗いイメージがする”と言われ、当時こんな言葉もありました。“北陸の人間は暗い所から牛を引きずりだしたようだ”と、それは、北陸地方の気候風土が、人間をそうさせたのではないだろうか！

そこで、新園舎建設にあたっては、暗いイメージをなくすよう建設に取り組んだ。私達は、気候風土は変えることはできないが、建物の環境をよくすることによって、乳幼児期の人間形成の基礎を少しでも変えることができるのではないかと、北陸地方の湿っぽい薄暗い空とは対照的に、子ども達が伸び伸びと育つよう明るい環境の園舎（各室の天井は高く、遊戯室、保育室は腰板のない総ガラス張り）を心がけ、総ガラス張りの明るい子どもの城ができた。

園舎をながめて気づいたのは、ガラスが多いので子ども達に対し危険性が伴うのではないだろうか？ そこでガラス戸の内側に柵をつくっては、また割れないガラスと取り替えては、とあらゆる面から考えてみましたが、ガラス戸の内側に柵をつくっては檻の中の保育、これはもっとも好ましくない。では割れないガラスにしたならこれは値段も高いこともあるが、保育園のガラスは割れない、家のガラスは割れるとあっては、乳幼児の一番大切な時期これまた好ましくない。

明るい園舎はでき上がったが、以上の難問題をかかえた。そこで私達は、ガラスは割れるものである。割れば危険であるということをは話し合いながら、気づかせることにした。そして誤ってガラスを割った場合は、その都度その場で子ども達にガラスが割れば危険が伴うことを話してきた。そのうちガラスの割れるのもだんだん少なくなってきた。子ども同士が話し合っ

て自主的にルールを守りながら遊ぶようになってきた。

さて、子ども達を明るく伸び伸びと育てようと建設した園舎だが、一時は子ども達にとって危険をおよぼすような結果になろうとしたが、保母達が子どもに対し、たゆまぬ指導を続けた努力が実って、子ども達は遊びの中で自主性をもって、ルールを守り子ども自らが秩序を正し、明るく健康に育ってくれるという大きな副産物が生まれた。

主題設定の理由をながながと記述したが、人間は、気候風土にさえ左右されるのであれば、もちろん子ども達の日常生活の中、建物の環境に左右されないはずがない。こんなことを考え、今回日常生活の中心となる食事、その中で陶器の食器を取り上げた。そしてテーマを「陶器の食器を使用することによってすべての物を大切に、物に対する感謝の気持ちを育てる」ことに決め、共同研究とした。従って長い間の経験が、もろもろの考え、価値感等共合し相まって、いろいろな発想研究が生まれてくるのだと思う。

Ⅱ 研究のねらい

戦後いろいろな化学製品の食器がはじめた頃、プラスチック食器がどんどん増加し、小中学校、保育園、幼稚園、また会社、工場、その他大衆の食事を行う食堂の食器は割れることの少ないプラスチックの食器が使用された。それはまずプラスチック食器は割れること壊れることが少ないという魅力があったからだろう。

そこで考えなければならないことは、乳幼児期は人間形成の発達を遂げる重要な時期である。この時期に子どもが割れない壊れないものの環境の中で育てられたとしたら……子ども達の望ましい育ちが阻害されないだろうか。なお新生児の動かないような体に活力を与える肉体化を通して人間は精神と肉体を完成させていくのではなかろうか。つまり自己の精神を発展させるうえで物を大切に扱うということは重要なことであるといえよう。

乳幼児期、物の割れない壊れない環境にあって、日常生活の中で概念として身体にうえつけられないようにしなければならない。その反面陶器の食器等を子どもに手で触らせる。すなわち肌で感触させることによって、豊かな心身が磨かれていくのではなかろうか。以上のことなどを基本的な研究のねらいとして、園だより、クラスだよりを通して家庭と互いに連絡しあいながら乳幼児期の人間形成の基盤をつくらうというのが本研究のねらいである。

Ⅲ 研究の内容

1. 乳幼児期の基本的生活習慣

人間の成長発達の過程からみると、乳幼児期はその最初の時代で、それはその後の変化に大きく影響する最も大切な時期と考えることができる。

さて保育園、幼稚園、家庭における基本的生活習慣を身につけさせるのは、いろいろあるけれども、一つの行動が一つで終わることなくいろいろな形、行動としてしつけられていくことはいうまでもない。一つの基本的生活習慣を身につけさせようとする、その過程において、多目的にしつけられ習慣づけられることは間違いないが、その反面保育者がしっかりしていないと、しらすらすのうちに好ましくない生活習慣が身につくのは当然である。特に乳幼児期は、人生最初の時代であるだけに、また、基本的生活習慣の形成時期だけに保育者は身をもって目的にむかって保育にあたらねばならない。

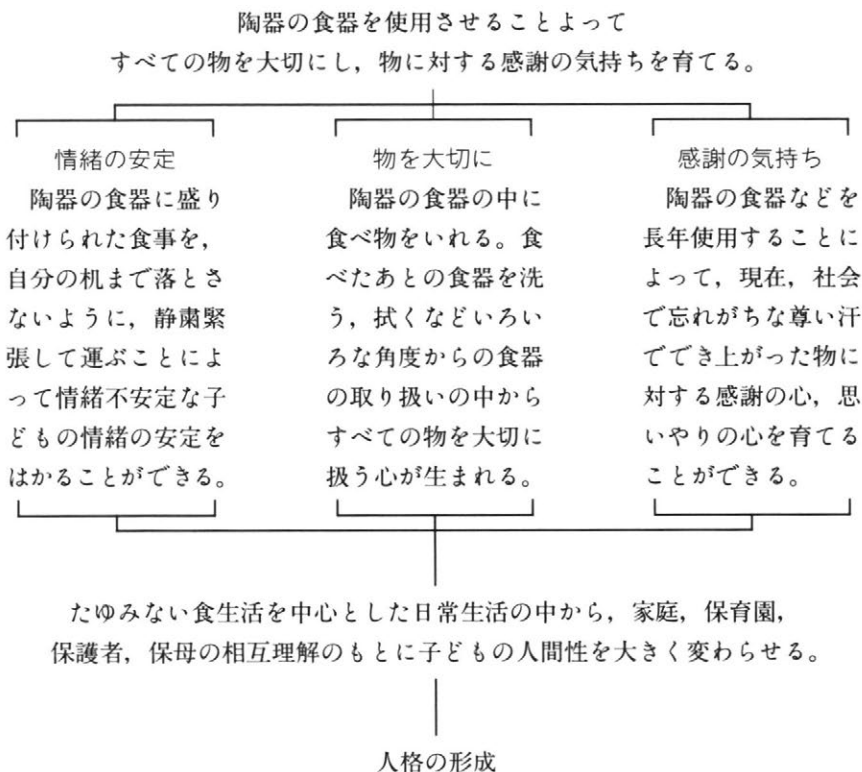
したがって当保育園では子ども達に「陶器食器を使用させることによって物を大切に扱い、また感謝の気持ちを育てる」という目的をもって基本的生活習慣の中に織りこんでいこうというのがねらいである。陶器の食器を扱う指導も大切であるが、陶器の食器はいろいろな面で毎日毎日指導しなくても、自らが食器を使用し、取り扱い中、食器を落として割ったとしても、今のはどうして割れたのだろうか？ と考え、次には割らないようにするにはどうしたらよいかということを考えさせてくれるものだと思う。その中から、物は割れるとなくなってしまう。だから物は大切にしなければということがわかる。すなわち子ども自ら体験することによってはじめて物を、また形ある物は、壊したり、割ってなくしてはいけないことや大切にしなければいけないことに気づくのだと思う。それはただ大切にしようと思うのは陶器の食器のみでなく、いろいろな物を大切にしなければという芽がではじめるのである。子ども達(大人も同じ)は、この芽生えを大切にしているうちに、世の中のいろいろな物はすべて多くの人達の手ででき上がっているものと、物に対する感謝の気持ちもうえつけられ、物を大切に扱うことになるだろう。ここで、陶器の食器を扱うようになってからの子どもの姿をみると、プラスチックの食器を使用していた頃とは子ども達の食事の前後の姿が変わってきたように思う。陶器になってからは食器をしっかりと両手で持って取り扱うようになったこと、また情緒の不安定な子どもも安定してきていることが目にみえてきたようだ。

もちろん子ども達の日常生活は、保育園よりは家庭での生活の時間が長いので、保育園で陶器の食器を使用させることはもちろんだが、家庭と協力しながら家族ぐるみで陶器の食器を使用していかなければ、使用効果が半減されることはいうまでもない。

モンテッソーリは、子ども達に精神と情緒の安定をはかるために、線上歩行を行なわせるが

特に情緒不安定な子どもには効果的である。このようにして毎食事とき、子ども達がきちんとしながら食事を食卓に運ぶということは、モンテッソーリの線上歩行にもまさるものだと思う。

2. 陶器の食器を使用させることによる目的系統図



IV 指導の方法

1. 陶器の食器とはどんな食器かを指導

陶器の食器を使用させるに先だち、陶器の食器とはどんな食器であるかを充分話し合ってから取り入れなければと、陶器、プラスチック、ステンレス、ガラス、アルマイトの食器等を、子どもに見せ、今まで使用していたプラスチックの食器は落としても割れないことを話すとともに、金の棒などで食器をたたいてみせ、少しの衝撃では割れないことに気づかせる。次に陶器の食器を見せ、これは陶器といって粘土をこねて火で焼いてつくったもので、プラスチック、ステンレス食器といった割れない壊れない食器とは違って乱暴に取り扱えば破損することを知らせ、取り扱いは充分注意をするよう話をする。

2. 陶器の食器の肌ざわり指導

子ども一人一人に、プラスチック、ステンレス食器等を手に触らせてみる。子ども達は、各

自、思い思いの感覚で、いろいろな面から、いろいろな角度から感じとる。特に、陶器の食器には充分触らせることが大切であると思う。なぜなら今後使用する食器だから充分肌で感じとらせることが必要であり、今までの食器との肌ざわりの違い、手で触れることによって触覚、またいろいろな食器の色、艶、形などを識別する視覚の両面から感じとらせることが食器指導の大切なところである。

3. 陶器食器をどのようにして運ぶか

プラスチックの食器の場合は、給食室から保育室に運ぶ時は、少し乱暴な扱いをして運んでも破損するようになかったが、今度は陶器の食器だけに、注意をして運び落とさないように、落とせば割れるということを重ね重ね注意しながら運搬方法を指導する。

4. 年齢別の配膳方法（食器はすべて陶器を使用）

(1) 3歳未満児

3歳未満児は、まだ年齢が低いので給食室から食器に盛りつけ、保育室まで運び、保育室が子どもの前に配る。お茶だけは陶器の湯のみに入れて配膳台に置き、子ども達が湯のみを両手でしっかり持って、自分の場所に運び静かに椅子に座る。もちろんお茶は熱いものは使用しない。

(2) 3歳児

3歳児もまだおぼつかないので、前半の8月頃までは未満児と同じである。9月に入ってから、食器に盛りつけられたものを、保育室が給食室から保育室まで運び配膳台に置く。子ども達は、お盆におかず、お茶をのせ、自分の場所に運び、お盆を次の人に渡し（「はいどうぞ」「ありがとう」と言葉をかけあう）、椅子に座り、全員がすむまで静かに待っている。全員運び終わったら、挨拶をして、食事を始める。

(3) 4歳児

4歳児は、給食室で盛りつけ、配膳ケースに入れられたものを、当番が二人で保育室まで運び配膳台に置く。この点が3歳児とは違っている。子ども達は各自お盆におかず、お茶をのせ、お盆を両手で水平に持ち、自分の場所に運ぶ。そしてだんだん高度な経験を積み重ねていくようにする。

(4) 5歳児

5歳児は給食室にある陶器の食器を当番が保育室の配膳台まで運ぶ。また年少、年中と給食のいろんな点を経験してきただけに、給食室から運ばれるおかずは、すべて食缶にいれられたものを、当番が保育室の配膳台まで運ぶ。給食はバイキング方式で行わせ、お盆を持った子ども達は、配膳台で、陶器の食器を静かにのせ、それぞれ自分の食べたい分だけ自分で盛りつける。もちろん湯のみの中には、ポットからお茶を注ぎいれ、お盆を両手で胸の高さ

で水平にして、静かに自分の席まで運び、お盆を次の子に渡し、席に座り全員が終わるまで静かに待つ。これなどは、忍耐力、抑制心の芽ばえの姿として保育としては大切なものである。

いろいろな指導方法を踏まえて実践指導にあたったが、その間における子どもの行動の発見が数多くみられた。これらを考え思う時、いろいろな教育法をあらゆる角度から見る時、共通点が多いように思われた。



▲ 3 歳未満児



▲ 3 歳児



▲ 4 歳児



▲ 4 歳児



▲ 5 歳児



▲ 5 歳児

V 実践事例

1. 陶器の食器運搬実践

まず陶器の食器とはどんな食器か、またどんな方法で扱うかを指導方法の中で書いたように指導してみたが、いざ実践となると、戸惑う点がいくつかでてきた。陶器の食器を運ぶのにワゴン車を使用する方が安心と思い運ばせてみたが、私達の考えとは逆に、のせてしまえば安心と思うのか、ワゴン車を乱雑に扱い、破損の数が多くなってきたので、ワゴン車で食器を運ぶことを中止することにし、当番二人が陶器の食器を入れたかごを一人は後ろ向きになり、一人は前向きになって協力しながら静かに運ぶ。この運搬法は情緒不安定な子どもには効果的であると共に忍耐力、抑制心や意志力にも発展していくのであると思う。かごの中に入れられた陶器の食器は歩く度にガチャガチャと音がするので子ども達は食器が割れないように全身の緊張感をたかぶらせる。その度に子ども達の足は止まり、横歩き、後ろ歩きと緊張して歩く姿にも、破損させまいとする心、またかごを持つ手も手先だけで持つのではなく、だきかかえるようにして持ち運んでいる姿は物を大切に扱わねばという真剣な姿である。そして子ども同士が力を合わせて運ぶことによって子どもと子どもの信頼関係が生まれてくるようだ。

2. 保育室での食器扱いの実践

給食室から保育室までの運びができるようになって、今度は保育室での食器の扱いである。いざはじめてみると、前日までプラスチックのお皿や湯のみに慣れていた子ども達は、以前と同じように陶器の食器を扱いはじめた。湯のみをいくつも積み重ねたり、お皿をガターンと威勢よく机の上に置いたり等、言葉でいくら話し、約束しても駄目で、子ども達は今までの食器は割れなかったという安心感から、陶器食器への注意力がなくなっているようだ。それは、プラスチックの食器は割れないものだと言った長年の間に印象づけられた悪い癖ではなかろうか。私達は苦勞した。やはり陶器の食器を取り入れた当初、積み重ねた湯のみが崩れ、床に落ちてみごと割れてしまった。そのうえ、その子どもは、落ちたかけらを集めている時、指をちょっと切ってしまった。他の子ども達は、指からにじみ出る血をみながら、びっくりし保育室はシーンとなってしまった。こことばかり保育母がその指を手当しながら、もう一度子ども達と陶器の食器の扱い方について話し合った。子ども達は今度こそは丁寧に食器を取り扱わねば、割れたり、割れた食器を下手にさわれば手が切れて血が出るんだということがわかったようだった。それからは食器を落としたりすると、(割れてないが)保育室はシーンと水をうったように静まりかえり、どの子も食器が割れなかったらどうかと心配そうな顔で、落ちた食器に注目する(プラスチックの食器が落ちた時は、まったく注目しなかったのに)。このことを子ども達がどのように受けとめてくれるのかと思うと同時に、子ども達にプラスチック食器と陶器食器のかかわり

の反応があったことは間違いないようだ。

子ども達がお盆の上に陶器の食器をのせ（茶碗、湯のみ、お皿等）自分の机の上まで運ぶ。その時食器が落ちないようにと思うのはもちろんであるが、食器の中に入っているお汁がこぼれないだろうか、湯のみの中のお茶がこぼれないだろうか先だち、緊張しながら自分の机の上まで運び終わった子どもが、“運んだ”というより“ヤッター！”という緊張感からほぐれたよろこびの顔になる、この瞬間が子どもにとっては一番大切なのではないか。自分の机の上に置く子ども達は、自ら一生懸命にここまで運んだこの食事は私の食事だ、子ども達にとって食事を安全に運び終わった喜びと満足感で一杯だ。この子どもの姿をみていると子どもにとっては、大人が一つの物を作りあげ、また成し遂げた満足感と同じであろうと思う。

子ども達が自分の食膳の前に静かに座って友達の給食の運び終わるのを待っている。これは、私共にも驚きだった。

ある日、陶器の食器を落として割った一人の子どもが、割れた食器にむかって“ごめんね”と言っているのを聞いて、保育母は、食器を落とし割った子どもに対し、叱るところか涙ぐんでしまったと話してくれた。私達はその時はたと思った。もし私達が小鳥を飼っており、小鳥が死んだ時、死んだ小鳥にむかって、“小鳥さんごめんね”と言わない者はいないだろう。子どもがどんな気持ちで割れた食器にむかって言ったのかは解からないが、少なくとも子どもにしてみれば、形ある物が壊れて無くなってしまった時悲しみを感じとったのではなかろうか。また私共なりに考えてみるなら、この子どもの姿こそ、物を大切に扱わなければいけない、また物に対する感謝の芽生えがうまれてきたのではないかと喜ばずにはいられなかった。

小さいことだが、ある日子ども達の中でいざこざがおきた。よく見ていると、子ども達が湯のみを奪い合っているのである。一つは無地の湯のみ、もう一つは梅の花模様が浮きぼりになっているものである。この時やはり子ども達でもカラフルなプラスチックの食器に慣れているため、陶器の食器といえども無地の物より変わった色、形の食器を好むのであろう。またそれが当然であろうと思った。今後の課題にも書いたように、時代とともに、食器の形の移り変わり、食器の流行も無にすることはできない。それは、子ども達の好きな食器の使用によって、食欲のない子の食欲が進んだとしたら……。このことを踏まえても食器を見直す時期がきたのではなかろうか。時と場所を選ばず、楽しい食器で楽しい食事は、当然であろう。

総括してみると、お盆の上にのせられた陶器の食器、その中には、おかず、お茶が入っている。それを運ぶ時、精神を統一しながら自分の机まで運び、運び終わった子どもには、やがて満足感と喜びがわいてくる。子どもにとっては、もってこいの精神統一訓練である。それがただ一時的なものでなく、保育園で毎食毎に行う乳幼児期の訓練は、大きな結果を生むものだと思う。

最近、年少、年中、年長を通して食器の取り扱いが緊張感もほぐれ上手になってきた。それは、保母達のたゆまぬ指導と努力、子ども達の繰り返しの行動の成果である。そして毎日毎日の経験の積み重ねによって、その中から物を大切に扱い、感謝の気持ち、抑制心、忍耐力が養われてゆくのであると思う。

3. 保育園からの家庭連絡

(1) 園だよりによる保護者への啓蒙

保護者殿

社中央保育園

家庭でも陶器の食器を使用させてください!!

保護者の皆様、常日頃保育園のためにお力添えを賜わり、厚くお礼申し上げます。

さて、先月の保護者会総会の席上で、当保育園が子ども達に“陶器を使用させることによって、物を大切に扱い、感謝の気持ちを育てる”ということを話し、ご家庭でも、プラスチックの食器をお使いになっているようでしたら、陶器の食器と取り替えていただくようお願いしましたが、いかがでしょうか。

プラスチック食器というものは、まず割れない、破損しないという魅力があり、また美しい絵があつたりして子ども達が喜ぶ、それだけになかなか捨てがたいと思います。またお母さん方に見せても、少し手荒に取り扱っても割れない食器からのお別れは寂しいことだと思えます。でも思いきってください。可愛い子ども達の成長のためです。陶器の食器ですとお金も多少かかります。また一度や二度割れることもあるでしょうが、子ども達の心の中に物を大切に扱うという心、物に対する感謝の心が少しでも芽生え、育ってくれるなら、こんな嬉しいことはないと思います。

どうか、家族ぐるみで話し合ってください、もしプラスチック、メラミン等の食器をお使いになっておられるなら、保育園の方針をご理解いただき、早い時期に、陶器の食器に取り替えいただきますよう、ご協力お願い申し上げます。

Ⅶ 今後の研究課題

子ども達に陶器の食器を使用させる上での今後の目的と課題については、ただ陶器の食器を使用させることによって物を大切に、そして感謝の気持ちをうえつけるとしているが、今後も

っと他の角度から考えなおさねばと思う。

それは時代と共に、食器の色、形の変化というものは、人間の暮らしの中で衣類の移り変わりと同じであると思う。衣類の流行は、色模様、形が変わり、人々は好んで変わった衣類を求め、人間社会の人々は生活を豊かにしていることはいうまでもない。食器もそれと同じではなからうか。食器はややもすると、現代社会から取り残されがちになろうとしている。人生を豊かにする枠内から外れがちではなからうか。それらの点を今後大いに考え直す必要がある。食器というものをいろいろな面から、またいろいろな角度から見直してゆかねばならない。これは大人社会だけが楽しむものではない。子ども達の目に流行の食器がどう見えるかを考えねばならない。この点を大人は子どもの身になって、見直していかなければならないと思う。保育園においても時に食器の入れ替えをしてやりたいと思っている。

最近の子どもの教育は、生まれてからでなく母体に子どもが宿った時から母親はいろいろと気をつけて体内の子どもを中心とした行動でなければいけないように、目新しい食器を子どもに与えても子ども達は何も解からない、何の反応もないと思ったらこれは大間違いだと思う。子ども達は長い月日、時代の流れの食器類とかかわっていたとしたら、しらずしらずのうちに人格の形成が織り込まれていくのではなからうか。

福井県の宮崎村に陶芸村ができた。そこでは誰でもが粘土で物をつくって焼き物ができあがるようになっている。そこで子ども達にも粘土でお皿などをつくらせて、自分でつくった皿で、おやつを食べるとしたら子ども達はどんなに喜ぶだろう。また自分でつくることによって、他の人がつくった食器、いろいろな物に対する感謝の気持ちがわいてくるのではなからうか。そして自分がつくったということで、一段と大切に扱ってくれることと思う。

もちろん家庭との連絡を密にして、以上のようなことを充分話し合う。子ども達は家庭にいる時間が長いから、家庭での食器の与え方の大切さはいうまでもないが、ともかく目的に向かって実行していただけるなら、素晴らしい子ども達の未来が開けてくるのではないかと思う。

子ども達の保育、教育というものは一朝にして成されるものではない。こつこつとした小さな積み重ねが長い月日の間に人格として形成されてゆくものではないかと思わずにいられない。

11

共同研究



自ら環境に働きかけ、主体的に活動する幼児を育てる幼稚園と家庭との連携
——育友会活動を通して——

兵庫県尼崎市立花愛の園幼稚園
〔代表 浜名弘子〕

I 主題設定の理由

幼児にとって、彼らをとりにく環境とは、活動を大きく左右する重要な要因である。

本園は創立当初(昭和30年)、田んぼや小川に囲まれ、自然に恵まれた園であった。しかし近年の著しい社会変化と都市化現象にともなうあそび場の減少、交通量の増加等で、自然環境は急速な勢いで変化しつつある。また、商業主義に支えられたマスコミの氾濫、母性意識の変容などによって、お金を出しさえすれば何でも買えるといった風潮がはびこり、ともすると親の愛情が物品とすり替えられる錯覚もみられる。子どもたちは自然とのあそびが奪われるばかりか、多様化した生活環境によって室内の活動へと追いやられ、機械的なシステムの上に乗せられ、自分の意志でものを考えたり、行動に移すといった経験の機会が少なくなっている。幼児のあそびにおいてもそれは例外ではなく、既製の物にあふれた環境の中で、あそぶものを探す必要がなくなり、あそびの持続性・発展性が乏しいこと、すなわち、物を与えられるとしばらくはあそぶが、すぐ飽きて次の物を欲するといった傾向がある。加えて、社会や親の風潮を敏感に察知し、こわれても新しく買い直せばよしとし、人や物に対する感謝の心も希薄になっている。

しかしながら、どう努力したところでもとの状態に自然を取り戻すことは不可能である。環境を整えることも無論大切なことであるが、それ以上に子どもたちと、親たちと、この現状の中で環境にどう働きかけていくか、その姿勢を見つめ直すことこそ重要な課題であると考えます。

そこで本園では、幼児たちが創り出す喜びや熱中する楽しさを味わい、思いやりの心をもって自己表現していくことを根底におき、育友会活動を通して親や教師のあるべき姿を問い直し、実践していくために本主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

我々は、保育とは地域とのかかわりの中で、子どもと親と教師の三者で創りあげていく営みであると考えている。その中でも園と家庭とは車の両輪のようなもので、一方だけがいかに充実していても子どもの発達を期待することは困難である。

子どもの発達を支える活動は、前述したように、単に物を与えるだけ、物的環境を整えるだけでは持続・発展せず、自らのものと成り得ない。どのように考え、工夫し、どう働きかけていけばよいかという契機が与えられなければ、活動は発展しないと考える。そこで、その契機として、親や教師が自ら創造する喜び、楽しむ姿を育友会活動を通して子どもたちに伝え、動植物の飼育・栽培や手づくりのあたたかさの中で、自ら環境に働きかけ、主体的に活動する幼児をめざして、以下の2点をねらいとして研究に取り組んだ。

- ①動植物の飼育・栽培を通して思いやりの心を育て、収穫する喜びや自然に対する関心を高める。
- ②身近な素材を利用し、考え工夫して創り出す喜びを味わい、生き生きとした活動へと発展する。

Ⅲ 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

母親学級・花の会・交通安全部の3つの育友会活動を中心とし(付表参照)、親同士のふれあいを深め、園・家庭・地域のつながりを広げていく中での、親と子の変容を追うことを主な内容とした。

(2) 研究の方法

- ①幼児の実態と変容を探り、指導法の改善を図るため、各クラス1～2名の幼児を抽出し、(抽出児数；年長児15名、年中児7名、年少児3名、計25名)1年間にわたり定期的に組織的観察法を中心として記録をとり、問題点・課題等について分科会(学年部会)・全体会で報告・討議を行う。なお、抽出児以外の幼児も必要に応じて記録にとっておく。
- ②家庭と園との連携、親同士のつながりを深めるため、育友会各部会で定例会を開いたり、懇談会、講演会、園だより、連絡帳、担任から月に1回の一言(各幼児のその月の園での様子や励ましを各家庭宛に手紙で知らせる)により、親との交流・啓蒙活動を行う。
- ③家庭の実態と変容を探るため、園児家庭状況調査票、親の意識・子どもの状況等の調査を実施する。

Ⅳ 実践例

(1) 母親学級

①母親学級の目的

幼稚園児を持つ母親が、園児と一緒に学び、考え、理解し、お互いのふれあいを大切に、共に成長していく場として母親学級が開設された。主な活動内容は、講演会・講習会・手芸・見学・スポーツ・料理・その他である。

②母親学級活動に取り組む母親たちの姿および教職員の取り組み

a. 手づくりのおもちゃ —— 母から子へ ——

さまざまな母親学級活動の中で、なぜ手づくりのおもちゃを子どもたちに……と考えたかは、次の理由による。1)既製品・使い捨ての物が多い中、手づくりのあたたかさを伝え、物を大切にすることを育てたい。2)親や教師が考え工夫し、創ることの中に楽しさや喜びを見いだしている姿から、それらを学びとって欲しいという願いからである。

これまでの母から子へ贈られた手づくりのおもちゃ
お手玉・クリスマスの飾りやリース・サンタさんの服・人形の布団・人間が入るぬいぐるみ・ピエロ人形・タオルがけ・暗幕・着せ替え人形(下図)など…



※この人形によって、ボタン、ファスナー、ひも、スナップ等の使い方があそびの中でわかる。

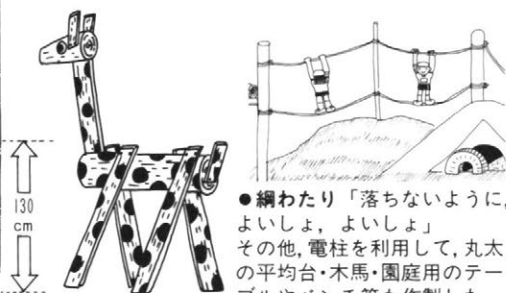
b. 素材を使った固定遊具 —— 地域からの素材寄付 ——

園周辺の地域からも、園児たちに……とさまざまな素材が寄せられている。電柱・鉄線を巻くリール・ドラム缶・ヒューム管等を教職員が工夫して、再利用し、子どもたちが楽しんであそべるような固定遊具を創り出した。園児たちは、毎日の生活の中で、これらの遊具を使って生き生きとあそんでいる。遊具をどのように使うか子どもたち自身で考え、時には教師と相談し、ルールをつくりながらあそびを発展させている。

電柱を利用して——電柱はNTTからの寄付



●アスレチック (一部…ドラム缶・タイヤ・電柱を使ったアスレチックもある)「ぼくらは探険隊! 下は谷だぞ、そーっと、そーっと…」



●キリン (キリンの背に乗るのに一生懸命チャレンジしている)

●リールを利用して

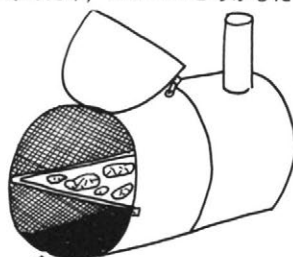


そのままテーブルにしてあそんだり、コロコロころがしたり…

●ドラム缶を利用して

ぬれ新聞紙で芋をくるみ、アルミホイルで包む

その他、ドラム缶を連結させたトンネル型のアスレチックも作製した



ここに薪を入れる ●焼き芋焼き器

カゴ型の他にロープ型もあり、つけ替え自由 →



●乳母車（人形を乗せて運んだり、お買物ごっこや郵便屋さんごっこに発展したり）



リール(小)

●鉄線を利用して

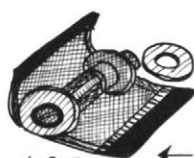


●ロープウェイ「うわー、速い、速い」

③母親学級活動から子どもたちが学びとったもの

a. 素材を使ってあそぶ

本園では常時、子どもたちが自由に使える素材としていろいろなものを分類して置いている。教師自ら持ち込んだ物や、家庭や地域からの協力で寄せられた、空き箱・プラスチックケース・包装紙・紙芯(布を巻いてあった長い巻き芯もある)・毛糸・布・空き缶・木片・蒲鋒板・タイル・フィルムケース等がある。子どもたちは、これらの素材からイメージして作り始めたり、何かのあそびに必要なあってイメージに合う素材を探して作り始めたりする。また作品作りにもこれらの素材が生かされることが多い。ほんの一例であるが、プラスチックケースを組み合わせて船を作りプールに浮かべたり、フィルムの入っていた金属の部分の部分を平らに延ばして1枚1枚



〈分解図〉

← フィルムのこの部分はずして平らにする

に絵を描きジグソーパズルを作ったり、板に釘を上手に打ってパチンコ台を作ったり、教師の想像以上の創意を見せ驚かせてくれる。



「かまぼこ板で迷路をつくったよ」(年少児)



パチンコ台作り(年長児)

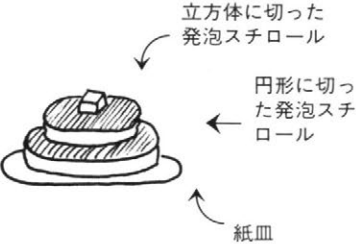
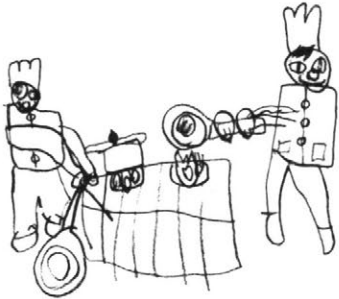
b. 愛の園まつりからお店屋さんごっこへ

毎年11月に第1日曜日に、育友会の母親を中心に教師と一緒に愛の園まつりを行っている。「愛の園まつり」と銘打っては年数が浅いが、これを機会に在園生と共に卒園生誰でも園に気楽に集まれる楽しい雰囲気をもった会にできることを願っている。年によって多少の違いはあるが模擬店や紙芝居、人形劇など催している。それによって得た収益を子どもたちのためにいろいろな形で還元している。

愛の園まつりに参加したことで、品物を売り買いする楽しさに気づき、ままごとやごっこあそびの中にも「お店屋さんごっこ」が登場し、クラス全体から園全体のあそびとして発展していった。店の種類もおもちゃ屋・服屋・おかし屋・ケーキ屋・レストランなど多様であり、愛の園まつりでも催されていた人形劇場もある。子どもたちは、その活動の中で素材を利用し、考え、工夫して品物を作ったり、お店屋さんごっこに必要な物——お金、財布等——も作り、作った物を使って、楽しんで売り買いしている。また、異年齢児ともかかわり、年長児は年中児に対して、教えたり、優しく接したりしながら思いやりの心をもてるようになった。その実践例を以下紹介する。

〈昭和62年11月7日～11月20日 年長児〉

幼 児 の 活 動	教師のかかわり	備 考
レストランを見学しに行く。(園の近くにあるレストランに行き、メニューなども調べる)		
↓		
レストランにはどんな物が売っているか、どんな物を売りたいか話し合う。(お子様ランチ、ホットケーキ、ステーキ、ハンバーグ等が出る)		
↓		

品物作りをする。(グループごとに品物を決め、品物作りをする。発泡スチロール、段ボール、パック等の素材を使って作る)		
<p>あるグループでホットケーキ作りをしている。</p> <p>C₁: 僕、色ぬる。</p> <p>C₂: 私、切るわ。</p> <p>C₃: 私、バター作る。これ(発泡スチロール)切って色ぬったら、バターに見える。</p> <p>C₄がどうしようか悩んでいる。</p> <p>C₂: C₄ちゃん、一緒に…。</p> <p>C₄: うん。</p> <p>それぞれが役割分担して、切ること、色ぬり、バター作りと流れ作業で作っている。</p>	<p>T: C₄ちゃん、どうする? 一緒にさせてもらったら?</p>	<p>発泡スチロールの板を切って、ホットケーキを作っている。切ったものに絵の具で色をぬっている。立方体に切った発泡スチロールに着色し、バターを作っている。</p> 
レストランごっこで必要な物を考え、作る。(エプロン、コックの帽子、コンロ、流し台、さいふ、お金レジスター等を作る)		
<p>C₅: そうや、フライパンがいる。</p> <p>C₆: 焼く物があるで。</p> <p>C₇: コンロって言うんや。</p> <p>C₈: エプロンもしてるよ。</p> <p>C₅: 洗うから、水道もいるわ。</p> <p>C₉: 流しやね。洗剤で洗うねんで。私とこママレモンやで。</p> <p>C₈: コックさんで、帽子もかぶってんねんで。</p> <p>C₇: 長い帽子や。</p> <p>C: ……</p> <p>C: 先生紙袋がいいよ。白の紙袋でな。作ってかぶるんや。</p>	<p>T: レストランで、どんなものがあるかな? オムライスとか作らないといけないもんね。</p> <p>T: 食べた後、どうするの。お皿とか。</p> <p>T: よく知ってるね。</p> <p>T: どんな帽子かな?</p> <p>T: ほんとな。何で作ろうか。</p>	 <p>以降、話は進み、金券売場を作ったり、おみやげ屋さんを作ったりした方がいいという発言が出て、金券を作ったり、おみやげ屋で売る物(あめ、ビスケット)を作ったりしていく。</p>
レストラン開店する。(金券係、おみやげ屋、コック、洗い場係、ウェイター、ウエイトレス等の係りに分かれて活動する)		
参観日には、母親にも参加してもらい、後日、年中・年少組にも食べに来てもらって、レストランごっこも発展していった。		

④考察

母親学級活動を通して、既製のおもちゃにはない手づくりならではのあたたかさを、母親たち自身も再確認することができたようだ。その中で、母親たち同士の交流も深まり、ますます母親学級活動が盛んになってきた。子どもたちも、母親たちの「子どもたちのために」という



気持ちを感じ、その後ろ姿を見ることで、手づくりの裏にある愛情や創意工夫を学んだようだ。お店屋さんごっこの実践例からも見られるように、品物を作るにしても自らすすんで素材を選び、その素材を生かし、考え、工夫し、創り出す喜びを味わっている。それだけではなく、品物を作っている過程で必要と思われる新たな素材に気づき、家から探し出

して持ってくる子も見られた。それらがお店屋さんごっこの活動をより一層生き生きとしたものに展開していつている。さらに、素材を使って活動することによって、資源の再利用で物の大切さがわかり、無駄使いをしない気持ちが育ってきている。

(2) 花の会

①花の会の目的

身近な自然とのふれあいの中から、動植物をいたわる優しい心の園児たちが育つことを願って花の会が設けられた。主な活動内容は、種まきその他の講習会・見学・花壇コンクールへの参加などである。

②花の会活動に取り組む母親たちの姿

本園には、園庭や園舎の周囲に四季を通じてさまざまな花が植えられている。これは花の会に所属している母親たちが季節に応じて育てているものである。(買って来た苗からではなく、土づくりをして種をまくところからはじめる)。また、花の水やりも当番制で行われている。花の会活動の多くは保育時間中に行われているので、子どもたちはこうした母親たちの姿を常に目にしているわけである。長期休暇中も当番制で行われており、母親について園にやってくる子供の手伝いをする子どもの姿も見られる。



③花の会活動から子どもたちが学びとったもの

花の会活動は、環境づくりの面で常時園生 子どもたちと一緒にプライダルベールのさし芽をする母親と密着しているといっても過言ではないだろう。したがって、当然のことながら、子どもたちに与える影響は非常に大きい。次にあげる実践例は、花の会活動を目にした子どもたちが生きものへのいたわりの心を持ち、今度は自分たちで自然に触れてみようとする取り組みなのである。

a. 土づくりから芋の収穫まで

6月初め、芋の苗植えを行った。苗を畑に植えるのではなく、持ち寄ったビニールの10kg入りの米袋にひとりひとりがひと苗ずつ植えるのである。まず土をつくる。昨年から保管してあった土と新しい砂とを自分たちの手で土の感触に親しみながら混ぜ合わせる。こうして出来た土を米袋に入れ、水切りのための穴を袋にあける。そして、苗を植えて自分のクラスの置き場所に運ぶのであるが、子ども



うわあ、長いなー。みんなで力を合わせて、よいしょ、こらしよ。

たちにとって10kgの土を袋に入れて運ぶのは非常に大変な作業で、友だちと協力する姿がたくさん見られた。収穫は10月終わりから11月初め。それまでは各クラス当番活動で、水やりや雑草抜き、そして肥料などの世話を豊作を願いながら心をこめて行うのである。

11月初め、いよいよ収穫である。米袋をひっくり返し、芋を苗ごと取り出す。喜びや少し落胆の声と共に、ここまでの作業は非常にスムーズに行われた。次に待っているのは、土を米袋に再び入れ、来年のために保管所へと運ぶ作業である。が、今度は子どもたちも要領がよく、一輪車を引っ張り出し、数人で一緒に押して運んだりしていたので、思ったより円滑に作業が終わった。

収穫した芋は大きさに別に分けられ、大きいものは焼き芋をしてみんなで食べ（焼き芋焼き器は前掲の職員が作製した物）、小さいものは芋版画や芋細工にして楽しんだ。しかし、収穫したものは芋だけではない。子どもたちは芋のつるを使ってネックレスを作って首に掛けたり、電車ごっこをしたり、また長いもので縄跳びをしたりしてあそんでいた。また根っこはままごとあそびに利用したりしていた。これらのあそびは教師が与えたものではなく、すべて子どもたちが見つけ出したものである。子どもたちは芋のすべてを自分の収穫にしたのである。この芋作りは実りの秋の喜びを十分に与えてくれた。

b. ジュース屋さんごっこ（花がらを使った色水あそび）

子どもたちと花がら摘みをする中で、その花がらの色がとてもきれいなので、捨てないでたくさん集めてジュース屋さんごっこなどのあそびへと発展していった。

※花がら……次の花をきれいに咲かせるために摘む咲き終わった花びら

〈昭和62年 5月16日 年中児〉

幼 児 の 活 動	教 師 の か か わ り	備 考
飼育ケースに花がらをつぶして入れている。		最初は花がらを色別にケースに入れてジュースを作っていたが、次

C1: わーきれいなジュースや。 C2: ストロベリージュースみたい。 C3: プリンカップに入れるわな。 はい、どうぞ。 C4: わー、赤い花びらと青い花びらをまぜたらぶどうの色になった。	T: わーきれいなねー、先生にも一杯ちょうだい。 T: ありがとう。わーおいしい。 T: わーおいしそう。グレープジュースやね。	第に色をまぜてジュースを作ることになり、色の変化を楽しんでいた。そして、ジュースやさんごっこに発展し、そのやりとりを喜んでいた。
---	--	--

c. 動物とのかかわり

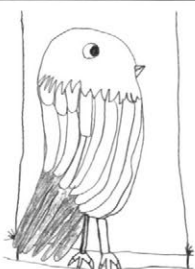
本園では、にわとり・チャボ・うさぎ・モルモット・うずら・おうむ・いんこ・犬・かめ等たくさんの動物を飼っている。子どもたちは、キャベツのくずや人参の皮などを持ってきてはうさぎやにわとり喜んで与え、動物とのふれあいを楽しんでいる。最初は怖がって動物に触れなかった子どもも、次第に慣れ、抱いたり肩や頭に寄せたりしてあそべるよ



チャボくん、このパンおいしい?

うになってきた。また、うさぎの誕生を経験し、赤ちゃんから大きくなるまでの過程に興味を持って観察し、親しむようになった。以下は年長児のおうむの飼育当番活動の記録の一部である。

〈昭和62年11月9日 年長児〉

幼児の活動	教師のかかわり	備考
<p>ピーコ(おうむ)の世話をしている。 C1: ※お皿出さず。そっち持ってくれ。 お皿を出す。 C2: 今日のピーコちゃんのうんちようけやなあ。 C3: 昨日、日曜日やったからやで。えさ箱の中のをぞく。 C4: ピーコなんてえさの中にもうんちするんやろ。なあ。 C5: うん。 C6: わあ、ひまわりの種、からばっかりやー。 C7: ようけ食べたんやなあ。 C8: ほんまや早く分けたげなあかんわ。</p>	 <p>T: ピーコちゃん、うんちする所きちんと決めてしたらいいのねえ。 T: ピーコちゃん、お腹すいてるん、ちがう? みんなの方ばっかり見てるよ。</p>	<p>おうむの世話は、当番活動としてグループ交代で、行っている。活動内容は、清掃、水やり、エサの交換(ひまわりの種は、からと中味の入ったものに分け、からは処分する)がある。 ※お皿→飼育ケースの底に、ふん便やエサの散らかったものを掃除しやすいように毎日新聞を敷いて取り替える作業をする。その底が引き出せるようになっている。 最初は、教師と少人数の子どもとで毎日していたが、次第に子どもたちだけでできるようになり、当番活動として、自主的に行えるようになった。</p>

④考察

花の会活動は、毎日子どもたちのためにより良い環境を——と取り組んでいる。その姿を見

て、子どもたちは花を大切にする気持ちが育ってきた。(花の水やりをする時、「頭からかけたらお花さんかわいそう」と根元に水をかけたり、花や葉をちぎらないことはもとより、花をまたいだりせず、ボールを蹴る時も花壇に入らないように方向に注意したりしている)。最初は作られた花壇を見るだけであったが、次第に子どもたちの方から「はつかだいこんを作りたい」「さつまいもを植えたい」などの声が出始め、自分たちで手がける植物栽培へと変わっていった。また植物だけにとどまらず、動物に対する思いやりの気持ちも育ち、自主的に掃除やエサやり等の当番活動に取り組めるようになった。家にある野菜くず等も進んで持ってきて、動物の食べる様子をうれしそうに観察している。

親と子、教師がひとつになって、自然をできる限り自然な形で持ち込んで、その中で動植物とふれあい、水・土・砂・石などの自然の素材もふんだんに使えるようにし、生活する中で、自然現象や自然の法則と出会い、それを学び、生活を楽しくしていく喜びを知る子どもたちに育ってほしいと考えている。

(3) 交通安全部

①交通安全部の目的

新聞やニュースで毎日のように幼児の交通事故が報じられる現在、1)いかにしてそうした交通事故から子どもを守るか、2)日常生活の中で、子どもたちが自主的に交通ルールを身につけ、安全な行動がとれるようにするか、この2つを目的としてつくられた会である。

②交通安全部活動に取り組む母親たちの姿

交通安全部の母親たちは、園の子どもや父母を対象とした活動だけでなく、尼崎市交通安全父母の会に所属し、市内のパトロールや会合を開き地域住民の啓蒙にもあたっている。ここでは園内の交通安全部の主な活動を紹介する。

a. 門前パトロール

園の正門および道路の角で、交通安全のたすきをかけ、黄色の旗を持ち、徒歩やバスで登園してくる子どもたちの道路を渡る際の安全や朝の挨拶の指導をするものである。4月当初は入園して間もない年中少児がいるため、門まで母親と一緒に登園するようにしている。その時、パトロールの母親が右側通行すること、道路の正しい横断のしかたについて、そのつど声をかけている。年長児になると年中の時に指導を受けているため、大部分の子が正しく歩いている。また交通安全部の母親だけでなく、徒歩通園児の母親全部がパトロールを交代することによって(1学期中、朝



「右、左、右…よく見て渡るのよ」

8時30分～9時の時間帯), 広く母親に交通安全の意識を浸透させるのに役立っている。やがて園に慣れてくると、園の前の道路の端から、母親が見守る中、子どもだけで歩いて登園するようになる。初めは注意を受ける子がいたが、今では交通ルールが身につく、言われなくても自主的に正しく道路を歩いたり、渡ったりできるようになってきている。

b. 歩行テスト

交通安全部では、映画やビデオ等を通して正しい交通ルールの指導に力を入れているが、頭では理解できていてもその場になると飛び出したりしてしまうことがおもうにしているのが子どもである。そこで、路上で実際にどの程度正しく歩けるかを調査し、身につけていない場合は再度指導するという目的で、年2回歩行テストを実施している。

年長児の歩行テストの変化

	7月	1月
手をあげて渡る	232人(91.7%)	253人(100.0%)
右、左を見て正しく渡る	195人(77.1%)	233人(92.1%)
右側を通る	247人(97.6%)	253人(100.0%)
右側を走らず歩く	195人(77.1%)	249人(98.4%)
四っ角でいったん止まる	228人(90.1%)	249人(98.4%)
四っ角で手をあげて渡る	226人(89.3%)	248人(98.0%)
四っ角で右、左をみて渡る	190人(75.1%)	240人(94.9%)

(年長児253人)

方法としては、交通安全部員が各要所に立ち、各項目をチェックし、テスト終了後結果をカードに記入し、各家庭に知らせるようにしている。その際、正しく歩けていない子にはその場で注意し、正しく歩けるように指導している。項目と今年度の

年長児の結果は表のとおりである。この結果から、正しい歩き方が身についていき、歩行テストや日頃の指導の成果がうかがわれる。

c. バス通園パトロール

本園はバス通園が全体の約3分の2を占めており、1コースから9コースまでを3台のバスで分担している。バス停の数はコースごとに異なり、全部で73か所ある。そのため、安全にバス通園ができるようバス停責任者会を行い、バス停でのバスの待ち方のマナー(バス停は園独自で決めた場所なので付近に迷惑をかけない等)について話し合う。そして、新入園児もだいぶ慣れてきたと思われる6月頃に、交通安全部がバスに同乗し、各バス停での様子を見ていく。項目は、1)登園時(各バス停当番の父兄が)たすきをかけているか、2)親子がバス停できちんと並んでいるか、3)乗車人数を報告しているか、4)降園時にたすきをかけているか、5)朝乗車した人数と同じ人数が降車しているかを確認する。その他、備考として気のついた点を記入するようにしている。その後、各項目について統計を出す等して、このパトロールの結果をプリントにして報告している。

d. 交通安全カエルのお守り

これは、子どもたちが「無事カエル」ようにと祈りをこめて作られるカエルのマスコットで



ある。全園児のマスコットを交通安全部の母親が分担して作り、それを近くの生島神社で祈禱していただく。それを担任がひとりひとりの子どもの右肩につける。このことで右側通行等、右を理解させる時、「カエルさんがついている方が右よ」と言うときよくわかり、子ども同士でも道を渡る際に「カエルがついてる方の手をあげるんだよ」と言っている姿が見られる。また大変大切にしており、たまたまなくすと「先生、なくしたから1つちょうだい」と言いに来て、余分に作ってあったものを渡すこともある。

③考察

交通安全部のさまざまな活動によって、交通安全に対する意識が親子共に向上し、少しずつ身についてきているようである。しかし、今後親として子どもに交通安全指導をするとともに、良いお手本を示すことの大切さを痛感し、交通安全に対して親自身、教師自身、常に正しい姿勢で臨まなければならないと考えている。

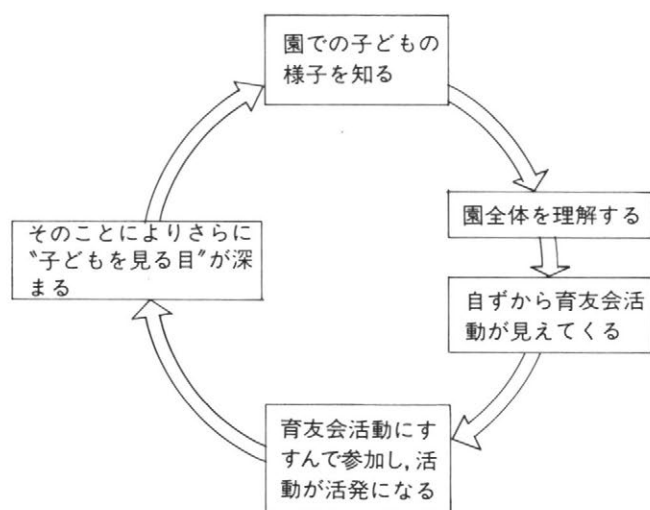
V 研究の結論と今後の課題

—育友会活動を契機とした親と子の変容—

S男は5歳の男児。4歳児の入園当初は登園を嫌がり、活動にも消極的な子どもであった。母親は神経質で、ひとりっ子であるがゆえに子どもの些細な出来事にも思い悩むことが多かった。しかし、年長組になり、担任に勧められて交通安全部に所属したことをきっかけに、母親は表情が明るくなり、それにつれてS男も次第に明るくなり、今では活発で意欲的にあそべる子どもになった。

母親はたびたび園に足を運ぶことにより、子どもの園での様子がよくわかり、また交際範囲が広がり子どものことについて話し合える友だちがふえたので悩みが解消し、自ら明るくなったことが子どもにも大きく影響することを実感したようだ。

幼児が主体的に活動するには、幼児のみの力では発達上無理な点が多いため、ある程度おとなからの働きかけが必要である。ところが、子どもの変容を意図するあまり、親や教師からの一方的な押しつけに陥りやすい。子どもが成長するためには、各々の立場から子どもが主体的に活動できるように一緒に考えていくといった姿勢で取り組まなければならない。と同時に、親と連携することにより、親の“子どもを見る目”が深まり、さらに教師と手を携えて、よりよい保育を創造することができると考えている。



これまでに述べた実践の結果、子ども・親・教師が、お互いの変容を見て、自らが変容し、相乗的に高まり、子どもたちに確実に良い影響を与えていると確信している。

なおいっそう育友活動の輪を広げていくために、上図のようなサイクルで、まず園での子どもの様子をいろいろな場面で知ってもらうことを念頭に取り組んでいくことを今後の課題とする。

研究にたずさわった人たち

神田美智子	浜名 清美
中前 淳子	谷岡 幸子
成瀬 宏子	吉田 法子
松岡チカ子	井口 典子
馬越 由美	沢中田鶴子
堀田 真理	空 三輝子
岡田 由子	松本 和代
小西 廣子	谷 美香
東 文子	平田 映子
津田 修子	荒川 裕子

〈付表〉育友会活動の年間計画(昭和62年度)			◇…三部会共通の活動
月	母親学級	花の会	交通安全部
4	←◇勧誘(プリント等により各部会の主旨を理解してもらった上で、希望の部に同好会として入会する)→	●入園式で新入園児に会って栽培した花の鉢を配布	●進級式、自転車整理 ●入園式、自転車整理及びぬいぐるみを着て新入園児を迎える
←◇※新入園児のお世話(入園後1週間ほど、登園した新入園児に靴箱の位置、保育室への移動等の指導の補助)→			
5	●母親学級、開講式、タオルのぬいぐるみ作り ●洗濯講習会	◇育友総会 ●顔合わせと春の種まき講習会 ●さし芽：さし木の交換会	●バス停責任者会 ●カエルのマスコット(交通安全のお守り)作り
6	●ディッシュ・ガーデン(ミニ観葉の寄せ植)	●花の壁掛け作り	●カエルのマスコットを各園児に配布
6	◇父親参観、講演会「父親の役割」 ●「洋菓子のヒロタ」工場見学 ●紙粘土人形(壁掛け)作り	●父親参観で父親に会って栽培した花の鉢を配布 ●菖蒲園見学	●父親参観、自転車整理 ●カニとり、引率補助 ●バス通園パトロール
7	●救急法、講習会 ●阪神水道企業団「尼崎浄水場」見学	●マクラメ編み講習会(鉢カバー作り)	●交通安全映画会(対園児用、対父兄用) ●年長児歩行テスト及び指導
8			●盆踊り、自転車整理
9	●料理教室 ●防災センター見学	●秋の種まき講習会	●ぶどう狩り、引率補助
10	◇運動会の接待、自転車整理 ◇合同サイクリング(近松の里) ●NTT見学	●尼崎市花壇コンクールに参加 ●県民花壇コンクールに参加	●一年を通じて花の苗づくり、植えかえ・水まき
11	◇愛の園まつり ●パール、アクセサリー作り	●クリスマスのリース用木の実採集	
12	●和紙小物入れ、お手玉作り(各クラスへクリスマスプレゼントとして)	●クリスマスのリース作り ●松竹梅寄せ植え	
1	◇講演会「子育ての中で今問題になることは」 ◇立花・武庫(姉妹園)愛の園育友会合同		●ボウリング大会 ●年長児歩行テスト及び指導 ●年中少児歩行テスト及び指導
2	●電気のお話、七宝焼講習会 ◇講演会「入学を目前にして1,2年生の授業はどのように行われるか知ってほしい」	●梅林園見学 ●生活発表会自転車整理(4日間) ●花壇コンクール表彰式	
3	●閉講式、記念品製作	●卒園式で卒園児に会って栽培した花の鉢を配布	

※入園したばかりの幼児にとって、たとえ自分の母親でなくても、まわりにおとながついて、靴箱や保育室の場所を案内してもらえることでかなり安定するようである。教師にとっても、入園当初は園児の名まえと顔が一致しない時期でもあり、加えて大規模園であるため、この補助はたいへんありがたいものである。

12

共同研究



望ましい知的発達を促すために
幼稚園教育の重要性を家庭
にどう意識づけるか

兵庫県姫路市立大塩幼稚園
〔代表 石坪絃子〕

Ⅰ 主題設定のねらい

本園は、北に日笠山、南に大塩海岸という自然環境に恵まれ、他方、地域をあげての社会的行事の大塩まつりで有名な所である。このような恵まれた環境の中で、豊かな心が育つことを願っていたが、親の言動を見つめると、情報化社会の中で幼児期に何を育てるのかを見失い、基本的なしつけや心情面をおざなりにした知育偏重教育を期待したり、眼に見えることのみに心を動かし、結果ばかりを気にする傾向にある。

そこで、本園児の望ましい知的発達を促すためには、子どもたちが好奇心や興味をもって主体的に活動するよう園内の環境を整備するとともに、すばらしい地域環境を保育の中にとり入れ、多様な体験をさせるように工夫したい。また、親集団に対しては、幼児における望ましい知的教育とは、知識・技能にのみ重点をおくのではなく、基本的なしつけや豊かな感性・表現力・社会性など、内面の成長がともなうことこそ重要であることに理解を促し、幼稚園と家庭とが協力し合う体制を整えたい。そして、知・情・意ともに豊かで、21世紀に生きる子どもの成長をめざして本主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

- 子どもに主体的に働きかけ、多様な遊びを通して調和のとれた知的発達を促すための年間計画を作成し、家庭の協力を得ながら、その実践に努める。
- 園内外の環境づくりを工夫し、教師の望ましい働きかけと地域性を生かした親子活動を取り

入れ、子どもに内面の定着をはかる。

- 効果的な生き生きとした家庭連絡のあり方を工夫し、教育目標や方針、日々の保育の具体的な展開などをわかりやすく知らせ、園の教育への理解と協力を求める。

Ⅲ 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

①知的発達をはぐくむ活動を主体とした年間計画の作成

②知的発達を促進させるための環境の工夫

- 知的好奇心を誘発するために……遊びのコーナー、観察コーナー
- 直接体験を多くもたせるために……親子共同栽培、海岸保育、収穫まつり、日笠山保育
- 主体的な活動を多くもたせるために……プレールーム、ダイナミックなタイヤと固定遊具
- 地域性を生かすために……親子手作り大塩まつり、地引き網、親子ハイキング

③活動の場における指導の工夫と改善

- 知的発達を促すための助言・発問のあり方
- 親子活動を通しての幼児理解の啓発

④家庭との連携の工夫

- 杉の子教室
- のじぎく通信
- 連絡帳による個別指導

(2) 研究の方法

①幼児の実態をよく見つけ、幼児の主体性を重視したうえで、地域性や季節を考慮して予想される活動を設定した。そして、幼稚園教育要領をたてに、知的目標をかかげ、その有効な達成のために環境を工夫し、家庭との連携を位置づけ、指導上の留意点も考えた。

②知的発達を促進させるための環境の工夫については、教師の指導の大切な要素と考え、幼児自身が選択できること、手ごたえが感じられること、発展性があること、他の物との組み合わせが可能なこと、その他季節感などを考慮に入れ、質の良いかわりをさせるための工夫をはかり、子どもの発達段階に応じて変化をつけていくように配慮した。

③活動の場における指導の工夫と改善については

- 子どもの言動に見られる知的側面をとらえ、問題解決の糸口、遊びの発展性を考慮した助言・発問のあり方を工夫した。
- 親子活動の場をとらえ、教師の子どもへのかかわりの中から親として望ましい対応のしかたを学んでもらうようにした。

④家庭との連携の工夫については、現実の子どもの姿と結びつく講演会や連絡会を計画し、それが、連続性と相互交換性を保てるように配慮した。他方、公報活動は、累年のものを改善

し、父母だけでなく、地域へも幼児教育への理解と協力を求めるために、積極的に推進した。

Ⅳ 実践事例

(1) 大塩幼稚園年間計画

本園児の実態から、子どもの成長期を3分して大単元を設定した。次に、大単元の中から地域性を考えながら、幼児の望ましい活動を各期ごとに配列した。そして、その活動に対して、教育要領の分析をもとに、それぞれの知的目標を定め、その目標達成のための環境構成、家庭との連携、指導上の留意点をかかげた。

<5歳児－1年保育>

期	大単元	活動	知的目標	環境構成	家庭との連携	指導上の留意点
1 学 期	楽しい子	ままごとあそび	○遊びの役割や約束がわかり、家庭の役割を考える。	ままごとコーナー (仲よしの部屋)	◎遊びの重要性と意義を知らせる。	○お父さん、お母さんの仕事や役割を思いださせる。
		砂遊び	○素材を併用して立体表現をし、創造力の芽を養う。 ○形・数に関心をもつ。	砂場コーナー (運動場)	○のじぎく 「ぼくらの砂山大きいよ」	○子どもの経験や欲求に応じて遊びの発展に必要な用具を見つけさせる。
		小動物との遊び	○いろいろな小動物を飼育・観察しながら、事実にてらして、思考力をのばす。	観察コーナー (各保育室)	○のじぎく 「ザリガニなどの小動物」	○命あるものへのいたわりの気持を持ってかかわらせるよう配慮する。
		海の遊び	○海のいろいろな現象やくらしに興味・関心をもち、試したり、考えたりする。 ○安全な遊びをする。	海岸保育 地引き網 製作コーナー (仲よしの部屋)	○のじぎく 「地引き網」 ○親子海岸保育 ○のじぎく 「海での活動楽しかったね」	○漁師の生活に関心をもたせる。
2 学 期	たくましい子	大工遊び	○木の性質がわかり、計画的に製作する。	木工コーナー (仲よしの部屋)	◎子どもたちの変容の中で、教師のかかわりを知らせ、親としての対応のしかたを学び、実行を促す。 ○のじぎく 「木工遊びの重要性」	○個々の能力に応じて用具の使い方を指導したり、木のもつ特性を生かした製作ができるよう助言する。
		おまつり遊び	○身近な社会行事を通して、自分ととりまく社会生活に関心をもつ。	親子手作り 大塩まつり 製作コーナー	○のじぎく 「屋台や獅子作り」 ○手作り大塩まつり	○大塩まつりのすばらしさを知り、誇りをもたせる。

		リス遊び どんぐり遊び	○今までの経験の中から用具の特性や形を生かし、遊びに必要な場を構成する。 ○自分の思いを相手に伝えたり、人の話が聞けるようになる。 ○仲間とのつながりの中で、遊びを創りだしていく。	ダイナミックなタイヤと固定遊具（運動場） 日笠山保育観察コーナー	○のじぎく「運動用具などの遊び」 ○親子ハイキング ○のじぎく「どんぐり遊びのいろいろ」	○子どもの考えたことを大切にし、危険のないよう見守る。 ○話をしたくなるような豊富な体験を十分もたせる。
3 学 期	の び る 子	お正月遊び 作品展 劇遊び	○いろいろなゲームを楽しみながら、ゲームのしかたを知る。 ○数・図形・文字への関心を高める。 ○自分の描いたイメージを立体形に表現する。 ○物にはいろいろな形があり、その組み合わせによって構成されていることに気づく。 ○物語に感動し、想像する。それをもとに、心情をこめた身ぶりやはっきりとした言葉で表現する。	ゲームコーナー（仲よしの部屋） 製作コーナー 木工コーナー 木工コーナー 製作コーナー 絵かきコーナー（仲よしの部屋）	◎親の変容や子どもの姿を知らせ、就学に向けての取り組み方を啓発する。 ○親子こままわし大会 ○のじぎく「遊びのコーナー紹介」 ○のじぎく「ぼくたち、こんなの作ったよ」 ○作品展と講演会 ○親子ピン人形作り ○のじぎく「劇遊びについて」 ○生活発表会	○遊びの楽しさを味わわせ、ルールを守る必要性から文字・数・図形に興味・関心をもたせる。 ○子どものイメージがより具体的に表現されやすくなるために、いろいろな形の素材を用意する。 ○活動の中で、子どもどうしが、共有の感動がもてるように配慮する。

のじぎく＝家庭通信 ◎期によるねらい

(2) 知的発達を促進させた遊びの実践

①知的好奇心を誘発した観察コーナー

観察コーナーでは、年間を通じていろいろな自然物を取りあげ、子どもの知的好奇心を誘発するようにしてきた。ここでは、秋にどんぐりの遊びを取りあげてみた。子どもたちが、園庭や近くの手で拾ってきたどんぐり・木の葉を観察コーナーにおいておくと、比較したり、ころがしたり、ままごとに使ったりする遊びが始まった。そこで、全体に広げるためとして、どんぐりの絵本を見せた。その絵本は、山のどんぐりが谷間へころがっていき、新しい友だちを見つけるお話である。この続きはどうなるのという子どもの発言から、どんぐりに旅をさせるおはなし作りが始まった。一場面ずつストーリーを考え、身体表現・ごっこ遊び・体育遊びをくり返しながらか、おはなしを作っていた。自分たちの考えた遊びであったので、大変意欲的

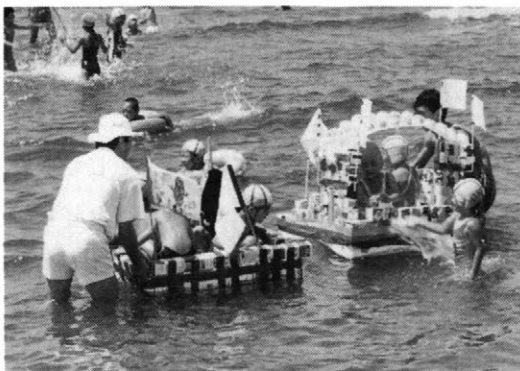
であった。自由遊びでもマットを出して、山から転がるどんぐりになったり、どんぐりごっこをしたりしていた。遊びの中で知的好奇心から出発し、試したり、友だちと考え合ったり、疑問を解決しようとする姿のはっきりした活動があった。それは、どんぐりが池に来て遊ぶ場面を考えている時、どんぐりは水に浮くか、沈むかで、子どもたちの意見が対立してしまった。

幼児の活動・考えたこと	教師の配慮
<ul style="list-style-type: none"> ○どんぐりは、水に浮くのだろうか。 ○浮く、浮かないにわかれて意見を言う。 ○何となくそう思っている子が多く根拠のある子は少ない。 ○水を入れた容器にどんぐりを浮かべる。 ○いろいろな大きさや形のもので試す。 ○沈むものは、葉に乗せて浮かべる。 ○浮くもの—大きい、茶色、壊れてない。 ○沈むもの—小さい、緑色、壊れている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ひとりの疑問を全体に投げかける。 ○子どもたちに十分話し合わせ、今までの体験や知識をださせる。 ○実際に試してみるように助言する。いろいろなもので試すよう助言したり、準備したりする。 ○子どもの発見したものを受けとめ他の子にも広げる。

この活動をすることにより、日笠山の水たまりに落ちたどんぐりを見つけ、木の葉の上に乗せて浮かべたり、拾ったどんぐりを浮くか沈むか試して遊ぶ姿が見られたり、池のあと川へ遊びに行く場面をつけ加え、「いくら浮いても、川の水は流れるから、どんぐり君はこわくなって助けてって言う」と変化をつけて考えるなど、水とどんぐりに対しての関心の強さが見られた。この後、作ったおはなしをOHPのペープサートにした劇的活動へ広げ、クリスマス会で発表した。

この遊びで、子どもたちが気づいたのは「赤ちゃんどんぐり(小さい・緑色)やけがをした(壊れた)のは、泳げない」ということである。ある面では、科学的にとらえ、ある面では、情緒的にとらえているが、このようなとらえ方は、子どもとしてはごく自然なことであろう。知そのものが単独で発達していくのではなく、情・知が一体となり発達していくことが望ましい知的発達であると感じた。

②親子で素晴らしい直接体験をした海岸保育



園から海岸まで片道25分で、舟や魚も見られる。保護者の中には、舟を持っている人もあり、海は生活の中に根づいている。本園では、海を教育課程の中に位置づけ、継続的に実施している。4月～5月は、砂や波と遊んだり、石や貝がら・海草を集めたり、小動物を見たりする遊びが多く、教師は、個々の子どもが自分の興味に応じた、自分なりの遊び

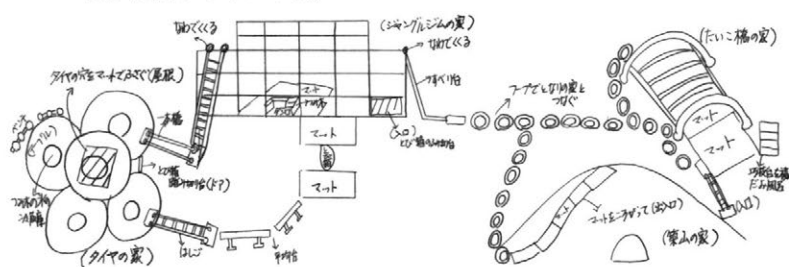
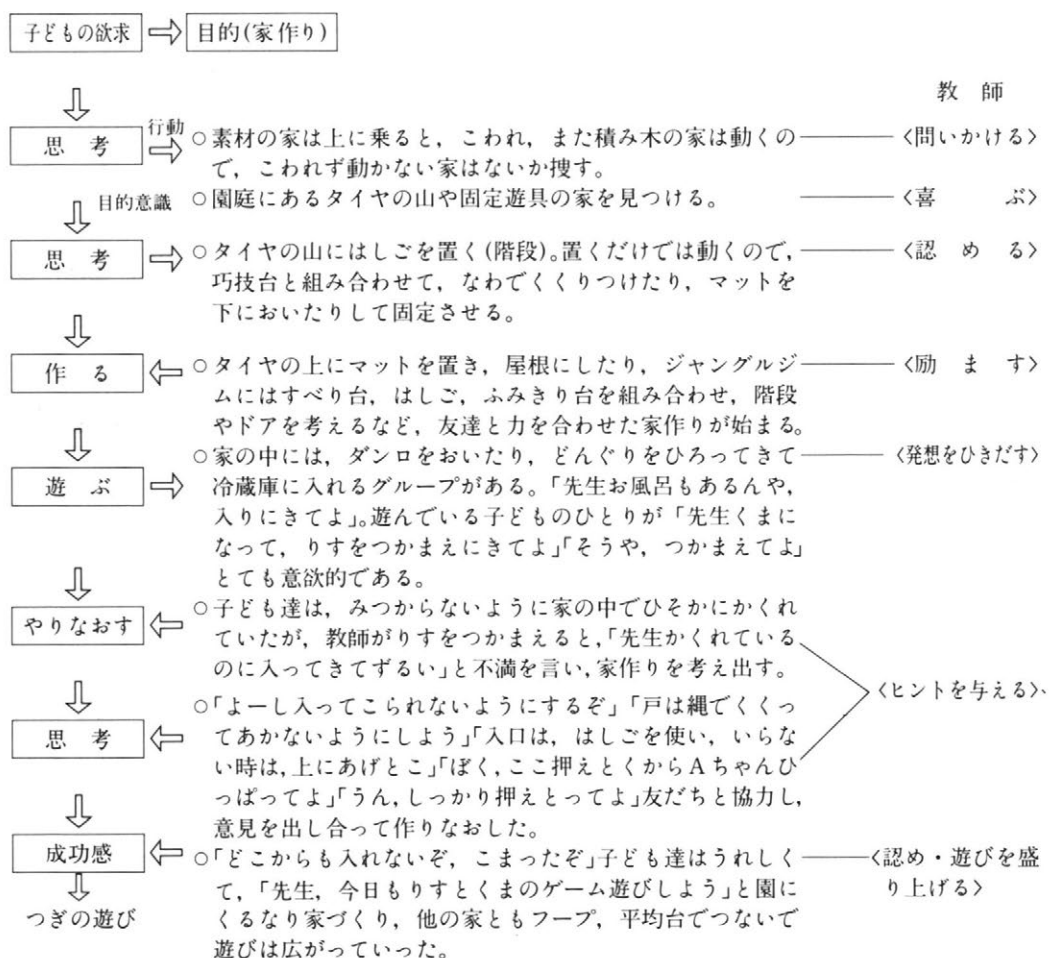
を見つけるよう配慮した。6月～7月になり、海へ行く回数がふえてくると、天候による海の色や波の変化、潮の干満などに気づき始めた。教師は、子どもの発見や疑問を大切に、他の子に広げたり、解決に向かっての助言をするように心がけた。この期になると、いろいろな物を浮かべたり、試したりして、積極的に海にかかわっていく姿が見られるようになった。そこで、園での保育を、海岸保育と関連をもたせ、計画的に遊べるようにするため、舟作りをした。製作コーナーで作っていた個人の舟作りを全体に広め、自分たちの乗れる舟を作り、夏休みの親子海岸保育で遊ぶようにした。9月に入ると海によく慣れ、安全面・衛生面でも自分たちで判断できるようになり、地引き網の経験から、海の生活にも関心をもつようになってきた。

活動内容	子どもの姿	親の姿	教師の配慮
地引き網	○親と一緒に、ロープを引く。 ○網が近づいてくると、魚を見に近寄って行く。	○掛け声をかけたり、引き方を教えたりして、ロープを引く。 ○魚の飛びはねているようすを教える。	○リズムに合わせ、引くように声をかける。 ○引き方のわからない子は、親から教えてもらうようにする。
魚のつかみ取り	○喜んで魚を追いかける子、おそろおそろ手を出している子など、いろいろである。	○網の外から、魚のいる場所やつかみ方を教えたりする。 ○つかまえた魚を見て、名まえを教えたり、ほめたりする。	○消極的な子、こわがっている子は一緒につかまえる。 ○うまくつかまえた子を認める。
作った舟に乗る	○自分たちが作った舟が、浮かび、大喜びする。 ○順番に舟に乗る。	○父親が、数人でささえ、沖の方へ引いて行く。座る場所を指示したり、近くの子を誘ったりする。	○海岸で見ている保護者に、舟を作った時の子どものようすや工夫したことを話す。

父親が参加したことや親たちが実生活の中でよく知っているので、子どもへのかかわりが積極的であったことが成果だった。また、地域の漁業組合の人たちの協力やいろいろな話が聞けたことで、親も子も自分たちの地域の素晴らしさを感じたようであった。

③知的遊びを大きく広げたダイナミックなタイヤと固定遊具施設

園庭で見つけたどんぐりと遊んでいた子どもたちは、童話「りすのパナシー」「どんぐり家族」をきっかけに、りす遊びへと発展していった。初めは素材や積み木の家でのりす遊びであったが、りすのすばやい動きや暮らしに心をよせ始め、固定遊具や体育用具に目を向けていった。



一つひとつの固定遊具や体育用具の使い方、組み合わせ方を一学期からの遊びの中で経験してきたため、遊びが大きく広がっていった。大きな環境構成は、友だちとかかわり合い、試行錯誤のくり返しによって、今までの経験を生かして遊びを広げていったのである。すなわち、基礎体験を応用させていくことが、知的教育を行う上で大切であることがよくわかった。

④親子手作り大塩まつりによって地域の特性を感得した

灘のけんか祭りは、みこしとみこしのはげしいぶつかり合いに始まり、華やかな屋台の練り合わせ、勇壮な獅子舞へと発展する大塩小学校区をあげての一大行事である。大人はもちろん

子どもたちも、おまつりについて豊富な知識と体験をもっているので地域の行事に積極的に参加し、おまつりごっこへ向けて、がんばろう、やろうという意欲をもつよう親と教師が協力し盛りあげていった。

●秋祭りを見る。(屋台練り、獅子舞)

●自由活動でのおまつりごっこ

共同製作している屋台を持ち出して遊んでは、作ることのくり返し、ただ練るだけでなく固定遊具や巧技台をお宮や屋台蔵やたいくらにしてお祭りらしく工夫して遊ぶ。また、獅子舞も、一人舞、二人舞、かた車で舞ったり、おはやしも太鼓と笛を出してきて友だちと協力しながら遊ぶ。



●素材を使つての屋台・獅子作り

●おまつりごっこの準備

親の店……ヨーヨーつり、金魚すくい、輪なげ等の店、保護者からの盛りあがり、前日(手作り看板)より看板作りや風船等の準備が始まる。親は自由参加にしていたが、多数出席し半完品を家で作ってくる等、大変な意気込みである。

子どもの店……おもちゃ屋、たこ焼屋、綿菓子屋、かき氷屋を作って、もうまつり気分。

・会食のおでん作り……有志が集まりおでん作りが始まる。それぞれが特技を生かす。

●おまつりごっこ

子どもたちが作った屋台の練り合わせ、ひとりひとりの獅子舞、見てくれる人があることで子どもの動きは、生き生きとして喜びも大きかった。親の方もお店屋をしたことで、親同士の交流もでき、また、自分の子どもだけでなく、他の子どもとの交流もあり、お母さん方にとっては大きな意義があった。また、親子ともに秋祭りに対する関心、土地に対する愛着を強く感じる行事であったばかりでなく、園と家庭とのつながりも深くもつことができた。

(3) 活動の場における指導の工夫と改善

- 幼児理解の研修に努め、幼児の興味・関心を察知し、個々の子どもに応じた援助のあり方を考えていく。
- 研究保育を通して、子どもの遊びを高めていくための助言や発問のあり方を研修する。
- 子どもの言動に見られる知的側面を、実際の経験や活動を通して子どもの内部に定着させるように働きかける。

〈研究保育指導案の1例〉

主題	海	目標	○海のいろいろな自然現象に興味関心をもち、試したり、考えたりする。 ○海の生き物や海に関するくらしに関心をもつ。	
期間	8/30～9/19			
指導の経過	①海へ行く ②身体表現をする	・海の自然物で遊ぶ ・泳ぐ ・舟を見たり乗せてもらう ・波 ・魚 ・地引き網	③童話や絵本を見たり、聞いたりする ・海や舟に聞いたりする ④舟の絵を描く ⑤乗ってみたい舟を作る	木工コーナーでの遊び ①いっばいくぎを打とう ②毛糸の迷路 ③花の立札づくり ④親子植木鉢作り ⑤おもちゃ作り ⑥割ばしとゴム
本時の主題	乗ってみたい舟を作ろう			
本時のねらい	○木片のいろいろや、他の素材との組み合わせを工夫し、自分なりの舟を作る。 ○木工用具の扱いに気をつけ、安全に使う。			
幼児の活動	教師の指導			準備
①話し合いをする ○舟について ○材料用具の使い方について	○自分が見た舟、知っている舟について、あればいいと思う夢の舟などについて話し合わせ、作りたい舟のイメージを明確にさせる。 ○いろいろな舟の写真を見せることで、今まで自分の知らなかった舟にも興味をもたせ、製作への意欲をもちあげる。 ○木工用具を使う時は、常に危険がともなうことを知らせ、正しい使い方を再確認させる。 ○いろいろな木の形からイメージを広げさせ、自分の乗りたい舟につながっていくよう助言する。			舟の写真 ○かなづち ○くぎ ○くぎぬき ○木片 (いろいろな形のもの) ○ひも ○ビンの王冠 ○モール
②舟を作る	○個々の子の思いを大切に、その子なりの工夫ができているものは認め、言葉かけをする。 ○木片は一人でたくさん取らないで、友だちと分け合って使わせるよう配慮する。 ○くぎの打つ位置が悪かったり、くぎの長さや木の厚みが合わなくて接着しにくい子には、何が原因か考えさせるような言葉かけをする。 ○作りにくい子には、はげましの言葉をかけたり、援助をする。			
③片づける	○自分の使ったくぎが残っていないか確認させる。			
④できあがった作品を見る	○工夫して作っている子の作品を認め合い、明日の続きへの意欲をもたせる。			

研究保育の反省と指導助言

- 海や舟に関する体験が豊富だったので、子どものイメージが自分なりにえがけ、個性的な舟を作っていた。原体験の大切さをあらためて感じた。
- 自分の考えどおりに作業ができないので、何度も打ちなおしたり、他の物と組み合わせを工夫していた子がいた。教師はそんな場面をうまくとらえ、ほめたり助言を与えたい。
- 木工コーナーでの経験の差があり、女兒の中には、かなづちを十分に使いこなすまでに能力が育っていない子がいた。このことから、教師は個々の能力を把握し、発達段階にあった指導をしなければならない。
- くぎの長さや木の厚みの関係によって、安定した木工になることを助言しても、なかなか子どもには理解できないようだ。くり返しの体験の中で理解させたい。

V 研究の結論と今後の課題

恵まれた地域環境を生かし、多様な体験や子どもが主体となる活動を重視し、知的発達に焦点をしばり、教師として、親としてどうかかわればよいか、研究を進めてきた。現在、子どもたちの姿を見つめると、多方面なことに疑問をもったり、それをためそうとしたり、自分たちで問題を見つけ、それを解決するまで追求しようとするなど、自ら学ぶ姿勢が見られるようになってきた。また、なにげない野の草にも心をよせ、じっと見つめたり、大切な宝物として扱い、温かい心のかよい合うやさしい心情が育っており、当初に掲げた目標にかなり近づいていることをうれしく思っている。他方、親たちは、外観や出来上がりより、子どもの内面やその時その時の過程を重視しようとするなど、子どもへの対応のしかたに変革が見られた。

しかし、本研究を続ける中で、私たちこそ、子どもたちにとって、大きな環境として、ますます重要な存在となってきた。子どもに興味や関心をもたせ、状況判断して適切な助言や示唆を与えるためには、教師自身、感性豊かな人間でなければならないと痛感した。

今後の課題としては、次のようなことが考えられる。

- (1) 過去2年間は、「幼稚園と家庭との連携」の研究を続け、その研究をまとめる意味で本年度は、知的発達に重点をおいて研究を進めた。しかし、じゅうぶんに実践するまでに至っていない面も多くあるので、今後実践を深めていきたい。
- (2) 本研究は、知的発達に重点をおいて研究を進めたが、幼児のものの見方や考え方をよく見つめると、情的にものごとをとらえたり、仲間とのかかわりの中でより強く興味や関心をいざいでいるので、情的、社会的発達との関連について追求していきたい。
- (3) 現在においては、子どもに直接かかわる人として親に対し、理解や協力を求めることが中心となった。しかし、祖父母やその他の家族、また幼児をとりまく地域社会の人々に対しての働きかけが、やや希薄であったのでつながりを深めるための努力を続けたい。

13

共同研究



地域の自然環境「斐伊川土手」
を生かす保育実践
——いきいきと遊べる子ども
の育成——

島根県出雲市立川跡幼稚園
〔代表 妹尾延子〕

I 主題設定の理由

本来子どもは、活動的で知的好奇心に満ちた存在であり、とりまく環境に積極的に働きかけ、遊びを創り出し、自己を充実させていく。こうした中で心身の調和的な発達が促されることを考える時、子どもの興味や欲求をくみとり「やりたいこと」が「喜んで」「楽しく」できるような環境づくりこそ、教師としての大切な役割であると思う。特に戸外での活動は、子どもの心をときはなち、のびのびとしたものにするため、自ずと自発的な活動を促す。ここに自然環境を生かす工夫が必要であると考えます。

本園は、自然環境に恵まれた地域にあり、園児数109名の年少、年長おのおの2クラスからなる中規模園である。園から700mの所には、神話「八岐の大蛇退治」で有名な斐伊川が流れ、その堤防を中心とした自然環境は、変化に富み豊かな自然物に恵まれている。

近年当地域は、新興住宅化し、大型農道ができるなどにより、子ども達の生活をとりまく周辺は、交通の危険がましてきている。家庭では、戸外遊びに制約を加えることが多く、子ども達は、既製の玩具やTV視聴などで時を過ごすことが多い。このようなことから、積極的に戸外の自然にふれて遊ぶことが少なく、近隣の友だちと遊ぶ経験も少ない。したがって、人や物に積極的に働きかけ、存分に遊ぼうとする意欲に乏しい。そこで、子ども本来の姿をとりもどす保育環境の設定として、当地域ならではの自然環境「斐伊川土手」を魅力ある保育の場として生かし、時間をかけた継続保育に着目し、全身で挑む意欲的な子どもの姿を期待して実践とくりこんできた。

Ⅱ 研究のねらい

- (1) 「斐伊川土手」の自然環境を教材化し、子どもの発達の過程をとらえながら、一人ひとりの興味・欲求を生かし、身体を動かして遊ぶ活動を継続することを通して、自主的自発的な態度を育てる。
- (2) 変化に富んだ自然環境の中で、じかにふれた体験の積み重ねを図り、好奇心や探求心を旺盛にし、豊かに感じる心を育てる。
- (3) 大きな集団(全園児)の中で、友だちとさまざまなかかわりを促し、好ましい人間関係を育てる。
- (4) 地域の自然環境を生かし、子ども本来の遊びをとりもどし、ふるさと意識をめばえさせる。

Ⅲ 研究内容と方法

- (1) 全園児を全職員で育てる立場から、クラスの枠をはずし、誰とでも遊べる場として「斐伊川土手の遊び」を設定し、毎月出かける。
 - 月1～2回の活動そのものの効果を性急に求めず、長い見通しの中で継続した活動を通して、子どもの育ちや遊びの広がりをとらえる。
 - 園から土手までの距離700m間における交通安全意識と自主的歩行態度を養う。
 - (2) その時期時期の子どもの育ちをとらえ、自ら環境に働きかけ、意欲的なとりくみを促す手だてを明らかにする。
 - 土手ならではのねらいを明らかにし、その時期ならではの感動体験を十分に実現させる。
 - 心ゆくまで遊べる時間と場を与え、遊びを子どもにまかせる。(場所・材料・友だちの選択など)
 - 遊びに必要な材料は、その都度子どもと話し合い一緒に準備する。
 - 特に草花、小動物においては、自主的自発的な姿をとらえ、子どもなりの見方とらえ方について考察し、その育ちをとらえる。
 - (3) 異年齢同士や同年齢同士の気の合う仲間関係を育て、互いに自分が出し合えるようにする。
 - 通園班を基盤とした異年齢の仲間づくり、同クラスの気の合う仲間関係を支える。
 - (4) 家庭との連携を密にし、遊びの発展拡大を図る。
 - 個別れんらくノート、園だより等の活用、参観日、諸行事への保護者の参加
- 以上の研究を継続していく過程から、変容とその要因を分析考察し、発達の過程をとらえ、教育課程へ位置づけ具体的展開を図る。

IV 実践例

(1) 遊びの発見と多様なとりくみ

クラスの枠をはずし、全園児が通園班の友だち同士で遊ぶ。遊びに必要な材料は、子ども達が手に持てる他はまとめてリヤカーに積んで教師が運ぶ。園を出発して15分、土手の急斜面を上りきるとそこには、斐伊川土手の豊かな自然が目前に広がる。子ども達の中からも思わず、「ワーッ!」「花だー!」「広いねー!」と感嘆の声がもれる。「好きな所で遊ぼう!」の合図と共に走り出し、自分達で遊びを見つけていく。そして合図があるまで熱中して遊ぶ姿がみられる。草花での遊び、虫とり、土手の斜面での坂すべり、広いグラウンドでのかけっこや探険遊びなど、さまざまな遊びが展開され、個々に応じたとりくみがみられ、継続していく過程でさまざまな様相を示している。そこには、遊びの発展がみられ、さらに季節がもたらす自然の変化が遊びを変えたり新たに生み出したりしていく。このことについて、6月と10月の活動にスポットをあて考察を加えてみる。

①多様なとりくみ(6月と10月の活動を抜粋)

月日	6/6 晴れ、暑い (4回目)	7/1 快晴、暖かい (7回目)
環境の状況	・草丈低い ・草花少ない(4・5月に比べ) ・川の水かさ少ない	・草丈伸びている ・すき目立ち、おなみ茶色になる ・川の流水早く、にぎやかな
草花にかかわる活動	・フーティ作り ・つばき ・草ごちそう	・草の実を服にくっつける。 「字や絵を描く」 ・ごちそう作り 「葉の裏に花や実のごちそう」
虫にかかわる活動	・虫をかべたり、取ったりする 「草むら、木の穴、パンタ、テントウ虫を取ると話していることを話す」	・虫をかべたり、取ったりする 「草むら、川岸でパンタ、カマキリを取る」 ・虫を分けて入れる、想像しなことを話す ・カマキリ、卵の発見 ・虫で遊ぶ 「カマキリのレストラン」
土手の斜面を利用した活動	・すべる—板つきタンボールで ・かじを取る者、押す者、カを合わせて運ぶ ・すべる距離をのびす ・スピードが速い工夫 ・車がかかる 「タンボールで」 「月形袋で」 「横車、前車」	・すべる—板つきタンボールで ・安全な乗り方考える・他グループと競争 ・「リカーすべり」/「リカーすべり」 ・車がかかる ・タンボールに入って—腹水かき ・肥料袋に入れて—おの虫ごっこ ・チエジマン、ジャスピオン、ごっこ 「つなをエレベーター、リカーに外して」
水にかかわる活動	・川の中を歩く 「ムソヤの目隠し」 ・足で深さを確かめながら進む ・木(ト)にたがって遊ぶ ・「足が抜ける」 ・灰がとちと手をとり合う ・小動物の色とり 「クモで」 「葉手で」 「アムホウ・タイウチ・カマ」	・川の流水を見る (その世の活動) ・虫ごっこ 「顔をかぶった」と進ませる ・石で遊ぶ 「石で水を描く」

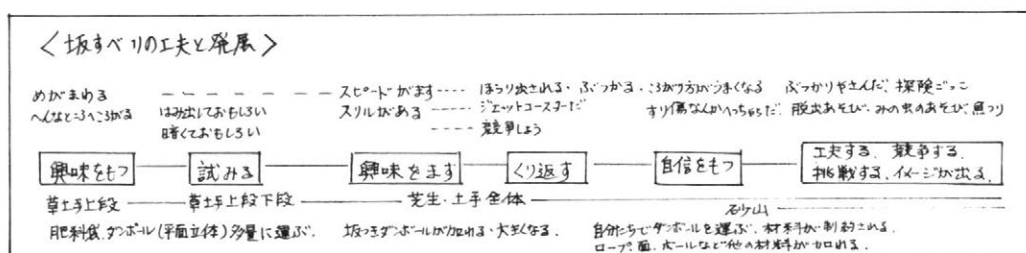
[考察] 6月は、感覚的発散的な遊びが中心で、その場その場の遊びに満足を持つことで遊びの楽しさを知ることが多い。10月になると、挑戦性が旺盛になり、友だち関係の中で競争したりごっこ的なイメージを共有したりして遊びによって新たな遊びが生まれている。また、つなを持ちこんだ遊び、

素手での遊びなど場を生かした遊びをつくり出している。このように多様性をおびてくる要因について次のように考えた。

- イ. おのおのの興味や欲求を満たす変化に富んだ場や物があり、十分に触れて遊ぶことができる。
 - ロ. 季節の移り変わりにともなう自然の変化は、子ども達の新たな驚きや発見となり、それが遊びを生み出すきっかけとなっていく。
 - ハ. くり返し同じ場所に行くことで、その場に親しみ安定した気持で遊べ、興味をもった者同士の集まりによってかかわりが増し楽しいとりくみとなる。
- ニ. 土手の斜面での遊びのように、年間を通して実現でき、感情の発散や情緒的欲求が満たされる場がある。
- ホ. 全園児、全職員が、時と場を共有し心ゆくまで遊ぶことによって、多くの感動体験を共にし、共感し認めあう中で満足感が得られる。

②多様な活動場面から、特に興味をもち、年間を通して継続した坂すべりについて

この活動は、少数の年長児が持っていたダンボールで、土手の斜面をすべり出したことをきっかけに広がり、土手の遊びの中で最も興味をもってとりくんだ活動である。継続してとりくむ過程における遊びの工夫や発展について考えてみる。



ダンボールや紙袋を使った遊びでは、最初おずおずとすべり出し、「目がまわる」「へんたところへいく」とこわさ半分であったのが、スピードが出る、スピードがますますになり何回もくり返し長時間遊ぶようになってくる。興味をもつと集中してとりくみ、回を重ねていく過程で次第に挑戦性が旺盛になり遊び方にも工夫がましてきた。そこには、遊びを生み出す要素として、友だちとのかかわり、材料の量や質、大きさ、イメージ、場の条件などが多く加わっていくにしたがって、遊びも広がりそれにとまって活動も大きくダイナミックになってきた。そこに斜面の遊びの継続を通して、巧み性、調整力、筋力の発達によることも大きかったであろうと考える。活動意欲を促した要因として次のように考えている。

- イ. 土手の傾斜が園では味わえないスピード感、スリル感があるため、子どもの興味をかき立て、年間を通して継続できる。

ロ. 広い場で、年少・年長が一緒に遊ぶことにより、模倣する、教え合う、我慢し合うなどのかかわりができ、遊びの工夫発展が可能となる。

ハ. 場の条件の違い(草丈、傾斜の度合いや距離、材料、天候)が刺激となり、今までの経験を生かしながら、試してみよう工夫してみようなどの意欲がわく。

ニ. 回を重ねる毎に視野も広がり、持ちこまれる材料も多く、遊びも多様になってくる。

(2) じかにふれた体験を通した観察の広がりから見方とらえ方

毎月の土手の遊びの継続によって、子ども達は、四季・気象等による変化に旺盛な好奇心をわかせる、五感を通して自然を見たり感じたりし興味をましてきた。子ども達が、観察の対象として受けとめたものは、草花・虫・気象・景観、その他自然を広く見ようとしている。

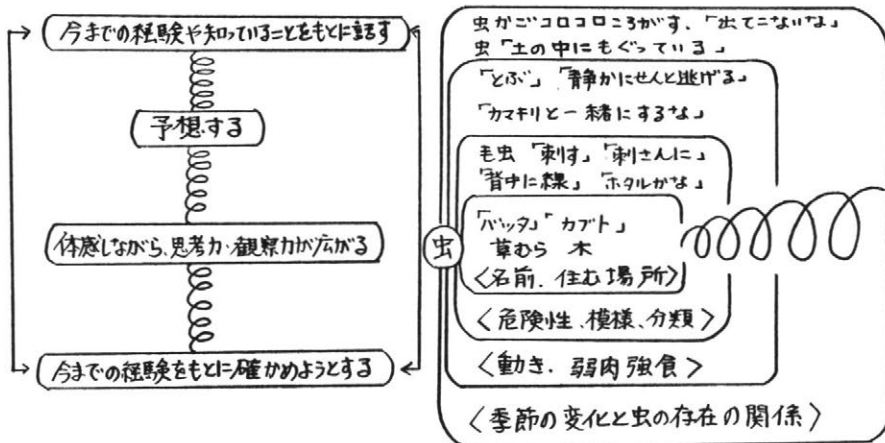
子どもにとっては草花や虫のように直接手で触ったり自分の行動で実際に確かめたりできる対象の方が、観察が広がりとりえやすいようである。観察したものを直感的に受けとめ、自分の経験や知識の範囲内でイメージ化したり意味づけようとする。疑問に思ったり違いに気づいたりすると予想したり実際に行動して試すことでより具体的に見方・とらえ方をしようとする。子どもによっては、さらに図鑑で調べたり人に聞いたりすることで、より確かな見方・とらえ方をしようとするものもいた。継続した中で11月、Y子が砂で囲いを作ってカマキリを入れ、「カク虫とのかかわりとS児の様子について」

日	土手での子どもたちの様子 □…S児	園内でのぶ見の様子	すたて	家庭での様子
4	木のまわりには「カマキリ虫いらないかな」 テントウ虫をみつける	幼稚園の庭にも虫がいるね(オオムシを取って遊ぶ) 「おの家の大きな木がある」		
5	毛虫をみつける「土手に」「土まんに」 背中に糸があるハタタをみつける「ラバハタタ」	「バツの木にカマキリ虫かよく来るよ」 「くどいな小さな虫でも夏のかさがない」 ザリガニ取りに行く「たくさんとれた、おもしろい」 いろいろな小動物ももってくる なだち同士で遊んで決め、家でも遊ぼうとする	子どもたちの様子を学級におにのせとらせる ザリガニ取りの楽しさ 小動物の会話 土手の同じ土着	→家で「反らちと」散歩取りに行く →お母さんと一緒に飼育する
6	黒い虫「ムシは虫 ホタルかな」 木に穴か「カブトがいるよ」 小オオムシをみつける 小オビバツタ「赤ちゃんバツタだ」	「小動物のまわりで、反らちとよしザリガニが土まんに 図鑑をよく見ようになる」 自分たちの遊ばしの中に小動物をもちこねて遊ぶ 見つけた小動物は取った川へ返すことと決意になると 考え始める		
7	虫は二ににるよと草原にかけ行く。 赤ちゃんバツタ、わてやが「いっほい」 「もっと大きくなってから取ろう」全部採る	園のそばを流れる川で魚発見、魚とりをする 「早くまで取らないう、スピードいいんだ」 園外での自然にも視野が広がる	追加で決める 飼育箱について 安全面について	→反らちと魚とりが毎日続く、 雨あがりで水が土まんにまると毎日あり 母養育がついて行く、 遠歩きをするようになる
9	バツタは早く取らないう、カマキリは草丈の長いところにいる 葉と同じ色でわかりにくいかな 「ここにいたから、この葉が「おん」だよ、おんだよ」 「静かに歩かんと逃げようよ」 虫が少なくなっている	虫を飼育する 虫で遊ぶ		→家のまわりで「虫取り」 →お母さんと土手で虫取りをする →家のまわりで「おん」でいる
10	お母さんと虫取りした原っぱに行ってみよう 「おん」はなせ、夕方になると死ぬぞ」 庭にたてのテントウ虫をみつける 「うらがあるかもいん、あつた」 「バツタとよにするな、カマキリに食べられるぞ」	「カク虫園のコロギにむい食べさせよう」 ナシももってくる	保護者からの 役割を全体に 交代させて 自然の中で 遊ぶ	→コロギをとり帰る 弱弱のついで遊ぶ ナシの汁をのめ元気にしているのを 発見した母親はぶ見に知らせ喜 びあう
11	「虫かいない」「冬かくるけんた」 夕で草原をたたく「いないな」 虫か「まごころころがす」→「あてはないな」	「小動物をみつけても、あやみに取らないう」		
12	前に虫取りした場所へ戻って行く 「おん」はなせ お母さんと土まんにもくつたといとらえた			

マキリのレストランだよ」「ここは寝るところ」と枯れ草を入れる……のようにアニミズム、擬人化した見方も生まれ、自然と一体化しながら自然に親しみ愛着心をもつ子どもがふえてきた。

このようなことが全体の姿から考えられたが、さらに強く興味を示した「虫とのかかわり」に焦点をあて考察を加えてみる。

虫についての観察の経過を簡単に図示してみると、次のようなことが言える。



子ども達の虫に対する接し方をみると、その生態について実に広がった見方・とらえ方をしており、生活に即した見方・とらえ方といえよう。このような体験をくり返し積み重ねていくことによって、1年次は6月に赤ちゃんバッタを発見していたのが、2年次では4月に足元の小さな虫に気づく、草むらだけの虫とりから坂すべりをしながら、さらには土手全体で虫とりをするなど発見が早くなったり、活動の場が広がってきている。また、年長児が年少児にとってやる、とり方を教えてやる、知識を伝えるなどの姿から年少児の虫に対する興味、関心が次第に早まっている。そして年長児に教えてもらった喜びが翌年年長になった時、それを年少に返していくなどの好ましい育ち合いが生まれてきている。

S児の例から、土手での経験を園内や家庭での遊びや生活と相互にかかわらせながらくり返すことによって、観察の目を広げ、自ら人や物に積極的に働きかけとらえようとする視野の広がりを知ることができる。そこには、参観日や学級だより、個別連絡ノートなどによって、園や家庭の遊びや生活について、連絡し合い相互理解を図りながら子どもの遊びを見守り支えていくことが大切であるが、S児のように、家庭において母親が子どもの要求に応じ、一緒に土手に行って遊んだり飼育するなどの中で、共感したり助言したりする姿勢が大きく影響を及ぼすものであることがいえる。

(3) 気の合う仲間関係の中で育ち合う好ましい人間関係を求めて

全園児、全職員が、時と場を共有し、心ゆくまで遊ぶことによって多くの感動を共にし、共感し合う中で満足感が得られることは、仲間関係が育つ基盤でもあると考える。こうした中で

同年齢同士、あるいは異年齢同士のかかわり合いについて、教え合う、助け合う、がまんし合う、役割分担や順番を守るなど人間的な体験に目を向け、育ち合う過程を大切にしてきた。このことは、今日子ども達に友だちとのさまざまなかかわりを通して、自分で、自分達で友だちとかかわっていく力をつけていくことが大切であると考えたからでもある。このことについて、実践の中から具体的にとらえてみる。

①年長女児3人グループの坂すべりの例から（抜粋）

教師	幼児の活動 (I子) (R子) (W子)	教師	仲間について
	<p>「かまはれ」 ← → おし</p> <p>I子がおしをRWする</p> <p>3人一緒にのってすべるか すぐ止まる</p> <p>「おしは、 すべらんぬ」と 疑問を投げかけ 共に考える。</p> <p>ダンボールの車輪になった トコを切り長くする。 3人乗り、下まで降りる。</p> <p>おし</p> <p>「ダンボールを破ればいい」</p> <p>もう一回すべるか、 次はおしを あげろ</p>	<p>励ます</p> <p>① ← おしに要求 → R</p> <p>I: → → R 思いや 主張を</p> <p>(R) ↔ (I) ↔ (W) 3人の仲間の遊びとして 互いに仲間を認めあう</p> <p>① ← → X</p> <p>R ↔ W</p> <p>I リードする</p>	<p>問題の意識づけ 共感・見守る</p>
<p><u>教師や友だちとのかかわりについての考察。</u></p> <p>・気の合った仲間関係の中では、遊びの中で生じた欲求、疑問、問題など互に言葉や行動で素直に表現しあい仲間に対して共感的態度がみられる。こうした中でこそ、役割分担や遊びの工夫、理解、守る態度など自然に生まれ育っていくものと思われる。</p> <p>・遊びの見通しや、子どもへの育ちを予測し、見届けながら生じた問題や疑問を自分たちで解決しようと言葉や態度で援助しようとしたことは、仲間の問題として意識づけ仲間関係を深めさせ、自分たちの遊びを創りだそうとする意欲の支えとなっていると考え。</p>			

〔①②③を通しての考察〕

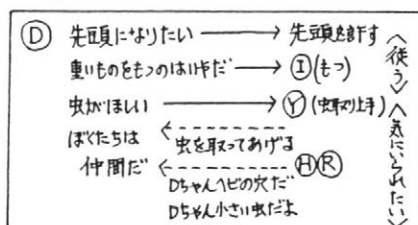
- 同年齢、異年齢の気の合う仲間関係が育っていくと、自分の言いたいことが素直に言葉や行動に出して言えるようになってくる。そうした中では、互いに認め合い、相手を受容する態度が育ち教え合う、学び合う、助け合うなどの好ましい人間関係も自然と育っていくことがわかる。しかし仲間関係が育つ過程においては、②のD児の例に見られるように、力関係を認めながらも、まわりの子を育てていくようにすることが大切である。
- 異年齢とのかかわりは、③に見られるように年少児は、年長児と一緒に遊びながら、遊び方を学んだり、がまんする、ゆずる姿が見られる。一方、年長児はリーダーシップをとる喜びを味わいながら年少児へ遊びを教える、いたわる、心くばりをする姿などがみられる。このよ

うなかわり合いこそ、好ましい人間関係を育てていく上で大切にしていかなければならないと考える。

② D児を中心とした力関係の中でとらえた仲間関係の話について (抜粋)

D児は、体も大きく活動的であり発想も豊かであるが、他に指示命令的な言動で自分の思い通りに進めようとするので、他の子にとっては、こわい存在であり、認められたい欲求をもっている。そのためD児と、とりまく仲間の変容について着てみる。

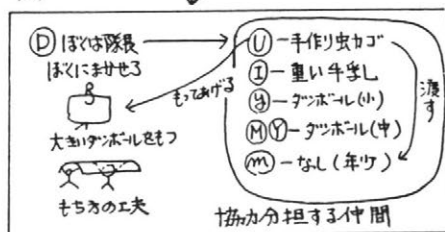
6月



※ 力関係でリーダーシップをとる。

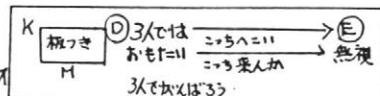
道中

9月

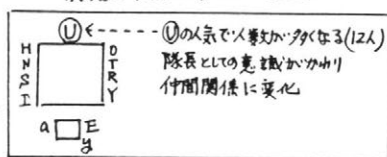


※ 力関係の中でリーダーシップをとるから協力的な姿を見せる

10月



※ D児Eの気持をくみとる。
 最後まで一緒にツボルを運ぶ



※ U児を求め他の子の音ち
 隊長としての意識の変化

いぼるもの → 親むかぬ 仲間の要求と
 かのあつめ 変容してはまるめめん

6月いになりになって従っている状態が10月には①のよさに気がつき②のグループから離れ大きく変化している。このことから、6月の従う、気にはらたいたという言動を、一見マイナスと見がちであるが、その中に①児とつきあいなから、おそひ方、接し方を学び、はたいてい自分を出し合えるようになる。それと共に、②児も次第に、まわりの子にも目を向け、よさに気がつくようになるなど育ち合う関係からみて、その時期のかかわり方として大切にし、見直しをむて支えてやることが必要である。

③気の合う通園班仲間の中で安定し、年長児とさまざまなかわりの中で育っていった年少(A)児について

月	教師	④児の活動	おりの子ども ○年少 ②年長	分析
4		<p>「わー、きいね」 ← 「④ちゃんにもらった」と花を渡す</p> <p>④くん②に あったの ← 「④の後」についていく → 「④お花どこにあるか教えてあげる」</p> <p>← 「今へと本取って来て渡す」 → 「あすこにあるか、もう一回」</p> <p>「うん、先生にあげるもん」 →</p> <p>↓ 遊びの転換</p> <p>あたりを見まわし「④くんのとこへ行く」とかけていく</p>	<p>⑤上手につく「花が11つあり」とかけていく</p>	<ul style="list-style-type: none"> 年長児の声に刺激され、7分取る→Tにあげてくりかえすという行動をかりたっている。 喜んでいる言葉でくはるが遊びの満足感、意欲へつながる。 ④と⑤は通園班仲間であり、④は年少へ教えることで喜びを⑤はすなおに受け入れる。 安定した居場所がある。遊びの意欲となる。
5		<p>班長(牛乳係)になる。</p> <p>牛乳4個もて来る ← 「④牛乳4個もて来い」</p> <p>← 「ほく教えてやる」</p> <p>④と平をすき出税 ← 「ビニール袋をすかし牛乳を入れ」</p> <p>← 「先生おもしろいよ」 ← 「④にもたせる」</p> <p>「よかつたね④くん」 → 「④おいかもてやるわ」</p> <p>↓</p> <p>④と大型ダンボールで遊ぶ</p> <p>④と見ている</p> <p>④と11つは「おめね」とあやまる。</p>		<ul style="list-style-type: none"> 登降園の班長であったことか、あそびの班長ともなる。 牛乳当番の仕事が伝ったされる。 Tに許す満ちたそうとすこそを年長児が満ちたしている。 年長児へのおせれをあらわす
7		<p>板のダンボールを1人でもて来る</p> <p>「11つはすべさう」 → X ④いやだ</p> <p>3人ですべる。 ← 「④①すべさ」</p> <p>仲間が3人になる。</p> <p>「ほくのだに」 → 「④①ダンボールもって行こうとする」</p> <p>④と11つはすべる ← 「すべしたあとおまえのうんか」</p> <p>④①くんか「おんじ」 → 「④と11つはすべる」</p>		<ul style="list-style-type: none"> 年長児とスムーズにかかわり遊びの仲間入りかできる。 主張しながらも「歩ゆる」④年少の主張を受け入れようとする「おまえのうんか」

このグループは、年長①名、年少④②③名の4人グループである。

気ままに行動するA児ではあるが、年長児に対しては、一目おき、素直に受け入れた行動力をとっている。そうした態度から、牧まする、一世の年長と一緒にあそぶ、年長から刺激を受けてあそび出す、教えてもらう、主張できるようになる。などの過程を経て、あそびや当番の仕方、友だちとの接し方などを身につけていっている。当初、通園班仲間の遊びや、行動を支えてきたことか、大きな要因となっていると思う。

付記●「土手の遊び」の年間指導計画

月		4	5	6	7	9	
ねらい		<ul style="list-style-type: none"> 自分の遊びたいことをみつけ友だちと一緒に楽しく遊ぶ(長) 年長の遊びをみたり、自分のやりたいことをみつけ自由に遊ぶ(少) 土手の遊びに興味をもつ(共) まわりの草花や小動物に気づき採ったり、さがしたり、知っていることを言いあったりして興味関心をます(共) 		<ul style="list-style-type: none"> 身体を動かし、自己を発散しながら存分に遊ぶ(共) 		<ul style="list-style-type: none"> 思ったこと感じたこと気づいたことを素直に話す(長) いろいろな遊びに気づくと共に興味をもった遊びを友だちと一緒にくり返したり楽しんだりする(少) 	
土手の自然現象		<p style="text-align: center;">自然が豊かである</p> ぼかぼかいい気持ち 風が気持ちいい ぼかかになりたい 雲がきれい いちご・こいのぼり・川の小動物 神立橋が見える					
土手	活動	摘む 集める ちぎる なめる ふってみる 話す くらべる みたてて 作って遊ぶ 遊びに使う					
	草花にかかわる	<ul style="list-style-type: none"> 菜の花 大根の花 	<ul style="list-style-type: none"> 赤つめ 大根の実 白つめ 小判草 ピーピー豆 	<ul style="list-style-type: none"> 月見草 かわらなでしこ 赤つめ 白つめ 	<ul style="list-style-type: none"> のこんぎく 月見草 えのころぐさ おおばこ 	<ul style="list-style-type: none"> つゆくさ いぬたて えのころぐさ おおあれちのぎく 	ごちそうにする
を	かかわる活動	足元の虫 気づく 発見 採る 赤ちゃんの虫 探す 逃がす 遊ぶ だんだん大きくなる 成長した虫					
	小動物にかかわる活動	意味づける(黒い虫=ホタル、カブト=木)アニミズム的とらえ方 特性を知る 知識豊か					
か	利用した活動	材料豊富に いろいろな種類で ころがる おしりがあつい 材料が大きく、イ競争するイメージ (肥料袋)はみだす めがまわる 暗い スピードが出ます ほうり出される 競争、脱出遊び (ダンボールで)めがまわる スピードが出る スピードがます 順番、役割					
	川(水)にかかわる活動	のぞく 石をなげる 手足をつけてみる 全身で入る 「何かいるかな」「カッパがいる」「いい気持ち」 小動物をみつける					
その他	その他	園内の遊びがもちこまれるが単発的 園内の変化に反応した遊び 天候が左右し、生まれた遊び(日陰の遊び、お家作り) イメージをもつ					
配	物的環境	①リヤカーで材料を運ぶ(多量に、発達にそくした材料が選べるように多種) 子ども 自分でもって行きたいものがあればもって行く				子ども達の遊びを 自分で、自分達で	
	人的環境	通園班で(道中、牛乳タイム) 年少児を安定させ土手遊びに興味をもつ一個の自立、安全面を配慮して長→少へ、教える・世話をす。年長児の自覚など好ましいかわりを期待				異年齢仲よしグル 互いに刺激しあい 安全な集団行動や	
事項	事項	①(少)一緒に遊ぶ積極的なかわりの中で、認め共感、さそいかけるなど受容的な助言をする (長)見守る・共感する・応答的な助言をする				思考的助言(疑問	

10	11	12	1	2	3
<ul style="list-style-type: none"> 遊びのめあてをもち、考えたり工夫したり体を十分に動かして遊ぶ(共) 友だちと一緒に遊びをみつけたり、やりたい遊びを心ゆくまで楽しむ(少) 			<ul style="list-style-type: none"> 厳しい冬の自然を体験し寒さにめげずがんばって遊ぶ(共) 風を利用した遊び場を生かした遊びを工夫する(共) 	<ul style="list-style-type: none"> 冬の自然の中から、春をみつけ来る春に期待をもちながら先生や友だちと十分に遊ぶ(共) 	
息をひそめ淋しくなる			自然が息づく		
動くにあついね ねると気持ちいいね。○○みたいな雲だ	さむい	いたい		ぼかぼかしてきた 山が近くにみえる	いい気持ち
				摘む	集める 話す
(イメージをもつ)					
おなもみ あし すすき がま	めなもみ おなもみ すすき あし	めなもみ おなもみ	めなもみ おなもみ	つくし おなもみ	緑の草 おなもみ
卵					オタマジャクシ、 水すましなど取る 飼育する
ストーリー性の芽生え(土の中でねむっている)					生命の感動
メージ・他の材料が加わる 全身で 少々 をもって→全身で(前転、後転) 怪我も平気 みのおの遊び→ かさなりあって					
ぶつかりやさん とびのりイメージ(乗物)→ おしくらまんじゅう かさなりあって タコをあげながら					
気持ちいい つめたい いたいと体感する 氷さがし → ぬるくなった					
場をいかしながら 園での遊び(探険、集団遊び、ルールのある遊び)を楽しむ 続くようにする ①といっしょに 大集団で					
側面からささえる 少しもっていく めあてが達成できるような補助材料など					
材料を準備し、もって行く(遊びのめあて、仲間意識)					
ープで(道中、牛乳タイム)					
ながら、遊びの伝承広がり深まりを期待グループ編成に流動性あり 態度を身につける					
追求 試行)をする					

V 研究の結論と今後の課題

3年間の継続実践を通して、斐伊川土手の自然環境を生かした活動が、本園の子ども達にとって欠かすことのできない活動として定着した。また教師自身の教材を見る目や子どもを見る目についての共通理解を深め、見通しをもって指導できるようになったことは、研究の大きな成果でもあった。以下実践結果から確かめ合ったことについて述べてみる。

- (1) くり返し継続していく過程で、場に親しみ安定したとりくみとなる。それが、遊びの広がりやイメージの広がりとなり、遊びを発展させていく基盤となって、広場、草むら、土手の斜面など、場の条件を生かした多様な活動を生み出し、自主的行動が備わってきた。
- (2) 年少から年長へと発達の過程を見通し、じかにふれる体験の積み重ねを図る中で、草花や小動物などの事物や事象等に、教師と共に驚き発見し、体感体得しながら、見方・とらえ方を深め、豊かな感受性へと変容をもたらした。
- (3) 異年齢、同年齢の気の合う仲間関係を大切に支えてきたことにより、お互いに自分を出し合いながらさまざまなかかわりを促し、教え合う、助け合う、がまんし合う、思いやるなどの好ましい人間関係を育て、社会性や生き方が拡大してきた。
- (4) 開かれた幼稚園をめざし、参観日、行事等を活用し、親子のふれ合う機会を積極的にもったり、学級だより、個別連絡ノートなどによって家庭連携を進めてきたことにより、親子の土手遊びや戸外遊びが積極的になり、親の自然への物の見方や考え方が変わってきた。

また、入園前に土手遊びを経験している子が多くなっているのは、実践が普及してきたからであると思う。こうした実態をふまえた指導計画の検討や修正が必要となってきた。

以上、本活動を中心とした実践を通して「活動を継続する、積み重ねていく」ことの大切さを改めて実感している。具体的な指導にあたっての課題は、継続すればするほどいろいろでてくる。今後は、子ども本来の素朴な遊びを大切に、さらに生まれてきた課題を解決するための実践を重ねながら、ふるさと意識をめばえさせたい。

付記「土手の遊び」の年間指導計画（前頁）

〈研究にたずさわった人〉

妹尾 延子
佐藤 一恵
永田 陽子
大平 由美子
片山 由美子
飯塚 琴代